

校長は静かに読みはじめた。聲はやや錆びを帯びた底に殆ど筆舌を超越した哀切の情をこもらせてゐる。到底他人の作つた弔辭を読み上げてゐるなどとは思はれない。保吉はひそかに校長の俳優的才能に敬服した。本堂はもとよりひつそりしてゐる。身動きさへ滅多にするものはない。校長は愈洗痛に「君、資性穎悟兄弟に友に」と讀みつづけた。すると突然親族席に誰かくすくす笑ひ出したものがある。のみならずその笑ひ聲はだんだん聲高になつて來るらしい。保吉は内心ぎよつとしながら、藤田大佐の肩越しに向う側の人人を物色した。と同時に場所柄を失して笑ひ聲だと思つたものは泣き聲だつたことを發見した。聲の主は妹である。舊式の束髪を俯向けたかけに絹の手巾を顔に當てた器量好しの娘さんである。そればかりではない。弟も——武骨さうに見えた大學生もやはり涙をすすり上げてゐる。と思ふと老人もしつきりなしに鼻紙を出してはしめやかに鼻をかみつづけてゐる。保吉はかう云ふ光景の前にまづ何よりも驚きを感じた。それからまんまと看客を泣かせた悲劇の作者の満足を感じた。しかし最後に感じたものはそれらの感情よりも遙かに大きい、何とも云はれぬ氣の毒さである。尊い人間の心の奥へ知らず泥足を踏み入れた、あやまるにもあやまれない氣の毒さである。保吉はこの氣の毒さの前に、一時間に亙る葬式中、始めて悄然と頭を下げた。本多少佐の親族諸君はかう云ふ英吉利語の教師などの存在も知らなかつたのに違ひない。しかし保吉の心の中には道化の服を着たラスコルニコフが一人、七八年たつた今日もぬかるみの往來へ跪いたまま、平に諸君の高免を請ひたいと思つてゐるのである。……

X
X
X
X
X

葬式のあつた日の暮れがたである。汽車を降りた保吉は海岸の下宿へ歸る爲、篠垣ばかり連つた避暑地の裏通りを通りかかつた。狭い往來は靴の底にしつとりと砂をしめらせてゐる。霞ももういつか下り出したらしい。垣の中に簇がった松は疎らに空を透かせながら、かすかに脂の香を放つてゐる。保吉は頭を垂れたまま、さう云ふ静かさにも頓着せず、ぶらぶら海の方へ歩いて行つた。

彼は寺から歸る途中、藤田大佐と一しよになつた。すると大佐は彼の作つた弔辭の出來榮えを賞讃した上、「急焉玉碎す」と云ふ言葉は如何にも本多少佐の死にふさはしいなどと云ふ批評を下した。それだけでも親族の涙を見た保吉を弱らせるには十分である。其處へ又同じ汽車に乗つた愛敬者の田中中尉は保吉の小説を批評してゐる讀賣新聞の月評を示した。月評を書いたのはまだその頃文名を馳せてゐたN氏である。N氏はさんざん罵倒した後、かう保吉に止めを刺してゐた。——「海軍××學校教官の餘技は全然文壇には不必要である」

半時間もかからずに書いた弔辭は意外の感銘を與へてゐる。が、幾晩も電燈の光りに推敲を重ねた小説はひそかに豫期した感銘の十分の一も與へてゐない。勿論彼はN氏の言葉を一笑に付する餘裕を持つてゐる。しかし現在の彼自身の位置は容易に一笑に付することは出來ない。彼は弔辭には成功し、小説には見事に失



敗した。これは彼自身の身になつて見れば、心細い氣のすることは事實である。一體運命は彼の爲にいつかう云ふ悲しい喜劇の幕を下してくれるであらう？……

保吉はふと空を見上げた。空には枝を張つた松の中に全然光りのない月が一つ、赤銅色にはつきりかかつてゐる。彼はその月を眺めてゐるうちに小便をした氣がし出した。人通りは幸ひ一人もない。往來の左右は不相變ひつそりした篠垣の列である。彼は右側の垣の下へ長ながと寂しい小便をした。

するとまだ小便をしてゐるうちに、保吉の目の前の篠垣はぎいと後ろへ引きあけられた。垣だとばかり思つてゐたものは垣のやうに出來た木戸だつたのであらう。その又木戸から出て來たのを見れば、口髻を蓄へた男である。保吉は途方に暮れたから、小便だけはしつづけたまま、出來るだけゆつくり横向きになつた。「困りますなあ。」

男はぼんやりかう云つた。何だか當惑そのものの人間になつたやうな聲をしてゐる。保吉はこの聲を耳にした時、急に小便も見えないほど日の暮れてゐるのを發見した

六の宮の姫君

一

六の宮の姫君の父は、古い宮腹の生れだつた。が、時勢にも遅れ勝ちな、昔氣質の人だつたから、官も兵部大輔より昇らなかつた。姫君はさう云ふ父母と一しよに、六の宮のほとりにある、木高い屋形に住まつてゐた。六の宮の姫君と云ふのは、その土地の名前に據つたのだつた。

父母は姫君を寵愛した。しかしやはり昔風に、進んでは誰にもめあはせなかつた。誰か云ひ寄る人があればと、心待ちに待つばかりだつた。姫君も父母の教へ通り、つつましく朝夕を送つてゐた。それは悲しみも知らないと同時に、喜びも知らない生涯だつた。が、世間見ずの姫君は、格別不満も感じなかつた。「父母さへ達者でゐてくれれば好い。」——姫君はさう思つてゐた。

古い池に枝垂れた櫻は、年毎に乏しい花を開いた。その内に姫君も何時の間にか、大人寂びた美しさを具へ出した。が、頼みに思つた父は、年頃酒を過ぎた爲に、突然故人になつてしまつた。のみならず母も半年ほどの内に、返らない歎きを重ねた擧句、とうとう父の跡を追つて行つた。姫君は悲しいと云ふよりも、

途方に暮れずにはゐられなかつた。實際ふところ子の姫君にはたつた一人の乳母の外に、たよるものはないのだつた。

乳母はけなげにも姫君の爲に、骨身を惜まず働き續けた。が、家に持ち傳へた螺鈿の手篋や白がねの香爐は、何時か一つづつ失はれて行つた。と同時に召使ひの男女も、誰からか暇をとり始めた。姫君にも暮らしの辛い事は、だんだんはつきりわかるやうになつた。しかしそれをどうする事も、姫君の力には及ばなかつた。姫君は寂しい屋形の對に、やはり昔と少しも變らず、琴を弾いたり歌を詠んだり、單調な遊びを繰返してゐた。

すると或秋の夕ぐれ、乳母は姫君の前へ出ると、考へ考へこんな事を云つた。

「甥の法師の頼みますには、丹波の前司ながしの殿が、あなた様に會はせて頂きたいとか申して居るさうでございます。前司はかたちも美しい上、心ばえも善いさうでございますし、前司の父も受領とは申せ、近しい上達部の子でもございますから、お會ひになつては如何でございますませう？ かやうに心細い暮しをなさいますよりも、少しは益しかと存じます。……」

姫君は忍び音に泣き初めた。その男に肌身を任せるのは、不如意な暮しを扶ける爲に、體を賣るのも同様だつた。勿論それも世の中には多いと云ふ事は承知してゐた。が、現在さうなつて見ると、悲しさは又格別だつた。姫君は乳母と向き合つた儘、葛の葉を吹き返す風の中に、何時までも袖を顔にしてゐた。……

二

しかし姫君は何時の間にか、夜毎に男と會ふやうになつた。男は乳母の言葉通りやさしい心の持ち主だつた。顔かたちもさすがにみやびてゐた。その上姫君の美しさに、何も彼も忘れてゐる事は、殆ど誰の目にも明らかだつた。姫君も勿論この男に、悪い心は持たなかつた。時には頼もしいと思ふ事もあつた。が、蝶鳥の几帳を立てた陰に、燈臺の光を眩しがりながら、男と二人むつびあふ時にも、嬉しいとは一夜も思はなかつた。その内に屋形は少しづつ、花やかな空氣を加へ初めた。黒棚や簾も新たに、召使ひの數も殖えたのだつた。乳母は勿論以前よりも、活き活きと暮しを取り賄つた。しかし姫君はさう云ふ變化も、寂しさうに見てゐるばかりだつた。

或時雨の渡つた夜、男は姫君と酒を酌みながら、丹波の國にあつたと云ふ、氣味の悪い話をした。出雲路へ下る旅人が大江山の麓に宿を借りた。宿の妻は丁度その夜、無事に女の子を産み落した。すると旅人は生家の中から、何とも知れぬ大男が、急ぎ足に外へ出て來るのを見た。大男は唯一年は八歳、命は自害と云ひ捨てたなり、忽ち何處かへ消えてしまつた。旅人はそれから九年目に、今度は京へ上る途中、同じ家に宿つて見た。所が實際女の子は、八つの年に變死してゐた。しかも木から落ちた拍子に、鎌を喉へ突き立ててゐた。——話は全體かう云ふのだつた。姫君はそれを聞いた時に、宿命のせんなさに脅された。その女の

子に比べれば、この男を頼みに暮してゐるのは、まだしも仕合せに違ひなかつた。

「なりゆきに任せる外はない。」——姫君はさう思ひながら、顔だけはあでやかにほほ笑んでゐた。

屋形の軒に當つた松は、何度も雪に枝を折られた。姫君は晝は昔のやうに、琴を弾いたり双六を打つたり

した。夜は男と一つ褥に、水鳥の池に下りる音を聞いた。それは悲しみも少ないと同時に、喜びも少ない朝

夕だつた。が、姫君は不相變、この懶い安らかさの中に、はかない満足を見出してゐた。

しかしその安らかさも、思ひの外急に盡きる時が來た。やつと春の返つた或夜、男は姫君と二人になると、

「そなたに會ふのも今宵ぎりぢや」と云ひ悪くさうに口を切つた。男の父は今度の除目に、陸奥の守に任ぜら

れた。男もその爲に雪の深い奥へ、一しよに下らねばならなかつた。勿論姫君と別れるのは、何よりも男に

は悲しかつた。が、姫君を妻にしたのは、父にも隠してゐたのだから、今更打ち明ける事は出来悪くかつた。

男はため息をつきながら、長長とさう云ふ事情を話した。

「しかし五年たてば任終ぢや、その時を樂しみに待つてたもれ。」

姫君はもう泣き伏してゐた。たとひ戀しいとは思はぬまでも、頼みにした男と別れるのは、言葉には盡せ

ない悲しさだつた。男は姫君の背を撫でては、いろいろ慰めたり勵ましたりした。が、これも二言目には、

涙に聲を曇らせるのだつた。

其處へ何も知らない乳母は、年の若い女房たちと、銚子や高坏を運んで來た。古い池に枝垂れた櫻も、蕾

を持つた事を話しながら……

三

六年目の春は返つて來た。が、奥へ下つた男は遂に都へは歸らなかつた、その間に召使ひは一人も残らず、

ちりぢりに何處かへ立ち退いてしまふし、姫君の住んでゐた東の對も或年の大風に倒れてしまつた。姫君は

それ以來乳母と一しよに侍の廊を住居にしてゐた。其處は住居とは云ふものの、手狭でもあれば住み荒

してもあり、僅に雨露の凌げるだけだつた。乳母はこの廊へ移つた當座、いたはしい姫君の姿を見ると、

涙を落さずにはゐられなかつた。が、又或時は理由もないのに、腹ばかり立ててゐる事があつた。

暮しのつらいのは勿論だつた。棚の厨子はとうの昔、米や青菜に變つてゐた。今では姫君の袷や袴も身に

ついてゐる外は残らなかつた。乳母は焚き物に事を缺けば、立ち腐れになつた寢殿へ、板を剝ぎに出かける

位だつた。しかし姫君は昔の通り、琴や歌に氣を晴らしながら、ぢつと男を待ち續けてゐた。

するとその年の秋の月夜、乳母は姫君の前へ出ると、考へ考へこんな事を云つた。

「殿はもう御歸りにはなりますまい。あなた様も殿の事は、お忘れになつては如何でございませう。就ては

この頃或典藥之助が、あなた様にお會はせ申せと、責め立ててゐるのでございますが……」

姫君はその話を聞きながら、六年以前の事を思ひ出した。六年以前には、いくら泣いても、泣き足りない

程悲しかったが、今は體も心も餘りそれには疲れてゐた。「唯靜かに老い朽ちたい。」……その外は何も考へなかつた。姫君は話を聞き終ると、白い月を眺めたなり、懶げにやつれた顔を振つた。
「わたしはもう何も入らぬ。生きようとも死なうとも一つ事ぢや。……」

×

×

×

×

×

丁度これと同じ時刻、男は遠い常陸の國の屋形に、新しい妻と酒を斟んでゐた。妻は父の目がねにかなつた。この國の守の娘だつた。

「あの音は何ぢや？」

男はふと驚いたやうに、靜かな月明りの軒を見上げた。その時なぜか男の胸には、はつきり姫君の姿が浮んでゐた。

「栗の實が落ちたのでございませう。」

常陸の妻はさう答へながら、ふつつかに銚子の酒をさした。

四

男が京へ歸つたのは、丁度九年目の晩秋だつた。男と常陸の妻の族と、——彼等は京へはひる途中、日が

らの悪いのを避ける爲に、三四日粟津に滞在した。それから京へはひる時も、晝の目目に立たないやうに、わざと日の暮を選ぶ事にした。男は鄙にゐる間も、二三度京の妻のもとへ、懇ろな消息をこつづけてやつた。が、使が歸らなかつたり、幸ひ歸つて來たと思へば、姫君の屋形がわからなかつたり、一度も返事は手に入らなかつた。それだけに京へはひつたとなると、戀しさも亦一層だつた。男は妻の父の屋形へ無事に妻を送りこむが早いか、旅支度も解かずに六の宮へ行つた。

六の宮へ行つて見ると、昔あつた四足の門も、檜皮葺きの寢殿や對も、悉く今はなくなつてゐた。その中に唯残つてゐるのは、崩れ残りの築土だけだつた。男は草の中に佇んだ儘、茫然と庭の跡を眺めまはした。其處には半ば埋もれた池に、水葱が少し作つてあつた。水葱はかすかな新月の光に、ひっそりと葉を簇らせてゐた。

男は政所と覺しいあたりに、傾いた板屋のあるのを見つけた。板屋の中には近寄つて見ると、誰か人影もあるらしかつた。男は闇を透かしながら、そつとその人影に聲をかけた。すると月明りによるぼひ出たのは、何處か見覚えのある老尼だつた。

尼は男に名がられると、何も云はずに泣き續けた。その後やつと途切れ途切れに、姫君の身の上を話し出した。

「御見忘れでもございませうが、手前は御内に仕へて居つた、はした女の母でございませう。殿のお下りにな

つてからも、娘はまだ五年ばかり、御奉公致して居りました。が、その内に夫と共、但馬へ下る事になりましたから、手前もその節娘と一しよに、御暇を頂いたのでございます。所がこの頃姫君の事が、何かと心にかかりますので、手前一人京へ上つて見ますと、御覽の通り御屋形も何もなくなつてゐるのでございませぬか？ 姫君も何處へいらつしやつた事やら、——實は手前もさき頃から、途方に暮れて居るのでございませぬ殿は御存知もございませぬが、娘が御奉公申して居つた間も、姫君のお暮しのおいたはしさは、申しやうもない位でございました。……」

男は一部始終を聞いた後、この腰の曲つた尻に、下の衣を一枚脱いで渡した。それから頭を垂れた儘、黙然と草の中を歩み去つた。

五

男は翌日から姫君を探しに、洛中を方方歩きまはつた。が、何處へどうしたのか、容易に行き方はわからなかつた。

すると何日か後の夕ぐれ、男はむら雨を避ける爲に、朱雀門の前にある、西の曲殿の軒下に立つた。其處にはまだ男の外にも、物乞ひらしい法師が一人、やはり雨止みを待ちわびてゐた。雨は丹塗りの門の空に、寂しい音を立て續けた。男は法師を尻目にしながら、苛立たしい思ひを紛らせたさに、あちこち石畳みを歩

いてゐた。その内にふと男の耳は、薄暗い窓の檻子の中に、人のゐるらしいけはひを捉へた。男は殆ど何の氣なしに、ちらりと窓を覗いて見た。

窓の中には尼が一人、破れた蓑をまとひながら、病人らしい女を介抱してゐた。女は夕ぐれの薄明りにも、無氣味な程瘦せ枯れてゐるらしかつた。しかしその姫君に違ひない事は、一目見ただけでも十分だつた。男は聲をかけようとした。が、淺ましい姫君の姿を見ると、なぜかその聲が出せなかつた。姫君は男のゐるのも知らず、破れ蓑の上に寝反りを打つと、苦しさにこんな歌を詠んだ。

「たまぐらのすきまの風もさむかりき、身はならはしのものにざりける。」

男はこの聲を聞いた時、思はず姫君の名前を呼んだ。姫君はさすがに枕を起した。が、男を見るが早いか何かかすかに叫んだきり、又蓑の上に俯伏してしまつた。尼は、——あの忠實な乳母は、其處へ飛びこんだ男と一しよに、慌てて姫君を抱き起した。しかし抱き起した顔を見ると、乳母は勿論男さへも、一層慌てずにゐられなかつた。

乳母はまるで氣の狂つたやうに、乞食法師のもとへ走り寄つた。さうして、臨終の姫君の爲に、何なりとも經を讀んでくれと云つた。法師は乳母の望み通り、姫君の枕もとへ座を占めた。が、經文を讀誦する代りに、姫君へかう言葉をかけた。

「往生は人手に出来るものではござらぬ。唯御自身怠らずに、阿彌陀佛の御名をお唱へなされ。」

「あれ、あそこに火の燃える車が……」
「そのやうな物にお恐れなさるな。御佛さへ念ずればよろしうござる。」

法師はやや聲を厲ました。すると姫君は少時の後、又夢うつつのやうに眩き出した。
「金色の蓮華が見えまする。天蓋のやうに大きい蓮華が……」

法師は何か云はうとした。が、今度はそれよりもさきに、姫君が切れ切れに口を開いた。
「蓮華はもう見えませぬ。跡唯暗い中に、風ばかり吹いて居りまする。」
「一心に佛名を御唱へなされ。なぜ一心に御唱へなさらぬ？」

法師は殆ど叱るやうに云つた。が、姫君は絶え入りさうに、同じ事を繰り返すばかりだつた。
「何も、——何も見えませぬ、暗い中に風ばかり、——冷たい風ばかり吹いて参りまする。」

男や乳母は涙を呑みながら、口の内に彌陀を念じ續けた。法師も勿論合掌した儘、姫君の念佛を扶けてゐた。さう云ふ聲の雨に交る中に、破れ薙を敷いた姫君は、だんだん死に顔に變つて行つた……

六

それから何日か後の月夜、姫君に念佛を勧めた法師は、やはり朱雀門の前の曲殿に、破れ衣の膝を抱へて

ゐた。すると其處へ侍が一人、悠悠と何か歌ひながら、月明りの大路を歩いて來た。侍は法師の姿を見ると、草履の足を止めたなり、さりげないやうに聲をかけた。
「この頃この朱雀門のほとりに、女の泣き聲がするさうではないか？」

法師は石畳みに蹲まつた儘、たつた一言返事をした。
「お聞きなされ。」

侍はちよいと耳を澄ませた。が、かすかな蟲の音の外は、何一つ聞えるものもなかつた。あたりには唯松の匂が、夜氣に漂つてゐるだけだつた。侍は口を動かさうとした。しかしまだ何も云はない内に、突然何處からか女の聲が、細ほそと歎きを送つて來た。

侍は太刀に手をかけた。が、聲は曲殿の空に、一しきり長い尾を引いた後、だんだん又何處かへ消えて行つた。

「御佛を念じておやりなされ。——」
法師は月光に顔を擡げた。

「あれは極樂も地獄も知らぬ、腑甲斐ない女の魂でござる。御佛を念じておやりなされ。」
しかし侍は返事もせず、法師の顔を覗きこんだ。と思ふと驚いたやうに、その前へいきなり両手をついた。

「内記の上人ではございませんか？ どうして又このやうな所に——」
在俗の名は慶滋の保胤、世に内記の上人と云ふのは、空也上人の弟子の中にも、やん事ない高德の沙門だつた。

藪の中

檢非違使に問はれたる木樵りの物語

さやうでございます。あの死骸を見つけたのは、わたしに違ひございません。わたしは今朝何時もの通り、裏山の杉を伐りに参りました。すると山陰の藪の中に、あの死骸があつたのでございます。あつた處でございませうか？ それは山科の驛路からは、四五町隔たつて居りませう。竹の中に瘦せ杉の交つた、人氣のない所でございます。

死骸は縋の水干に、都風のさび烏帽子をかぶつた儘、仰向けに倒れて居りました。何しろ一刀と申すもの、胸もとの突き傷でございませうから、死骸のまはりの竹の落葉は、蘇芳に滲みたやうでございませう。いえ、血はもう流れては居りません。傷口も乾いて居つたやうでございませう。おまけに其處には、馬蠅が一匹、わたしの足音も聞えないやうに、べつたり食ひついて居りましたつけ。

太刀か何かは見えなかつたか？ いえ、何もございません。唯その側の杉の根がたに、繩が一筋落ちて居りました。それから、——さうさう、繩の外にも櫛が一つございました。死骸のまはりにあつたものは、この

二つぎりでございます。が、草や竹の落葉は、一面に踏み荒されて居りましたから、きつとあの男は殺される前に、餘程手痛い働きでも致したのに違ひございません。何、馬はゐなかつたか？ あそこは一體馬などには、はひれない所でございます。何しろ馬の通ふ路とは、藪一つ隔たつて居りますから。

檢非違使に問はれたる旅法師の物語

あの死骸の男には、確かに昨日遇つて居ります。昨日の、——さあ、午頃でございます。場所は關山から山科へ、參らうと云ふ途中でございます。あの男は馬に乗つた女と一しよに、關山の方へ歩いて參りました。女は牟子を垂れて居りましたから、顔はわたしにはわかりません。見えたのは唯萩重ねらしい、衣の色ばかりでございます。馬は月毛の、——確か法師の馬のやうでございます。丈でございますか？ 丈は四寸もございましたか？——何しろ沙門の事でございますから、その邊ははつきり存じません。男は、——いえ、太刀も帯びて居れば、弓矢も携へて居りました。殊に黒い塗りの籠へ、二十あまり征矢をさしたのは、唯今でもはつきり覚えて居ります。

あの男がかやうにならうとは、夢にも思はずに居りましたが、眞に人間の命なぞは、如露亦如電に違ひございません。やれやれ、何とも申しやうのない、氣の毒な事を致しました。

檢非違使に問はれたる放免の物語

わたしが搦め取つた男でございますか？ これは確かに多襄丸と云ふ、名高い盗人でございます。尤もわたしが搦め取つた時には、馬から落ちたのでございます、栗田口の石橋の上に、うんうん呻つて居りました。時刻でございますか？ 時刻は昨夜の初更頃でございます。何時ぞやわたしが捉へ損じた時にも、やはりこの紺の水干に、打出した太刀を佩いて居りました。唯今はその外にも御覽の通り、弓矢の類さへ携へて居ります。さやうでございますか？ あの死骸の男が持つてゐたのも、——では人殺しを働いたのは、この多襄丸に違ひございません。革を巻いた弓、黒塗りの籠、鷹の羽の征矢が十七本、——これは皆、あの男が持つてゐたものでございませう。はい。馬も仰有る通り、法師の月毛でございます。その畜生に落されるとは何かの因縁に違ひございません。それは石橋の少し先に、長い端綱を引いた儘、路ばたの青芒を食つて居りました。

この多襄丸と云ふやつは、洛中に徘徊する盗人の中でも、女好きのやつでございます。昨年秋鳥部寺の寶頭廬の後の山に物詣でに来たらしい女房が一人、女の童と一しよに殺されてゐたのは、こいつの仕業だとか申して居りました。その月毛に乗つてゐた女も、こいつがあつた男を殺したとなれば、何處へどうしたかわかりません。差出がましようございますが、それも御詮議下さいまし。

檢非違使に問はれたる媼の物語

はい、あの死骸は手前の娘が、片附いた男でございます。が、都のものとございませぬ。若狭の國府の侍でございます。名は金澤の武弘、年は二十六歳でございます。いえ、優しい氣立でございますから、遺恨なぞ受ける筈はございません。

娘でございますか？ 娘の名は眞砂、年は十九歳でございます。これは男にも劣らぬ位、勝氣の女でございますが、まだ一度も武弘の外には、男を持つた事はございません。顔は色の淺黒い、左の眼尻に黒子のある、小さい瓜實顔でございます。

武弘は昨日娘と一しよに、若狭へ立つたのでございますが、こんな事になりますとは、何と云ふ因果でございませう。しかし娘はどうなりましたやら、婿の事はあきらめましても、これだけは心配でなりません。どうかこの姥の一生の願ひでございますから、たとひ草木を分けましても、娘の行方をお尋ね下さいまし。何に致せ憎いのはその、多襄丸とか何とか申す、盗人のやつでございます。婿ばかりか、娘までも……(跡は泣き入りて言葉なし。)

× × × × × ×

多襄丸の白狀

あの男を殺したのはわたしです。しかし女は殺しはしません。では何處へ行つたのか？ それはわたしにもわからないのです。まあ、お待ちなさい。いくら拷問にかけられても、知らない事は申されませぬ。その上わたしもかうなれば、卑怯な隠し立てはしないつもりです。

わたしは昨日の午少し過ぎ、あの夫婦に出會ひました。その時風の吹いた拍子に、傘子の垂絹が上つたものですから、ちらりと女の顔が見えたのです。ちらりと、——見えたと思ふ瞬間には、もう見えなくなつたのですが、一つにはその爲もあつたのでせう。わたしにはあの女の顔が、女菩薩のやうに見えたのです。わたしはその咄嗟の間に、たとひ男は殺しても、女は奪はうと決心しました。

何、男を殺すなどは、あなた方の思つてゐるやうに、大した事ではありません。どうせ女を奪ふとなれば、必、男は殺されるのです。唯わたしは殺す時に、腰の太刀を使ふのですが、あなた方は太刀は使はない、唯權力で殺す、金で殺す、どうかするとお爲ごかしの言葉だけでも殺すでせう。成程血は流れない、男は立派に生きてゐる。——しかしそれでも殺したのです。罪の深さを考へて見れば、あなた方が悪いか、どちらが悪いかわかりません。(皮肉なる微笑)

しかし男を殺さずとも、女を奪ふ事が出来れば、別に不足はない訣です。いや、その時の心もちでは、出

来るだけ男を殺さずに、女を奪はうと決心したのです。が、あの山科の驛路では、とてもそんな事は出来ません。そこでわたしは山の中へ、あの夫婦をつれこむ工夫をしました。

これも造作はありません。わたしはあの夫婦と途づれになると、向うの山には古塚がある、この古塚を發いて見たら、鏡や太刀が澤山出た、わたしは誰も知らないやうに、山の陰の藪の中へ、さう云ふ物を埋めてある、もし望み手があるならば、どれでも安い値に賣り渡したい、——と云ふ話をしたのです。男は何時かわたしの話に、だんだん心を動かし初めました。それから、——どうです、慾と云ふものは恐しいではありませんか？ それから半時もたたない内に、あの夫婦はわたしと一しよに、山路へ馬を向けてゐたのです。

わたしは藪の前へ来ると、實はこの中に埋めてある、見に来てくれと云ひました。男は慾に涙いてゐますから、異存のある筈はありません。が、女は馬も下りずに、待つてゐると云ふのです。又あの藪の茂つてゐるのを見ては、さう云ふのも無理はありません。わたしはこれも實を云へば、思ふ壺にはまつたのですから、女一人を残した儘、男と藪の中へはひりました。

藪は少時の間は竹ばかりです。が、半町程行つた處に、やや開いた杉むらがある、——わたしの仕事を仕遂げるには、これ程都合の好い場所はありません。わたしは藪を押し分けながら、實は杉の下に埋めてあると、尤もらしい謠をつきました。男はわたしにさう云はれると、もう瘦せ杉が透いて見える方へ、一生懸命に進んで行きます。その内に竹が疎らになると、何本も杉が並んでゐる、——わたしは其處へ来るが早い

いきなり相手を組み伏せました。男も太刀を佩いてゐるだけに、力は相當にあつたやうですが、不意を打たれてはたまりません。忽ち一本の杉の根がたへ、括りつけられてしまひました。繩ですか？ 繩は盗人の有難さに、何時堀を越えるかわかりませんから、ちやんと腰につけてゐたのです。勿論聲を出させない爲にも、竹の落葉を頼張らせれば、外に面倒はありません。

わたしは男を片付けてしまふと、今度は又女の所へ、男が急病を起したらしいから、見に来てくれと云ひに行きました。これも圖星に當つたのは、申し上げるまでもありますまい。女は市女笠を脱いだ儘、わたしに手をとられながら、藪の奥へはひつて來ました。所が其處へ來て見ると、男は杉の根に縛られてゐる、——女はそれを一目見るなり、何時の間に懷から出してゐたか、きらりと小刀を引き抜きました。わたしはただ今までに、あの位氣性の烈しい女は、一人も見つた事がありません。もしその時でも油斷してゐたらば、一突きに脾腹を突かれたでせう。いや、それは身を躲した所が、無二無三に斬り立てられる内には、どんな怪我也仕兼ねなかつたのです。が、わたしも多襄丸ですから、どうにかかうにか太刀も抜かず、とうとう小刀を打ち落しました。いくら氣の勝つた女でも、得物がなければ仕方がありません。わたしはどうとう思ひ通り、男の命は取らずとも、女を手に入れる事は出來たのです。

男の命は取らずとも、——さうです。わたしはその上にも、男を殺すつもりはなかつたのです、所が泣き伏した女を後に、藪の外へ逃げようとする、女は突然わたしの腕へ、氣違ひのやうに縋りつきました。し

かも切れ切れに叫ぶのを聞けば、あなたが死ぬか、夫が死ぬかどちらか一人死んでくれ、二人の男に恥を見せるのは、死ぬよりもつらいと云ふのです。いや、その内どちらにしろ、生き残つた男につれ添ひたい、——さうも喘ぎ喘ぎ云ふのです。わたしはその時猛然と、男を殺したい氣になりました。(陰鬱なる興奮)

こんな事を申し上げると、きつとわたしはあなた方より、残酷な人間に見えるでせう。しかしそれはあなた方が、あの女の顔を見ないからです。殊にその一瞬間の、燃えるやうな瞳を見ないからです。わたしは女と眼を合せた時、たとひ神鳴に打ち殺されても、この女を妻にしたいと思ひました。妻にしたい、——わたしの念頭にあつたのは、唯かう云ふ一事だけです。これはあなた方の思ふやうに、卑しい色慾ではありません。もしその時色慾の外に、何も望みがなかつたとすれば、わたしは女を謝倒しても、きつと逃げてしまつたでせう。男もさうすればわたしの太刀に、血を塗る事にはならなかつたのです。が、薄暗い藪の中に、ちつと女の顔を見た刹那、わたしは男を殺さない限り、此處は去るまいと覺悟しました。

しかし男を殺すにしても、卑怯な殺し方はしたくありません。わたしは男の繩を解いた上、太刀打ちをしると云ひました。(杉の根がたに落ちてゐたのは、その時捨て忘れた繩なのです。)男は血相を變へた儘、太刀を引抜き抜きました。と思ふと口も利かずに、憤然とわたしへ飛びかかりました。——その太刀打ちがどうなつたかは、申し上げるまでもありますまい。わたしの太刀は二十三合目に、相手の胸を貫きました。二十三合目に、——どうかそれを忘れずに下さい。わたしも今でもこの事だけは、感心だと思つてゐるので

す。わたしと二十合斬り結んだものは、天下にあの男一人だけですから。(快活なる微笑)
わたしは男が倒れると同時に、血に染まつた刀を下げたなり、女の方を振り返りました。すると、——どうです、あの女は何處にもゐないではありませんか？ わたしは女がどちらへ逃げたか、杉むらの間を探して見ました。が、竹の落葉の上には、それらしい跡も残つてゐません。又耳を澄ませて見ても、聞えるのは唯男の喉に、斷末魔の音がするだけです。

事によるとあの女は、わたしが太刀打を始めるが早いか、人の助けでも呼ぶ爲に、藪をくぐつて逃げたのかも知れない。——わたしはさう考へると、今度はわたしの命ですから、太刀や弓矢を奪つたなり、すぐ又もとの山路へ出ました。其處にはまだ女の馬が、靜かに草を食つてゐます。その後の事は申し上げるだけ、無用の口敷に過ぎますまい。唯、都へはひる前に、太刀だけはもう手放してゐました。——わたしの白狀はこれだけです。どうせ一度は樗の梢に、懸ける首と思つてゐますから、どうか極刑に遇はせて下さい。(昂然たる態度)

清水寺に来れる女の懺悔

——その紺の水干を着た男は、わたしを手ごめにしてしまふと、縛られた夫を眺めながら、嘲けるやうに笑ひました。夫はどんなに無念だつたでせう。が、いくら身悶えをしても、體中にかかつた細目は、一層ひ

しひしと食ひ入るだけです。わたしは思はず夫の側へ、轉ぶやうに走り寄りました。いえ、走り寄りたのです。しかし男は咄嗟の間に、わたしを其處へ蹴倒しました。丁度その途端です。わたしは夫の眼の中に、何とも云ひやうのない輝きが、宿つてゐるのを覺りました。何とも云ひやうのない、——わたしはあの眼を思ひ出すと、今でも身震ひが出ずにはゐられません。口さへ一言も利けない夫は、その刹那の眼の中に一切の心を傳へたのです。しかも其處に閃いてゐたのは、怒りでもなければ悲しみでもない、——唯わたしを蔑んだ、冷たい光だつたではありませんか？ わたしは男に蹴られたよりも、その眼に打たれたやうに、我知らず何か叫んだぎり、とうとう氣を失つてしまひました。

その内にやつと氣がついて見ると、あの紺の水干の男は、もう何處かへ行つてゐました。跡には唯杉の根がたに、夫が縛られてゐるだけです。わたしは竹の落葉の上に、やつと體を起したなり、夫の顔を見守りました。が、夫の眼の色は、少しもさつきと變りません。やはり冷たい蔑みの底に、憎しみの色を見せてゐるのです。恥しさ、悲しさ、腹立たしさ、——その時のわたしの心の中は、何と云へば好いかわかりません。わたしはよろよろと立ち上りながら、夫の側へ近寄りました。

「あなた。もうかうなつた上は、あなたと御一しよには居られません。わたしは一思ひに死ぬ覺悟です。しかし、——しかしあなたもお死になすつて下さい。あなたはわたしの恥を御覽になりました。わたしはこの儘あなた一人、お賤し申す譯には參りません。」

わたしは一生懸命に、これだけの事を云ひました。それでも夫は思はずに、わたしを見つめてゐるばかりなのです。わたしは裂けさうな胸を抑へながら、夫の太刀を探しました。が、あの盗人に奪はれたのでせう。太刀は勿論弓矢さへも、藪の中には見當りません。しかし幸ひ小刀だけは、わたしの足もとに落ちてゐるのです。わたしはその小刀を振り上げると、もう一度夫にかう云ひました。

「ではお命を頂かせて下さい。わたしもすぐにお供します。」

夫はこの言葉を聞いた時、やつと肩を動かしました。勿論口には笹の落葉が、一ぱいにつまつてゐますから、聲は少しも聞えません。が、わたしはそれを見ると、忽ちその言葉を覺りました。夫はわたしを蔑んだ儘、「殺せ」と一言云つたのです。わたしは殆ど、夢うつつの内に、夫の縹の水干の胸へ、づぶりと小刀を刺し通しました。

わたしは又この時も、氣を失つてしまつたのでせう。やつとあたりを見まはした時には、夫はもう縛られた儘、とうに息が絶えてゐました。その蒼ざめた顔の上には、竹に交つた杉むらの空から、西日が一すぢ落ちてゐるのです。わたしは泣き聲を呑みながら、死骸の繩を解き捨てました。さうして、——さうしてわたしがどうなつたか？ それだけはもうわたしには、申し上げる力もありません。兎に角わたしはどうしても、死に切る力がなかつたのです。小刀を喉に突き立てたり、山の裾の池へ身を投げたり、いろいろな事もして見ましたが、死に切れずにかうしてゐる限り、これも自慢にはなりません。 (寂しき微笑) わたしのやうな

腑甲斐ないものは、大慈大悲の觀世音菩薩も、お見放しなすつたものかも知れません。しかし夫を殺したわたしは、盗人の手ごめに遇つたわたしは、一體どうすれば好いのでせう？ 一體わたしは、——わたしは——
—(突然烈しき歎歎)

巫女の口を借りたる死霊の物語

——盗人は妻を手ごめになると、其處へ腰を下した儘、いろいろ妻を慰め出した。おれは勿論口は利けない。體も杉の根に縛られてゐる。が、おれはその間に、何度も妻へ目くばせをした。この男の云ふ事を眞に受けるな、何を云つても謙と思へ、——おれはそんな意味を傳へたいと思つた。しかし妻は悄然と笹の落葉に坐つたなり、ちつと膝へ目をやつてゐる。それがどうも盗人の言葉に、聞き入つてゐるやうに見えるではないか？ おれは妬しさに身悶えをした。が、盗人はそれからそれへと、巧妙に話を進めてゐる。一度でも肌身を汚したとなれば、夫との仲も折り合ふまい。そんな夫に連れ添つてゐるより、自分の妻になる氣はないか？ 自分はいとしいと思へばこそ、大それた眞似も働いたのだ、——盗人はとうとう大膽にも、さう云ふ話さへ持ち出した。

盗人にかう云はれると、妻はうつとりと顔を擡げた。おれはまだあの時程、美しい妻は見事がない。しかしその美しい妻は、現在縛られたおれを前に、何と盗人に返事をしたか？ おれは中有に迷つてゐても、

妻の返事を思ひ出す毎に、噴きこぼさなかつたためしはない。妻は確にかう云つた、——「では何處へでもつれて行つて下さい。」(長き沈黙)

妻の罪はそれだけではない。それだけならばこの闇の中に、いま程おれも苦しみはしまし。しかし妻は夢のやうに、盗人に手をとられながら、藪の外へ行かうとすると、忽ち顔色を失つたなり、杉の根のおれを指さした。「あの人を殺して下さい。わたしはあの人が生きてゐては、あなたと一しよにはゐられません。」——妻は氣が狂つたやうに、何度もかう叫び立てた。「あの人を殺して下さい。」——この言葉は嵐のやうに、今でも遠い闇の底へ、まつ逆様におれを吹き落さうとする。一度でもこの位憎むべき言葉が、人間の口を出た事があらうか？ 一度でもこの位呪はしい言葉が、人間の耳に觸れた事があらうか？ 一度でもこの位、——(突然逆る如き嘲笑)その言葉を聞いた時は、盗人さへ色を失つてしまつた。「あの人を殺して下さい。」——妻はさう叫びながら、盗人の腕に縋つてゐる。盗人はちつと妻を見た儘、殺すとも殺さぬとも返事をしない——と思ふか思はない内に、妻は竹の落葉の上へ、唯一蹴りに蹴倒された、(再)逆る如き嘲笑)盗人は靜かに兩腕を組むと、おれの姿へ眼をやつた。「あの女はどうするつもりだ？ 殺すか、それとも助けてやるか？ 返事は唯領けば好い。殺すか？——おれはこの言葉だけでも、盗人の罪は赦してやりたい。(再)長き沈黙)

妻はおれがためらふ内に、何か一聲叫ぶが早い、忽ち藪の奥へ走り出した。盗人も咄嗟に飛びかかつた

が、これは袖さへ捉へなかつたらしい。おれは唯幻のやうに、さう云ふ景色を眺めてゐた。盗人は妻が逃げ去つた後、太刀や弓矢を取り上げると、一箇所だけおれの細を切つた。「今度はおれの身の上だ。」——おれは盗人が藪の外へ、姿を隠してしまふ時に、かう呟いたのを覚えてゐる。その跡は何處も静かだつた。いや、まだ誰かの泣く聲がする。おれは細を解きながら、ちつと耳を澄ませて見た。が、その聲も氣がついて見れば、おれ自身の泣いてゐる聲だつたではないか？（三度、長き沈黙）

おれはやつと杉の根から、疲れ果てた體を起した。おれの前には妻が落した、小刀が一つ光つてゐる。おれはそれを手にとると、一突きにおれの胸へ刺した。何か腥い塊がおれの口へこみ上げて来る。が、苦しきは少しもない。唯胸が冷たくなると、一層あたりがしんとしてしまつた。ああ、何と云ふ静かさだらう。この山陰の藪の空には、小鳥一羽囀りに來ない。唯杉や竹の杪に、寂しい日影が漂つてゐる。日影が、——それも次第に薄れて来る。もう杉や竹も見えない。おれは其處に倒れた儘、深い静けさに包まれてゐる。その時誰か忍び足に、おれの側へ來たものがある。おれはそちらを見ようとした。が、おれのまはりには何時か薄闇が立ちこめてゐる。誰か、——その誰かは見えない手に、そつと胸の小刀を抜いた。同時におれの口の中には、もう一度血潮が溢れて来る。おれはそれぎり永久に、中有の闇へ沈んでしまつた。……

きりしとほろ上人傳

小序

これは予が嘗て三田文學紙上に掲載した『奉教人の死』と同じく、予が所藏の切支丹版「れげんだ・おうれあ」の一章に、多少の潤色を加へたものである。但し『奉教人の死』は本邦西教徒の逸事であつたが、「きりしとほろ上人傳」は古來治く歐洲天主教國に流布した聖人行狀記の一種であるから、予の「れげんだ・おうれあ」の紹介も、彼是相俟つて始めて全豹を彷彿する事が出来るかも知れない。

傳中殆ど滑稽に近い時代錯誤や場所錯誤が續出するが、予は原文の時代色を損ふまいとした結果、わざと何等の筆削をも施さない事にした。大方の諸君子にして、予が常識の有無を疑はれなければ幸甚である。

一 山ずまひのこと

遠い昔のことでおちやる。「しりあ」の國の山奥に、「れぶろぼす」と申す山男がおちやつた。その頃「れぶろぼす」きりしとほろ上人傳

「ほす」ほどな大男は、御主の目輪の照らせ給ふ天が下はひろしと云へ、絶えて一人もおりなかつたと申す。まづ身の長は三丈あまりもおぢやらうか。葡萄蔓かとも見ゆる髪の中には、いたいけな四十雀が何羽とも知れず巢くうて居つた。まいて手足はさながら深山の松檜にまがうて、足音は七つの谷谷にも響するばかりでおぢやる。さればその日の糧を獵らうにも、鹿熊なんどのたぐひをとりひしくは、指の先の一ひねりぢや。又は折ふし海べに下り立つて、すなごらうと思ふ時も、海松房ほどな髯の垂れた懸をひたと砂につけて、ある程の水を一吸ひ吸へば、鯛も鰹も尾鱈をふるうて、ざはざはと口へ流れこんだ。ぢやによつて沖を通る廻船さへ、時ならぬ潮のさしひきに漂はされて、水夫楫取の慌てふためく事もおぢやつたと申し傳へた。

なれど「れぶろぼす」は、生得心根のやさしいものでおぢやれば、山ずまひの杓獵夫は元より、往來の旅人にも害を加へたと申す事はおりない。反つて杓の伐りあぐんだ樹は押し倒し、獵夫の追ひ失うた獲物はとつておさへ、旅人の負ひなやんだ荷は肩にかけて、なにかと親切をつくいたれば、遠近の山里でもこの山男を憎まうずものは、誰一人おりなかつた。申にもとある一村では、羊飼のわらんべが行き方知れずになつた折から、夜さりそのわらんべの親が家の引き窓を押し開くものがあつたれば、驚きまどうて上を見たに、箕ほどな「れぶろぼす」の掌が、よく眠入つたわらんべをかいのせて、星空の下から悠悠と下りて來たこともおぢやると申す。何と山男にも似合ふまじい、殊勝な心映ではおぢやるまいか。

されば山賤たちも「れぶろぼす」に出逢へば、餅や酒などをふるまうて、へだてなく語らふことも度度お

ぢやつた。さるほどにある日のこと、杓の一むれが樹を伐らうずとて、檜山ふかくわけ入つたに、この山男がのさのさと熊笹の奥から現れたれば、もてなし心に落葉を焚いて、徳利の酒を暖めてとらせた。その滴ほどな徳利の酒さへ、「れぶろぼす」は大きに悦んだけしきで、頭の中に巢食うた四十雀にも、杓たちの食み残いた飯をばらまいてとらせながら、大あぐらをかいて申したは、

「それがしも人間と生まれたれば、あつばれ功名手がらをも致いて、末は大名ともならうずる」と云へば、杓たちも打ち興じて、

「道理かな。おぬしほどな力量あれば、城の二つ三つも攻め落さうは、片手業にも足るまじい。」と云うた。その時「れぶろぼす」が、ちともの案ずる體で申すやうは、

「なれどここに一つ、難儀なことがおぢやる。それがしは日頃山ずまひのみ致いて居れば、どの殿の旗下に立つて、合戦を仕らうやら、とんと分別を致さうやらもござない。就いては當今天下無雙の強者と申すは、いづくの國の大將でござらうぞ。誰にもあれそれがしは、その殿の馬前に馳せ參じて、忠節をつくさうする」と問うたれば、

「さればその事でおぢやる。まづわれらが料理にては、今天が下に『あんちおきや』の帝ほど、武勇に富んだ大將もおぢやるまい。」と答へた。山男はそれを聞いて、斜ならず悦びながら、

「さらばすぐさま、打ち立たうず。」とて、小山のやうな身を起いたが、ここに不思議がおぢやつたと申すは、

頭の中に巢食うた四十雀が、一時にけたたましい羽音を響いて、空に網を張つた森の梢へ、雛も餘さず飛び立つてしまつた事ぢや。それが斜に枝を延いた檜のうへに上つたれば、とんとその樹は四十雀が實のつたやうぢやとも申さうぞ。「れぶろぼす」はこの四十雀のふるまひを、訝しげな眼で眺めて居つたが、やがて又初一念を思ひ起いた顔色で、足もとにどうた杣たちにねんごろな別れをつけてから、再び森の熊笹を踏み開いて、元來たやうにのしのしと、山奥へ獨り往んでしまつた。

されば「れぶろぼす」が大名にならうぞ願望がことは、間もなく遠近の山里にも知れ渡つたが、ほど經て又かやうな噂が、風のためより傳はつて參つた。と申すは國さかひの湖で、大ぜいの漁夫たちが泥に吸はれた大船をひきなづんで居つた所に、怪しげな山男がどこからか現れて、その船の帆柱をむずとつかんだと見てあれば、苦もなく岸へひきよせて、一同の驚き惘れるひまに、早くも姿をかくしたと云ふ噂ぢや。ぢやによつて「れぶろぼす」を見知つたほどの山賤たちは、皆この情ぶかい山男が、愈「しりや」の國中から退散したことを悟つたれば、西空に屏風を立てまはした山山の峰を仰ぐ毎に、限りない名残りが惜しまれて、自らため息がもれたと申す。まいてあの羊飼のわらんべなどは、夕日が山かげに沈まうず時は、必村はづれの一本杉にたかだかとよぢのぼつて、下につどうた羊のむれも忘れたやうに、「れぶろぼす」戀しや、山を越えてどち行つたと、かなしげな聲で呼びつづけた。さてその後「れぶろぼす」が、如何なる仕合せにめぐり合ふたか、右の一條を知らうず方方はまづ次のくだりを讀ませられい。

二 俄大名のこと

さるほどに「れぶろぼす」は、難なく「あんちおきや」の城裡に參つたが、田舎の山里とはこと變り、この「あんちおきや」の都と申すは、この頃天が下に並びない繁華の土地がらゆる、山男が巷へはいるや否や、見物の男女夥しうむらがつて、はては通行することも出来まいと思はれた。されば「れぶろぼす」もとんと行かうず方角を失うて、人波に腰を揉まれながら、とある大名小路の辻に立ちすくんでしまつたに、折よくそこへ來かかつたは、帝の御輦をとりまいた、侍たちの行列ぢや。見物の群集はこれに先追はれて山男を一人残した儘、見る見る四方へ遠のいてしまつた。ぢやによつて「れぶろぼす」は、大象の足にもまがはうずしたたかな手を大地について、御輦の前に頭を下げながら、

「これは、『れぶろぼす』と申す山男でござるが、唯今『あんちおきや』の帝は、天下無雙の大將と承り、御奉公申さうぞとて、はるばるこれまでまかり上つた。」と申し入れた。これよりさき帝の同勢も、「れぶろぼす」の姿に膽をけして、先手は既に槍薙刀の鞘をも拂はうずけしきであつたが、この殊勝な言を聞いて、異心もあるまじいものと思ひつらう、とりあへず行列をそこに止めて、供頭の口からその趣をしかじかと帝へ奏聞した。帝はこれを聞き召されて、

「かほどの大男のことなれば、一定武勇も人に超えつらう。召し抱へてとらせい」と、仰せられたれば、格

別の詮議とあつて、すぐさま同勢の内へ加へられた。「れぶろぼす」の悦びは申すまでもあるまじ、ぢやによつて帝の行列の後から、三十人の力士もえ昇くまじい長櫃十棹の宰領を承つて、ほど近い御所の門まで、鼻たかだかと御供仕つた。まことこの時の「れぶろぼす」が、山ほどな長櫃を肩にかけて、行列の人馬を目の下に見下しながら、大手をふつてまかり通つた異形奇體の姿こそ、目ざましいものでおぢやつたらう。さてこれより「れぶろぼす」は、漆紋の麻袴に朱鞞の長刀を横たへて、朝夕「あんちおきや」の帝の御所を守護する役者の身となつたが、幸ここに功名手がらを顯さうず時節が到来したと申すは、ほどなく隣國の大軍がこの都を攻めとらうと、一度に押し寄せて參つたことぢや。元來この隣國の大將は、獅子王をも手打ちにすると聞えた、萬夫不當の剛の者でおぢやれば、「あんちおきや」の帝とても、なほざりの合戦はなるまじい。ぢやによつて今度の先手は、今まゐりながら「れぶろぼす」に仰せつけられ、帝は御自ら本陣に御聲をすすめて、號令を司られることとなつた。この采配を承つた「れぶろぼす」が、悦び身にあまりにて、足の踏みども覺えなんだは、毛頭無理もおぢやるまい。

やがて味方も整へば、帝は「れぶろぼす」をまつさきに、貝金陣太鼓の音も勇しう、國さかひの野原に繰り出された。かくと見た敵の軍勢は、元より望むところの合戦ぢやによつて、なじかは寸刻もためらはず。野原を蔽うた旗差物が、俄に波立つたと見てあれば、一度にとつと鬨をつくつて、今にも懸け合はさうずけしきに見えた。この時「あんちおきや」の人数の中より、一人悠悠と進み出したは、別人でもない「れぶろ

ぼす」ぢや。山男がこの日の出で立ち、水牛の兜に南蠻鐵の鎧を着下いて、双渡り七尺の大薙刀を柄みじかにおつとつたれば、さながら城の天主に魂が宿つて、大地も狭しと揺ぎ出した如くでおぢやる。さるほどに「れぶろぼす」は兩軍の唯中に立ちはだかると、その大薙刀をさしかざいて、遙に敵勢を招きながら、雷のやうな聲で呼ばはつたは、

「遠からんものは音にも聞け、近くばよつて目にも見よ。これは『あんちおきや』の帝が陣中に、さるものありと知られたる『れぶろぼす』と申す剛の者ぢや。厚くも今日お先手の大將を承り、ここに軍を出いたれば、われと思はうずるものどもは、近う寄つて勝負せよやつ」と申した。その武者ぶりの凄じさは、昔へりしで「の豪傑に「こりあて」と聞えたが、鱗綴の大鎧に銅の矛を掲げて、百萬の大軍を叱咤したにも、劣るまじいと見えたれば、さすが隣國の精兵たちも、しばしがほどは鳴を静めて、出で合うずものもおりなかつた。ぢやによつて敵の大將も、この山男を討たいでは、かなふまじいと思ひつらう。美しい物の具に三尺の太刀をぬきかざいて、龍馬に泡を食ませながら、これも大音に名乗りをあげて、まつしぐらに「れぶろぼす」へ打つてかかつた。なれどもこなたはものともせいで、大薙刀をとりのべながら、二太刀三太刀あしらうたが、やがて得物をからりと捨て、猿臂をのばいたと見るほどに、早くも敵の大將を鞍からひきぬいて、目もはるかな大空へ、礫の如く投げ飛ばした。その敵の大將がきりきりと宙に舞ひながら味方の陣中へどうと落ちて、亂離骨灰になつたのと、「あんちおきや」の同勢が鯨波の聲を轟かいて、帝の御聲を中にと

きりしほろし人傳

りこめ、雪崩の如く攻めかかつたのが、間に髪をも入れまじい、殆ど同時の働きぢや。されば隣國の軍勢は、一たまりもなく浮き足立つて、武器馬具のたくひをなげ捨てながら、四分五裂に落ち失せてしまつた。まことや「あんちおきや」の帝がこの日の大勝利は、味方の手にとつた兜首の數ばかりも、一年の日數よりは多かつたと申すことでおぢやる。

ぢやによつて帝は御悦び斜ならず、目でたく凱歌の裡に軍をめぐらされたが、やがて「れふろぼす」には大名の位を加へられ、その上諸臣にも一勝利の宴を賜つて、ねんごろに勳功をねぎらはれた。その勝利の宴を賜つた夜のことと思召されい。當時國國の形儀とあつて、その夜も高名な琵琶法師が、大燭臺の火の下に節面白う絃を調じて、今昔の合戦のありさまを、手にとる如く物語つた。この時「れふろぼす」は、かねての大願が成就したことでおぢやれば、涎も垂れようずばかり笑み傾いて、餘念もなく珍陀の酒を酌みかはいてあつた所に、ふと酔つた眼にもとまつたは、錦の幔幕を張り渡した正面の御座にわせられる帝の異なるまひぢや。何故と申せば、檢校のうたふ物語の中に、悪魔と云ふ言がおぢやると思へば、帝はあわたたしう御手をあげて、必ず十字の印を切らせられた。その御ふるまひが怪しからずものものしげに見えたれば、「れふろぼす」は同席の侍に、

「何として帝は、あのやうに十字の印を切らせられるぞ」と、率爾ながら尋ねて見た。處がその侍の答へたは、

「總じて悪魔と申すものは、天が下の人間をも掌にのせて弄ぶ、大力量のものでおぢやる。ぢやによつて帝も、悪魔の障礙を拂はうずと思召され、再三十字の印を切つて、御身を守らせ給ふのぢや」と申した。「れふろぼす」はこれを聞いて、迂論げに又問ひ返したは、

「なれど今『あんちおきや』の帝は、天が下に並びない大剛の大將と承つた。されば悪魔も帝の御身には、一指をだに加へまじい。」と申したが、侍は首をふつて、

「いや、いや、帝も、悪魔ほどの御威勢はおぢやるまい。」と答へた。山男はこの答を聞くや否や、大いに憤つて申したは、

「それがしが帝に隨身し奉つたは、天下無雙の強者は帝ちやと承つた故でおぢやる。しかるにその帝さへ、悪魔には腰を曲げられるとあるなれば、それがしはこれよりまかり出でて、悪魔の臣下と相成らうず」と喚めながら、ただちに珍陀の盃を抛つて、立ち上らうと致したれば、一座の侍はさらいでも「れふろぼす」が今度の功名を妬ましう思つて居つたによつて、

「すは、山男が謀叛するわ」と異口同音に罵り騒いで、やにはに四方八方から搦めとらうと競ひ立つた。もとより「れふろぼす」も日頃ならば、さうなくこの侍だちに組みとめられう筈もあるまじい。なれどもそ夜は珍陀の酔に前後も不覺の體ぢやによつて、しばしがどこそ多勢を相手に、組んづほぐれつ、揉み合つても居つたが、やがて足をふみすべらいて、思はずどうとまろんだれば、えたりやおうと侍だちは、いや

が上にも折り重つて、怒り狂ふ「れぶろぼす」を高手小手に括り上げた。帝もことの體たらくを始終残らず御覽ぜられ、

「恩を讐で返すにつくいやつめ、匆匆土の牢へ投げ入れい」と、大いに逆鱗あつたによつて、あはれや「れぶろぼす」はその夜の内に、見るもいぶせいで地の底の牢舎へ、禁獄せられる身の上となつた。さてこの「あんちおきや」の牢内に囚はれとなつた「れぶろぼす」が、その後如何なる仕合せにめぐり合つたか、右の一條を知らず方方は、まづ次のくだりを讀ませられい。

三 魔往來のこと

さるほどに「れぶろぼす」は、未だ細目もゆるされいで、土の牢の闇の底へ、投げ入れられたことでおぢやれば、しばしがほどは赤子のやうに、唯おうおうと聲を上げて、泣き喚くより外はおりなかつた。その時、いづくよりも知らず、緋の袍をまとうた學匠が、忽然と姿を現いて、やさしげに問ひかけたは、

「如何に「れぶろぼす」。おぬしは何として、かやうな所に居るぞ」とあつたれば、山男は今更ながら、瀧のやうに涙を流して、

「それがしは、帝に背き奉つて、悪魔に仕へようずと申したれば、かやうに牢舎致されたのでおぢやる。おう、おう、おう」と歎き立てた。學匠はこれを聞いて、再び、やさしげに尋ねたは、

「さらばおぬしは、今もなほ悪魔に仕へようず望がおりやるか」と申すに、「れぶろぼす」は頭を堅に動かいて、

「今もなほ、仕へようず」と答へた。學匠は大いにこの返事を悦んで、土の牢も鳴りどよむばかり、からからと笑ひ興じたが、やがて三度やさしげに申したは、

「おぬしの所は、近頃殊勝千萬ぢやによつて、これよりただちに牢舎を赦いてとらさうずる。」とあつて、身にまとうた緋の袍を「れぶろぼす」が上に蔽うたれば、不思議や總身の縛めは、悉くはらりと切れてしまつた。山男の驚きは申すまでもあるまじい。されば恐る恐る身を起いて、學匠の顔を見上げながら、慇懃に禮を爲いて申したは、

「それがしが細目を赦いてたまはつた御恩は、生生世世忘却つかまつるまじい。なれどもこの土の牢をば、何として忍び出で申さうずる」と云うた。學匠はこの時又えせ笑ひをして、

「かうすべいに、なじかは難からう」と申しも果す、やにはに緋の袍の袖をひらいて「れぶろぼす」を小脇に抱いたれば、見る見る足下が暗くなつて、もの狂はしい一陣の風が吹き起つたと思ふほどに、二人は何時か宙を踏んで、牢舎を後に飄飄と「あんちおきや」の都の夜空へ、火花を飛いて舞ひあがつた。まことやその時は學匠の姿も、折から沈まうず月を背負うて、さながら怪しげな大蝙蝠が、黒雲の翼を一文字に飛行する如く見えたと申す。

されば「れぶろぼす」は、態、膽を消いて、學匠もろとも中空を射る矢のやうに翔りながら、戦く聲で尋ねたは、

「そもそもごへんは、何人でおぢやらうぞ。ごへんほどな大神通の博士は、世にも又とあるまじいと覺ゆる。」と申したに、學匠は忽ち底氣味悪いほくそ笑みを洩しながら、わざとさりげない聲で答へたは、

「何を隠さう、われらは、天が下の人間を掌にのせて弄ぶ、大力量の剛の者ぢや」とあつたによつて、「れぶろぼす」は始めて學匠の本性が、悪魔ぢやと申すことに合點が參つた。さるほどに悪魔はこの問答の間

さへ、妖靈星の流れる如く、ひた走りに宙を走つたれば、「あんちおきや」の都の燈火も、今ははるかな闇の底に沈みはてて、やがて足もとに浮んで參つたは、音に聞く「えじつと」の沙漠でおぢやらう。幾百里とも

知れまじい砂の原が、有明の月の光の中に、夜目にも白白と見え渡つた。この時學匠は爪長な指をのべて、下界をゆびさしながら申したは、

「かしこの糞家には、さる有験の隠者が住ひ致して居ると聞いた。まづあの屋根の上を下らうぞ。」とあつて、「れぶろぼす」を小脇に抱いた儘、とある沙山陰のあばら家の棟へ、ひらひらと空から舞ひ下つた。

こなたはそのあばら家に行ひすまいて居つた隠者の翁ぢや、折から夜のふけたのも知らず、油火のかすかな光の下で、御經を讀誦し奉つて居つたが、忽ちえならぬ香風が吹き渡つて、雪にも紛はうず櫻の花が紛紛と舞へり出したと思へば、いづくよりともなく一人の傾城が、龜甲の櫛笄を圓光の如くささないで、地獄

繪を纏うた襦袢の裳を長長とひきはえながら、天女のやうな媚を凝して、夢かとはかり眼の前へ現れた。翁はさながら「えじつと」の沙漠が、片時の内に室神崎の廓に變つたとも思ひつらう。あまりの不思議さに我を忘れて、しばしがほどは惚惚と傾城の姿を見守つて居つたに、相手はやがて花吹雪を身に浴びながら、につこと微笑んで申したは、

「これは『あんちおきや』の都に隠れない遊びでおぢやる。近ごろ御僧のつれづれを慰めまゐらせうと存じたれば、はるばるこれまでまかり下つた」とあつた。その聲さまの美しさは、極樂に棲むとやら承つた伽陵頻伽にも劣るまじい。さればさすがに有験の隠者もうかとその手に乗らうとしたが、思へばこの眞夜中に幾百里とも知らぬ「あんちおきや」の都から、傾城などの來よう筈もおぢやらぬ。

さては又しても悪魔の悪巧みであらうと心づいたによつて、ひたと御經に眼を曝しながら、專念に陀羅尼を誦し奉つて居つたに、傾城はかまへてこの隠者の翁を落さうと心にきはめつらう。蘭麝の薫を漂はせた綺羅の袂を弄びながら、嫵媚としたさまで、さも恨めしげに歎いたは、

「如何に遊びの身とは申せ、千里の山河も厭はいで、この沙漠までまかり下つたを、さりとて曲もない御方かな。」と申した。その姿の妙にも美しい事は、散りしく櫻の花の色さへ消えようずると思はれたが、隠者の翁は遍身に汗を流して、降魔の呪文を讀みかけ讀みかけ、かつつその悪魔の申す事に耳を貸さうず氣色すらおらない。されば傾城もかくてはなるまじいと氣を苛つたか、つと地獄繪の裳を蹴して、斜に隠者の膝

へとすがつたと思へば、

「何としてさほどつれないぞ」と、よよとばかりに泣い口説いた。と見るや否や隠者の翁は、蝟に刺されたやうに躍り上つたが、早くも肌身につけた十字架をかざいて、霹靂の如く罵つたは、

「業畜、御主『えすきりしと』の下部に向つて無禮あるまじいぞ」と申しも果てず、ちやうと傾城の面を打つた。打たれて傾城は落花の中に、なよなよと伏しまろんだが、忽ちその姿は見えずなつて、唯一むらの黒雲が湧き起つたと思ふほどに、怪しげな火花の雨が礫の如く亂れ飛んで、

「あら、痛や。又しても十字架に打たれたわ」と唸く聲が、次第に家の棟にのぼつて消えた、もとより隠者はかうあらうと心に期して居つたによつて、この間も秘密の眞言を絶えず聲高に誦し奉つたに、見る見る黒雲も薄れれば、櫻の花も降らずなつて、あばら家の中には又もとの如く、油火ばかりが残つたと申す。

なれど隠者は悪魔の障礙が猶もあるべいと思つたれば、夜もすがら御經の力にすがり奉つて、目蓋も合はさいで明いたに、やがてしらしら明けと覺しい頃、誰やら柴の扉をおとづれるものがあつたによつて、十字架を片手に立ち出でて見れば、これは又何ぞや、藥家の前に蹲つて、恭しげに時儀を致して居つたは、天から降つたか、地から湧いたか、小山のやうな大男ぢや。それが早くも朱を流した空を黒黒と肩にかぎつて、隠者の前に頭を下げると、恐る恐る申したは、

「それがしは『れぶろぼす』と申す『しりや』の國の山男でおぢやる、ちかごろふつと悪魔の下部と相成つ

てはるばるこの『えじつと』の沙漠まで參つたれど、悪魔も御主『えすきりしと』とやらんの御威光には叶ひ難く、それがし一人を残し置いて、いづくともなく逐電致した。自體それがしは今天在下に並びない大剛の者を尋ね出して、その身内に仕へようする志しがおぢやるによつて、何とぞこれより後は不束ながら、御主『えすきりしと』の下部の數へ御加へ下されい」と云うた。隠者の翁はこれを聞くと、あばら家の門に佇みながら、俄に肩をひそめて答へたは、

「はてさて、せんない仕儀になられたものかな。總じて悪魔の下部となつたものは、枯木に薔薇の花が咲かうするまで、御主『えすきりしと』に知遇し奉る時はござない」とあつたに、「れぶろぼす」は又ねんごろに頭を下げて、

「たとへ幾千歳を経ようずるとも、それがしは初一念を貫かうずと決定致した。さればまづ御主『えすきりしと』の御意に叶ふべし仕業の段段を教へられい。」と申した。處で、隠者の翁と山男との間には、かやうな問答がしかつめらしうとり交されたと申す事でおぢやる。

「こへんは御經の文句を心得られたか。」
「生憎一字半句の心得もござない。」
「ならば斷食は出来申さうず。」

「如何なこと、それがしは聞えた大飯喰ひでおぢやる。中中斷食などはなるまじい。」

「難儀かな、夜もすがら眠らいで居る事は如何あらう。」
 「如何なこと、それがしは聞えた大寝坊でおぢやる、中中眠らいで居られまじい。」
 それにはさすがの隠者の翁も、ほとほと言のつき穂さへおぢやらなんだが、やがて掌をはたと打つて、したり顔に申したは、

「ここを南に去ること一里がほどに、流沙河と申す大河がおぢやる。この河は水嵩も多く、流れも矢を射る如くぢやによつて、日頃から人馬の渡りに難儀致すとか承つた。なれどごへんほどの大男には、容易く徒渉りさへならうずる。さればごへんはこれよりこの河の渡し守となつて、往來の諸人を渡させられい。おのれ人に篤ければ、天主も亦おのれに篤からう道理ぢや。」とあつたに、大男は大いに勇み立つて、

「如何にも、その流沙河とやらの渡し守になり申さうずる。」と云うた。ぢやによつて隠者の翁も、「れぶろぼす」が殊勝な志しをことの外悦んで、

「然らば唯今、御水を授け申さうずる」とあつて、おのれは水瓶をかい抱きながら、もそもそと、藥家の棟へ這ひ上つて、漸く山男の頭の上へその水瓶の水を注ぎ下した。ここに不思議がおぢやつたと申すは、得度の御儀式が終りも果てず、折からさし上つた日輪の爛爛と輝いた眞唯中から、何やら雲氣がたなびいたかと思へば、忽ちそれが數限りもない四十雀の群になつて、空に聳えた「れぶろぼす」が、巖ほどの頭の上へ、ばらばらと舞ひ下つたことぢや。この不思議を見た隠者の翁は、思はず御水を授けようず方角さへも忘れはてて、

うつとりと朝日を仰いで居つたが、やがて、恭しく天上を伏し拜むと、家の棟から「れぶろぼす」をさし招いて、

「勿體なくも御水を頂かれた上からは、向後『れぶろぼす』を改めて、『きりしとほろ』と名のらせられい。思ふに天主もごへんの信心を深う嘉させ給ふと見えれば、萬一勤行に懈意あるまじいに於ては、必定遠からず御主『えすきりしと』の御尊體をも拜み奉らうずる。」と云うた。さて「きりしとほろ」と名を改めた「れぶろぼす」が、その後如何なる仕合せにめぐり合ふたか、右の一條を知らうず方方はまづ次のくだりを讀ませられい。

四 往生のこと

さるほどに「きりしとほろ」は隠者の翁に別れを告げて、流沙河のほとりに參つたれば、まことに濁流滾滾として、岸への青蘆を戦がせながら、百里の波を跳すありさまは、容易く舟さへ通ふまじい。なれど山男は身の丈凡そ三丈あまりもおぢやるほどに、河の眞唯中を越す時さへ、水は僅に臍のあたりを渦巻きながら流れるばかりぢや。されば「きりしとほろ」はこの河べに、ささやかながら庵を結んで、時折渡りに難むと見えた旅人の影が眼に觸れば、すぐさまそのほとりへ歩み寄つて、「これはこの流沙河の渡し守でおぢやる。」と申し入れた、もとより並並の旅人は、山男の恐しげな姿を見ると、如何なる天魔波旬かと始は膽も消

えて逃げのいたが、やがてその心根のやさしさもくと合點行つて、「然らば御世話に相成らうぞ。」と、おづ
 おづ「きりしとほろ」の背にのぼるが常ぢや。處で「きりしとほろ」は旅人を肩へ揺り上げると、毎時も汀
 の柳の根こぎにしたたしたかな杖をつき立てながら、逆巻く流れをこととせせず、ざんざんざんと水を分け
 て難なく向うの岸へ渡いた、しかもあの四十雀は、その間さへ何羽となく、さながら楊花の飛びちるやうに、
 絶えず「きりしとほろ」の頭をめぐつて、嬉しげに轉り交いたと申す。まことや「きりしとほろ」が信心の
 厚さには、無心の小鳥も隨喜の思にえ堪へなんだのおぢやうぞ。

かやう致して「きりしとほろ」は、雨風も厭はず三年が間、渡し守の役目を勤めて居つたが、渡りを尋ね
 る旅人の數は多うても、御主「えすきりしと」らしい御姿には、絶えて一度も知遇せなんだ。が、その三年
 目の或夜のこと、折から凄じい嵐があつて、神鳴りさへおどろと鳴り渡つたに、山男は四十雀と庵を守つて、
 すきこし方のことどもを夢のやうに思ひめぐらいて居つたれば、忽ち車軸のやうな雨を壓して、いたいけな
 聲が響いたは、

「如何に渡し守はおぢやるまいか。その河一つ渡して給はれい。」と、聞え渡つた。されば「きりしとほろ」
 は身を起いて、外の闇夜へ揺ぎ出したに、如何なこと、河のほとりには、年の頃もまだ十には足るまじい、
 みめ清らかな白衣のわらんべが、空をつんざいて飛ぶ稻妻の中に、頭を低れて唯ひとり、佇んで居つたでは
 おぢやるまいか。山男は稀有の思をないて、千引の巖にも劣るまじい大の體をかがめながら、慰めるやうに

問ひ尋ねたは、

「おぬしは何としてかやうな夜更けにひとり歩くぞ。」と申したに、わらんべは悲しげな瞳をあげて、

「われらが父のもとへ歸らうとて。」と、もの思はしげな聲で返答した。もとより「きりしとほろ」はこの答
 を聞いても、一向不審は晴れなんだが、何やらその渡りを急ぐ様子があはれにやさしく覺えたによつて、

「然らば念無う渡さうぞ。」と、雙手にわらんべをかい抱いて、日頃の如く肩へのせると、例の太杖をちや
 うとついで、岸べの青蘆を押し分けながら、嵐に狂ふ夜河の中へ、膽太くもざんぶと身を浸した。が、風は
 黒雲を巻き落いて、息もつかすまじいと吹きどよもす。雨も川面を射白まいて、底にも徹らうぞばかり降り
 注いだ。時折闇をかい破る稻妻の光に見てあれば、浪は一面に湧き立ち返つて、宙に舞上る水煙も、さなが
 ら無数の天使たちが雪の翼をはためかいて、飛びしきるかとも思ふばかりぢや。さればさすがの「きりしとほ
 ろ」も、今宵はほとほと渡りなやんで、太杖にしかとすがりながら、礎の朽ちた塔のやうに、幾度もゆらゆ
 らと立ちすくんだが、雨風よりも更に難儀だつたは、怪からず肩のわらんべが次第に重うなつたことでおぢ
 やる。始はそれもさばかりに、え堪へまじいと覺えなんだが、やがて河の眞唯中へさしかかつたと思ふほ
 どに、白衣のわらんべが重みは愈増いて、今は恰も大磐石を負ひないてゐるかと思はれた。處で遂には「き
 りしとほろ」も、あまりの重さに壓し伏されて、所詮はこの流沙河に命を殞すべいと覺悟したが、ふと耳に
 はいつて來たは、例の聞き慣れた四十雀の聲ぢや。はてこの闇夜に何として、小鳥が飛ばうぞと訝りながら、

頭を擡げて空を見れば、不思議やわらんべの面をめぐつて、三日月ほどな金光が燦爛と圓く輝いたに、四十雀はみな嵐をもつとせせず、その金光のほとりに近く、紛紛と躍り狂つて居つた。これを見た山男は、小鳥さへかくは雄雄しいに、おのれは人間と生れながら、なじかは三年の勤行を一夜に捨つべいと思ひつらう。あの葡萄蔓にも紛はうず髪をさつさつと空に吹き亂いて、寄せては返す荒波に乳のあたりまで洗はせながら、太杖も折れよとつき固めて、必死に目ざす岸へと急いだ。

それが凡そ一時あまり、四苦八苦の内に續いたでおちやらう。「きりしとほろ」は漸く向うの岸へ、戦ひ疲れた獅子王のけしきで、喘ぎ喘ぎよろめき上ると、柳の太杖を砂にさいて、肩のわらんべを抱き下しながら、吐息をついて申したは、

「はてさて、おぬしと云ふわらんべの重さは、海山量り知れまじいぞ。」とあつたに、わらんべはにつこと微笑んで、頭上の金光を嵐の中に一きは燦然ときらめかいながら、山男の顔を仰ぎ見て、さも懐しげに答へたは、

「さもあらうず。おぬしは今宵と云ふ今宵こそ、世界の苦しみを身に荷うた「えす、きりしと」を負ひないたのぢや。」と、鈴を振るやうな聲で申した。……

その夜この方流沙河のほとりには、あの渡し守の山男がむくつけい姿を見せずなつた。唯後に残つたは、向うの岸の砂にさいた、したたかな柳の太杖で、これには枯れ枯れな幹のまはりに、不思議や麗しい紅の薔薇の花が、薫しく咲き誇つて居つたと申す。されば馬太の御經にも記した如く「心の負しいものは仕合せぢや。一定天國はその人のものとならうずる。」

おぎん

元和か、寛永か、兎に角遠い昔である。

天主のおん教を奉ずるものは、その頃でももう見つかり次第、火炙りや磔に遇はされてゐた。しかし迫害が烈しいだけに「萬事にかなひ給ふおん主」も、その頃は一層この國の宗徒に、あらたかな御加護を加へられたらしい。長崎あたりの村村には、時時日の暮の光と一しよに、天使や聖徒の見舞ふ事があつた。現にあの、さんじよあんばちすたさへ、一度などは浦上の宗徒みげる彌兵衛の水車小屋に、姿を現したと傳へられてゐる。と同時に悪魔も亦宗徒の精進を妨げる爲、或は見慣れぬ黒人となり、或は舶來の草花となり、或は網代の乗物となり、屢同じ村村に出没した。夜晝さへ分たぬ土の牢に、みげる彌兵衛を苦しめた鼠も、實は悪魔の變化だつたさうである。彌兵衛は元和八年の秋、十一人の宗徒と火炙りになつた。——その元和か、寛永か、兎に角遠い昔である。

やはり浦上の山里村に、おぎんと云ふ童女が住んでゐた。おぎんの父母は大坂から、はるばる長崎へ流浪して來た。が、何もし出さない内に、おぎん一人を残した儘、二人とも故人になつてしまつた。勿論彼等他

國ものは、天主のおん教を知る筈はない。彼等の信じたのは佛教である。禪か、法華か、それとも又淨土か、何にもせよ釋迦の教である。或佛蘭西のジェスウィットによれば、天性奸智に富んだ釋迦は、支那各地を遊歴しながら、阿彌陀と稱する佛の道を説いた。その後又日本の國へも、やはり同じ道を教に來た。釋迦の説いた教によれば、我我人間の靈魂は、その罪の輕重深淺に従ひ、或は小鳥となり、或は牛となり、或は又樹木となるさうである。のみならず釋迦は生まれる時、彼の母を殺したと云ふ。釋迦の教の荒誕なのは勿論、釋迦の大悪も亦明白である。(ジャン・クラッセ)しかしおぎんの母親は、前にもちよいと書いた通り、さう云ふ眞實を知る筈はない。彼等は息を引きとつた後も、釋迦の教を信じてゐる。寂しい墓原の松のかけに、末は「いんへるの」に墮ちるのもしらず、はかない極樂を夢見てゐる。

しかしおぎんは幸ひにも、兩親の無知に染まつてゐない。これは山里村居つきの農夫、隣みの深いじよあん孫七は、とうにこの童女の額へ、ばぶちずものおん水を注いだ上、まりやと云ふ名を與へてゐた。おぎんは釋迦が生れた時、天と地とを指さしながら「天上天下唯我獨尊」と獅子吼した事などは信じてゐない。その代りに、「深く御柔軟、深く御哀憐、勝れて甘くまします童女さんた・まりあ様」が、自然と身ごもつた事を信じてゐる。

「十字架に懸り死し給ひ、石の御棺に納められ給ひ、大地の底に埋められたせすすが、三日の後よみ返つた事を信じてゐる。御糺明の喇叭さへ響き渡れば「おん主、大いなる御威光、大いなる御威勢を以て天下り給

ひ、土埃になりたる人人の色身を、もとの露魂に併せてよみ返し給ひ。善人は天上の快樂を受け、又悪人は天狗と共に、地獄に墮ちる事を信じてゐる。殊に「御言葉の御聖得により、ばんと酒の色形は變らずと雖も、その正體はおん主の御血肉となり變る」尊いさがらめんとを信じてゐる。おぎんの心は兩親のやうに、熱風に吹かれた沙漠ではない。素朴な野薔薇の花を交へた、實りの豊かな麥島である。おぎんは兩親を失つた後、じよあん孫七の養女になつた。孫七の妻、じよあんなおすみも、やはり心の優しい女である。おぎんはこの夫婦と一しよに、牛を追つたり麥を刈つたり、幸福にその日を送つてゐた。勿論さう云ふ暮しの中にも、村人の眼に立たない限りは、斷食や祈禱も怠つた事はない。おぎんは井戸端の無花果のかけに、大きい三日月を仰ぎながら、屢、熱心に祈禱を凝らした。この垂れ髪たれがみの童女の祈禱は、かう云ふ簡單なものなのである。

「隣みのおん母、おん身におん禮をなし奉る。流人となれるえわの子供、おん身に叫びをなし奉る。あはれこの涙の谷に、柔軟のおん眼をめぐらせ給へ。あんめい。」

すると或年のなたら（降誕祭）の夜、惡魔は何人かの役人と一しよに、突然孫七の家へはひつて來た。孫七の家には大きい圍爐裡に「お伽の焚き物」の火が燃えさかつてゐる。それから煤びた壁の上にも、今夜だけは十字架が祭つてある。最後に後ろの牛小屋に行けば、せすす様の産湯の爲に、飼桶に水が湛へられてゐる。役人は互に領き合ひながら、孫七夫婦に繩をかけた。おぎんも同時に括り上げられた。しかし彼等は三人と

も、全然悪びれる氣色はなかつた。靈魂の助かりの爲ならば、如何なる責苦も覺悟である。おん主は必我等の爲に、御加護を賜はるのに違ひない。第一なたらの夜に捕はれたと云ふのは、天籠の厚い證據ではないか？ 彼等は皆云ひ合せたやうに、かう確信してゐたのである。役人は彼等を縛めた後、代官の屋敷へ引き立てて行つた。が、彼等はその途中も、暗夜の風に吹かれながら、御降誕の祈禱を誦しつづけた。

「べれんの國にお生まれなされたおん若君様、今はいづこにましますか。おん讚め尊め給へ。」

惡魔は彼等の捕はれたのを見ると、手を拍つて喜び笑つた。しかしな彼等のけなげなさまには、少からず腹を立てたらしい。惡魔は一人になつた後、忌忌しさに唾をするが早い、忽ち、大きい石臼になつた。

さうしてごろごろ轉がりながら闇の中に消え失せてしまつた。

じよあん孫七、じよあんなおすみ、まりやおぎんの三人は、土の牢に投げこまれた上、天主のおん教を捨てるやうに、いろいろの責苦に遇はされた。しかし水責や火責に遇つても、彼等の決心は動かなかつた。たとひ皮肉は爛れるにしても、ほらいそ（天國）の門へはひるの、もう一息の辛抱である。いや、天主の大恩を思へば、この暗い土の牢さへ、その儘「ほらいそ」の莊嚴と變りはない。のみならず尊い天使や聖徒は、夢ともうつつともつかない中に、屢彼等を慰めに來た。殊にさういふ幸福は、一番おぎんに恵まれたらしい。おぎんはさん・じよあん・ばちすが、大きい兩手の手のひらに、蝗を澤山掬ひ上げながら、食へと云ふ所を見た事がある。又大天使がふりえるが、白い翼を疊んだ儘、美しい金色の杯に、水をくれる所を見た

事もある。

代官は天主のおん教は勿論、釋迦の教も知らなかつたから、なぜ彼等が剛情を張るのかさっぱり理解が出来なかつた。時には三人が三人とも、氣違ひではないかと思ふ事もあつた。しかし氣違ひでもない事がわかると、今度は大蛇とか一角獣とか、兎に角人倫には縁のない動物のやうな氣がし出した。さう云ふ動物を生かして置いては、今日の法律に違ふばかりか、一國の安危にも關する訣である。そこで代官は一月ばかり、土の牢に彼等を入れて置いた後、とうとう三人とも燒き殺す事にした。(實を云へばこの代官も、世間一般の人のやうに、一國の安危に關るかどうか、そんな事は殆ど考へなかつた。これは第一に法律があり、第二に人民の道德があり、わざわざ考へて見ないでも、格別不自由はしなかつたからである。)

じよあん孫七を始め三人の宗徒は、村はづれの刑場へ引かれる途中も、恐れる氣色は見えなかつた。刑場は丁度墓原に隣つた石ころの多い空き地である。彼等は其處へ到着すると、一一罪狀を讀み聞かされた後、太い角柱に括りつけられた。それから右にじよあんおすみ、中央にじよあん孫七、左にまりやおぎんと云ふ順に、刑場のまん中へ押し立てられた。おすみは連日の責苦の爲、急に年をとつたやうに見える。孫七も鬚の伸びた頬には、殆ど血の氣が通つてゐない。おぎん——もおぎんは二人に比べると、まだしもふだんと變らなかつた。が、彼等は三人とも、堆い薪を踏まへた儘、同じやうに静かな顔をしてゐる。刑場のまはりはずつと前から、大勢の見物を取り巻いてゐる。その又見物の向うの空には、墓原の松が五

六本、天蓋のやうに枝を張つてゐる。

一切の準備の終つた時、役人の一人は物物しげに、三人の前へ進みよると、天主のおん教を捨てるか捨てぬか、少時猶豫を興へるから、もう一度よく考へて見ろ、もしおん教を捨てるに云へば、直にも繩目は赦してやると云つた。しかし彼等は答へない。皆遠い空を見守つた儘、口もとには微笑さへ湛へてゐた。

役人は勿論見物すら、この數分の間位ひつそりとなつたためしはない。無數の眼はちつと瞬きもせず、三人の顔に注がれてゐる。が、これは傷しさの餘り、誰も息を呑んだのではない。見物は太抵火のかかるのを、今か今かと待つてゐたのである。役人は又處刑の手間どるのに、すつかり退屈し切つてゐたから、話をする勇氣も出なかつたのである。

すると突然一同の耳は、はつきりと意外な言葉を捉へた。

「わたしたはおん教を捨てる事に致しました。」

聲の主はおぎんである。見物は一度に騒ぎ立つた。が、一度どよめいた後、忽ち又静かになつてしまつた。それは孫七が悲しさに、おぎんの方を振り向きながら、力のない聲を出したからである。

「おぎん！ お前は悪魔にたぶらかされたのか？ もう一辛抱しなすれば、おん主の御顔も拜めるのだぞ。」
その言葉が終らない内に、おすみも遙かにおぎんの方へ、一生懸命な聲をかけた。

「おぎん！ おぎん！ お前には悪魔がついたのだよ。祈つておくれ。祈つておくれ。」

しかしおぎんは返事をしない。唯、眼は大勢の見物の向うの、天蓋のやうに枝を張つた、墓原の松を眺めてゐる。その内にもう役人の一人は、おぎんの細目を赦するやうに命じた。

「じよあん孫七はそれを見るなり、あきらめたやうに眼をつぶつた。

「萬事にかなひ給ふおん主、おん計らひに任せ奉る。」

やつと細を離れたおぎんは、茫然と少時佇んでゐた。が、孫七やおすみを見ると、急にその前へ跪きながら、何も云はずに涙を流した。孫七はやはり眼を閉ぢてゐる。おすみも顔をそむけた儘、おぎんの方を見ようともしない。

「お父様、お母様、どうか堪忍して下さいまし。」

おぎんはやつと口を開いた。

「わたしはおん教を捨てました。その訣はふと向うに見える、天蓋のやうな松の梢に、氣のついたせゐでございます。あの墓原の松のかげに、眠つていらつしやる御両親は、天主のおん教も御存知なし、きつと今頃はいんへるのに、お墮ちになつていらつしやいませう。それを今わたし一人、はらいその門にはひつたのでは、どうしても申し訣がありません。わたしはやはり地獄の底へ、御両親の跡を追つて参りませう。どうかお父様やお母様は、ぜすす様やまりや様の御側へお出でなすつて下さいまし。その代りおん教を捨てた上は、わたしも生きては居られません。……」

おぎんは切れ切れにさう云つてから、後は駈り泣きに洗んでしまつた。すると今度はじよあんなおすみも、足に踏んだ薪の上へ、ほろほろ涙を落し出した。これからはらいそへはひらうとするのに、用もない歎きに耽つてゐるのは、勿論宗徒のすべき事ではない。じよあん孫七は、苦苦しさうに隣のを振り返りながら、痛高い聲に叱りつけた。

「お前も悪魔に見入られたのか？ 天主のおん教を捨てたければ、勝手にお前だけ捨てるが好い。おれは一人でも焼けて死んで見せるぞ。」

「いえ、わたしもお供を致します。けれどもそれは——それは——」

おすみは涙を呑みこんでから、半ば叫ぶやうに言葉を投げた。

「けれどもそれははらいそへ参りたいからではございません、唯あなたの、——あなたのお供を致すのでございませう。」

孫七は長い間黙つてゐた。しかしその顔は蒼ざめたり、又血の色を漲らせたりした。と同時に汗の玉も、つぶつぶ顔にたまり出した。孫七は今心の眼に、彼の靈魂を見てゐるのである。彼の靈魂を奪ひ合ふ天使と悪魔とを見てゐるのである。もしその時足もとのおぎんが泣き伏した顔を擧げずにゐたら、——いや、もうおぎんは顔を擧げた。しかも涙に溢れた眼には、不思議な光を宿しながら、ぢつと彼を見守つてゐる。この眼の奥に閃いてゐるのは、無邪氣な童女の心ばかりではない。「流人となれるえわの子供」、あらゆる人間の

心である。

「お父様！ いんへるのへ参りませう。お母様も、わたしも、あちらのお父様やお母様も、——みんな悪魔にさらはれませう。」

孫七はとうとう墮落した。

この話は我國に多かつた奉教人の受難の中でも、最も恥づべき蹟きとして、後代に傳へられた物語である。何でも彼等が三人ながら、おん教を捨てるとなつた時には、天主の何たるかをわきまへない見物の老若男女さへも、悉く彼等を憎んだと云ふ。これは折角の火炙りも何も、見そこなつた遺恨だつたかも知れない。更に又傳ふる所によれば、悪魔はその時大歡喜のあまり、大きい書物に化けながら、夜中刑場に飛んでゐたと云ふ。これもさう無性に喜ぶ程、悪魔の成功だつたかどうか、作者は甚だ懷疑的である。

老いたる素戔嗚尊

一

高志の大蛇を退治した素戔嗚尊は、櫛名田姫を娶ると同時に、足名稚が治めてゐた部落の長となる事になつた。

足名稚は彼等夫婦の爲に、出雲の須賀へ八廣殿を建てた。宮は千木が天雲に隠れる程大きな建築であつた。彼は新しい妻と共に、静かな朝夕を送り始めた。風の聲も浪の水沫も、或は夜空の星の光も今は再び彼を誘つて廣漠とした太古の天地に、さまよはせる事は出来なくなつた。既に父とならうとしてゐた彼は、この宮の太い棟木の下に、——赤と白とに狩の圖を描いた、彼の部屋の四壁の内に、高天原の國が與へなかつた爐邊の幸福を見出したのであつた。

彼等は一しよに食事をしたり、未來の計畫を話し合つたりした。時時は宮のまはりにある、柏の林に歩み運んで、その小さな花房の地に落ちたのを踏みながら、夢のやうな小鳥の啼く聲に、耳を傾ける事もあつた。彼は妻に優しかつた。聲にも、身ぶりにも、眼の中にも、昔のやうな荒荒しさは、二度と影さへも現さな

かつた。しかし稀に夢の中では、暗黒に蠢く怪物や、見えない手の揮ふ劍の光が、もう一度彼を殺伐な争闘の心につれて行つた。が、何時も眼がさめると、彼はすぐ妻の事や部落の事を思ひ出す程、綺麗にその夢を忘れてゐた。

間もなく彼等は父母になつた。彼はその生れた男の子に、八島士奴美と云ふ名を與へた。八島士奴美は彼よりも、女親の櫛名田姫に似て、氣立ての美しい男であつた。

月日は川のやうに流れて行つた。

その間に彼は何人かの妻を娶つて、更に多くの子の父になつた。それらの子は皆人となると、彼の命ずる儘に兵士を率ゐて、國國の部落を従へに行つた。

彼の名は子孫の殖えると共に、次第に遠くまで傳はつて行つた。國國の部落は彼のもとへ、續々と貢を奉りに來た。それらの貢を運ぶ舟は、絹や毛革や玉と共に、須賀の宮を仰ぎに來る國國の民をも乗せてゐた。

或日彼はさう云ふ民の中に、高天原の國から來た三人の若者を發見した。彼等は皆當年の彼のやうな筋骨の逞しい男であつた。彼は彼等を宮に召して、手づから酒を飲ませてやつた。それは今まで何人も、この勇猛な部落の長から、受けたことのない待遇であつた。若者たちも始の内は、彼の意嚮を量りかねて、多少の

畏怖を抱いたらしかつた。しかし酒がまはり出すと、彼の所望する通り、戀の底を打ち鳴らして、高天原の國の歌を唱つた。

彼等が宮を下る時、彼は一振の劍を取つて、

「これはおれが高志の大蛇を斬つた時、その尾の中にあつた劍だ。これをお前たちに預けるから、お前たちの故郷の女君に渡してくれい。」と云ひつけた。

若者たちはその劍を捧げて、彼の前に跪きながら、死んでも彼の命令に背かないと云ふ誓ひを立てた。

彼はそれから獨り海邊へ行つて、彼等を乗せた舟の帆が、だんだん荒い波の向うに、遠くなつて行くのを見送つた。帆は霧を破る日の光を受けて、丁度中空を行くやうに、たつた一つ閃めいてゐた。

二

しかし死は素戔嗚夫婦をも赦さなかつた。

八島士奴美がおとなしい若者になつた時、櫛名田姫はふと病に罹つて、一月ばかりの後に命を殞した。何人かの妻があつたとは云へ、彼が彼自身のやうに愛してゐたのは、やはり彼女一人だけであつた。だから彼は喪屋が出来る時、まだ美しい妻の死骸の前に、七日七晩坐つた儘、默然と涙を流してゐた。

宮の中はその間、慟哭の聲に溢れてゐた。殊に幼い須世理姫が、しつきりなく歎き悲しむ聲には、宮の外

を通るものさへ、涙を落さずにはゐられなかつた。彼女は——この八島土奴美のたつた一人の妹は、兄が母に似てゐる通り、情熱の烈しい父に似た、男まさりの娘であつた。

やがて櫛名田姫の亡き骸は、生前彼女が用ひてゐた、玉や鏡や衣服と共に、須賀の宮から遠くない、小山の腹に埋められた。が、素戔嗚はその上に、黄泉路の彼女を慰むべく、今まで妻に仕へてゐた十一人の女たちをも、埋め殺す事を忘れなかつた。女たちは皆、装ひを凝らして、いそいそと死に急いで行つた。するとそれを見た部落の老人たちは、いづれも肩をひそめながら、私に素戔嗚の暴舉を非難し合つた。

「十一人！ 尊は部落の舊習に全然無頓着で御出でなさる。第一の妃が御なくなりなすつたのに、十一人しか黄泉の御供を御させ申さないと云ふ法があらうか？ たつた皆で十一人！」

葬りが全く終つた後、素戔嗚は急に思ひ立つて、八島土奴美に世を譲つた。さうして彼自身は須世理姫と共に、遠い海の向うにある根堅洲國へ移り住んだ。

其處は彼が流浪中に、最も風土の美しいのを愛した、四面海の無人島であつた。彼はこの島の南の小山に、茅葺の宮を營ませて。安らかな餘生を送る事にした。

彼は既に髪の毛が、麻のやうな色に變つてゐた。が、老年もまだ彼の力を奪ひ去る事が出来ない事は、時彼の眼に去來する、精悍な光にも明かであつた。いや、彼の顔はどうかすると、須賀の宮にゐた時より、更に野蠻な精彩を加へる事もないではなかつた。彼は彼自身氣づかなかつたが、この島に移り住んで以來、

今まで彼の中に眠つてゐた野性が、何時か又眼をさまして來たのであつた。

彼は娘の須世理姫と共に、蜂や蛇を飼ひ馴らした。蜂は勿論蜜を取る爲、蛇は征矢の鏃に塗るべき、劇烈な毒を得る爲であつた。それから狩や漁の暇に、彼は彼の學んだ武藝や魔術を、一一須世理姫に教へ聞かせた。須世理姫はかう云ふ生活の中に、だんだん男にも負けないやうな、雄雄しい女になつて行つた。しかし姿だけは依然として、櫛名田姫の面影を止めた、氣高い美しさを失はなかつた。

宮のまはりにある棕の林は、何度となく芽を吹いて、何度となく又葉を落した。其度に彼は髻だらけの顔に、愈織の敷を加へ、須世理姫は始終微笑んだ瞳に益涼しさを加へて行つた。

三

或日素戔嗚が宮の前の、棕の木の下に坐りながら、大きな牡鹿の皮を剝いでゐると、海へ水を浴びに行つた須世理姫が、見慣れない若者と一しよに歸つて來た。

「御父様、この方に唯今御目にかかりましたから、此處まで御伴して參りました。」
須世理姫はかう云つて、やつと身を起した素戔嗚に、遠い國の若者を引き合はせた。

若者は眉目の描いたやうな、肩幅の廣い男であつた。それが赤や青の頸珠を飾つて、太い高麗劍を佩てる容子は、殆ど、年少時代そのものが目前に現れたやうに見えた。

素戔嗚は恭しく若者の會釋を受けながら、
「御前の名は何と云ふ？」と、無様な問を抛りつけた。
「葦原醜男と申します。」

「どうしてこの島へやつて来た？」

「食物や水が欲しかつたものですから、わざわざ舟をつけたのです。
若者は悪びれた顔もせず、一一はつきり返事をした。」

「さうか、ではあちらへ行つて、勝手に食事をするが好い。須世理姫、案内はお前に任せるから。」

二人が宮の中にはひつた時、素戔嗚は又棕の木かげに、器用に刀子を動かしながら、牡鹿の皮を剥ぎ始めた。が、彼の心は何時の間にか、妙な動搖を感じてゐた。それは丁度晴天の海に似た、今までの静かな生活の空に、嵐を先觸れる雲の影が、動かうとするやうな心もちであつた。

鹿の皮を剥ぎ終つた彼が、宮の中に歸つたのは、もう薄暗い時分であつた。彼は廣い階段を上ると、何時もの通り何氣なく、大廣間の戸口に垂れてゐる、白い帷を掲げて見た。すると須世理姫と葦原醜男とが、まるで埒を荒らされた、二羽の睦じい小鳥のやうに、倉皇と菅壘から身を起した。彼は苦い顔をしながら、そのそ部屋の中へ歩を運んだが、やがて葦原醜男の顔へ、じろりと忌忌しさうな視線をやると、
「お前は今夜此處へ泊つて、舟旅の疲れを休めて行くが好い」と、半ば命令的な言葉をかけた。

葦原醜男は彼の言葉に、嬉しさうな會釋を返したが、それでもまだ何となく、間の悪げな氣色は隠せなかつた。

「ではすぐにあちらへ行つて、遠慮なく横になつてくれい。須世理姫——」

素戔嗚は娘を振り返ると、突然嘲るやうな聲を出した。

「この男を早速蜂の室へつれて行つてやるが好い。」

須世理姫は一瞬間、色を失つたやうであつた。

「早くしないか！」

父親は彼女がためらふのを見ると、荒熊のやうに唸り出した。

「はい、ではあなた、どうかこちらへ。」

葦原醜男はもう一度、叮嚀に素戔嗚へ禮をすると、須世理姫の後を追つて、いそいそと大廣間を出て行つた。

四

大廣間の外へ出ると、須世理姫は肩にかけた領巾を取つて、葦原醜男の手に渡しながら囁くやうにかう云つた。

「蜂の室へ御はひりになつたら、これを三遍御振りなさいまし。さうすると蜂が刺しませんから。」
葦原醜男は何の事だか、相手の言葉がのみこめなかつた。が、問ひ返す暇もなく、須世理姫は小さな扉を開いて、室の中へ彼を案内した。

室の中はもうまつ暗であつた。葦原醜男は其處へはひると、手さぐりに彼女を捉へようとした。が、手は僅に彼女の髪へ、指の先が觸れたばかりであつた。さうしてその次の瞬間には、慌しく扉を閉ぢる音が聞えた。

彼は領巾をたまさぐりながら、茫然と室の中に佇んでゐた。すると眼が慣れたせゐか、だんだんあたりが思つたより、薄明く見えるやうになつた。

その薄明に透して見ると、室の天井からは幾つとなく、大樽程の蜂の巢が下つてゐた。しかもその又巢のまはりには、彼の腰に下げた高麗剣より、更に一かさ大きい蜂が、何匹も悠悠と這ひまはつてゐた。

彼は思はず身を蹴して、扉の方へ飛んで行つた。が、いくら推しても引いても、扉は開きさうな氣色さへなかつた。のみならずその時一匹の蜂は、斜に床の上へ舞ひ下ると、鈍い翅音を起しながら、次第に彼の方へ這ひ寄つて來た。

餘りの事に度を失つた彼は、まだ蜂が足もとまで來ない内に、倉皇とそれを踏み殺さうとした。しかし蜂は其途端に、一層翅音を高くしながら、彼の頭上へ舞上つた。と同時に多くの蜂も、人のけはひに腹を立てた

と見えて、まるで風を迎へた火矢のやうに、ばらばらと彼の上へ落ちかかつて來た。……

須世理姫は廣間へ歸つて來ると、壁に差した松明へ火をともした。火の光は赤赤と、菅疊の上に寝ころんだ素戔鳴の姿を照らし出した。

「確に蜂の室へ入れて來たらうな？」

素戔鳴は眼を娘の顔に注ぎながら、また忌忌しさうな聲を出した。

「私は御父様の御云ひつけに背いた事はございませぬ。」

須世理姫は父親の眼を避けて、廣間の隅へ席を占めた。

「さうか？ では勿論これからも、おれの云ひつけは背くまいな？」

素戔鳴のからう云ふ言葉の中には、皮肉な調子が交つてゐた。須世理姫は頸珠を氣にしなから、背くとも背かないとも答へなかつた。

「黙つてゐるのは背く氣か？」

「いいえ。——御父様はどうしてそんな——」

「背かない氣ならば、云ひ渡す事がある。おれはお前があゝの若者の妻になる事を許さないぞ。素戔鳴の娘は素戔鳴の目がねになつた夫を持たねばならぬ。好いか？ これだけの事を忘れるな。」
夜が既に更けた後、素戔鳴は躰をかいてゐたが、須世理姫は獨り悄然と、廣間の窓に倚りかかりながら、

赤い月が音もなく海に沈むのを見守つてゐた。

五

翌朝素戔嗚は何時もの通り、岩の多い海へ泳ぎに行つた。すると其處へ葦原醜男が、意外にも彼の後を追つて、勢よく宮の方から下つて来た。

彼は素戔嗚の姿を見ると、愉快さうな微笑を浮かべながら、

「御早うございます。」と、會釋をした。

「どうだな、昨夜はよく眠られたかな？」

素戔嗚は岩角に佇んだ儘、迂散らしく相手の顔を見やつた。實際この元氣の好い若者がどうして室の蜂に殺されなかつたか？ それは全然彼自身の推測を超越してゐたのであつた。

「ええ、御かげでよく眠られました。」

葦原醜男はかう答へながら、足もとに落ちてゐた岩のかけを拾つて、力一ぱい海の上へ抛り投げた。岩は長い弧線を描いて、雲の赤い空へ飛んで行つた。さうして素戔嗚が投げたにしても、届くまいと思はれる程、遠い沖の波の中に落ちた。

素戔嗚は唇を噛みながら、ぢつとその岩の行く方を見つめてゐた。

二人が海から歸つて来て、朝餉の膳に向つた時、素戔嗚は苦い顔をして、鹿の片腿を嚙りながら、彼と向ひ合つた葦原醜男に、

「この宮が気に入つたら、何日でも泊つて行くが好い」と云つた。

傍にゐた須世理姫は、この怪しい親切を辭せしむべく、そつと葦原醜男の方へ、意味ありげな瞬きを送つて見せた。が、彼は丁度その時、盤の魚に箸をつけてゐたせるか、彼女の相圖には氣もつかずに、

「難有うございます。ではもう二三日、御厄介になりませうか」と、嬉しさうな返事をしてしまつた。

しかし幸ひ午後になると、素戔嗚が晝寢をしてゐる暇に、二人の戀人は宮を抜け出て彼の獨木舟が繋いである、寂しい海邊の岩の間に、慌しい幸福を偷む事が出来た。須世理姫は香りの好い海草の上に横はりながら、暫くは唯夢のやうに、葦原醜男の顔を仰いでゐたが、やがて彼の腕を引き離すと、

「今夜も此處に御泊りなすつては、あなたの御命が危うございます。私の事などは御かまひなく、一刻も早く御逃げ下さいまし。」と、心配さうに促し立てた。

しかし葦原醜男は笑ひながら、子供のやうに首を振つて見せた。

「あなたが此處にゐる間は、殺されても此處を去らない心算です。」

「それでもあなたの御體に、萬一の事でもあつた日には——」

「ではすぐにも私と一しよに、この島を逃げてくれますか？」

須世理姫はためらつた。

「さもなければ私は何時までも、此處にゐる覺悟をきめてゐます。」

葦原醜男はもう一度、無理に彼女を抱きよせようとした。が、彼女は彼を突きのけると急に海草の上から身を起して、

「御父様が呼んでゐます。」と、氣づかほしさうな聲を出した。さうして、咄嗟に岩の間を、若い鹿よりも身輕さうに、宮の方へ上つて行つた。

後に残つた葦原醜男は、まだ微笑を浮かべながら、須世理姫の姿を見送つた。と、彼女の寝てゐた所には、昨夜彼が貰つたやうな、領巾がもう一枚落ちてゐた。

六

その夜素戔嗚は人手を借らず、蜂の室と向ひ合つた、もう一つの室の中に、葦原醜男を抛りこんだ。

室の中は昨日の通り、もう暗黒が擴がつてゐた。が、唯一つ昨日と違つて、その暗黒の其處此處には、まるで地の底に埋もれた無數の寶石の光のやうに、點點ときらめく物があつた。

葦原醜男は心の中に、この光物の正體を怪しみながら、暫くは眼が暗黒に慣れる時の來るのを待つてゐた。すると間もなく彼の周圍が、次第にうす明るくなるにつれて、その星のやうな光物が、殆ど、馬さへ呑みさう

な、凄じい大蛇の眼に變つた。しかも大蛇は何匹となく、或は梁に巻きついたり、或は梅を傳はつたり、或は又床にとぐろを巻いたり、室一ぱいに氣味悪く、蠢き合つてゐるのであつた。

彼は思はず腰に下げた劍の柄に手をかけた。が、たとひ劍を抜いた所が、彼が一匹斬る内には、もう一匹が造作なく彼を巻き殺すのに違ひなかつた。いや、現に一匹の大蛇が、彼の顔を下から覗きこむと、それより更に大きい一匹は、梁に尾をからんだ儘、ずりりと宙に吊り下つて、丁度彼の肩の上へ、鎌首をさしのべてゐるのであつた。

室の扉は勿論開かなかつた。のみならずその後には、あの白髪素戔嗚が皮肉な微笑を浮かべながら、ちつと扉の向うの容子に耳を傾けてゐるらしかつた。葦原醜男は懸命に劍の柄を握りながら、暫時は眼ばかり動かしてゐた。その内に彼の足もとの大蛇は、徐に山のやうなとぐろを解くと、一際高く鎌首を擧げて、今にも猛然と彼の喉へ噛みつきさうなけはひを示し出した。

この時彼の心の中には、突然光がさしたやうな氣がした。彼は昨夜室の蜂が、彼のまはりへ群がつて來た時、須世理姫に貰つた領巾を振つて、危い命を救ふ事が出來た。して見ればさつき須世理姫が、海邊の岩の上に残して行つた領巾にも同じやうな奇特があるかも知れぬ。——さう思つて彼は咄嗟の間に、拾つて置いた領巾を取出して、三度ひらひらと振り廻して見た。……

翌朝素戔嗚は又石の多い海のとりで、愈々元氣の好ささうな葦原醜男と顔を合せた。

「どうだな。昨夜はよく眠られたかな？」

「ええ、御かげでよく眠られました。」

素戔嗚は顔中に不快さうな色を漲らせて、じろりと相手を睨みつけたが、どう思つたかもう一度、何時もの冷靜な調子に返つて、

「さうか。それはよかつた。ではこれからおれと一しよに、一泳ぎ水を浴びるが好い。」と隔壁なささうな聲をかけた。

二人はすぐに裸になつて、波の荒い明け方の海を、沖へ沖へと泳ぎ出した。素戔嗚は高天原の國にゐた時から、竝ぶもののない泳ぎ手であつた。が、葦原醜男は彼にも増して、殆ど、海豚にも劣らない程、自由自在に泳ぐ事が出来た。だから二人のみづらの頭は、黑白二羽の鷗のやうに、岩の屏風を立てた岸から、見る見る内に隔たつてしまつた。

七

海は絶えず膨れ上つて、雪のやうな波の水沫を二人のまはりへ漲らせた。素戔嗚はその水沫の中に、時時葦原醜男の方へ意地悪さうな視線を投げた。が、相手は悠悠とどんなに高い波が來ても、乗り越え乗り越え進んでゐた。

それが暫く續く内に、葦原醜男は少しづつ素戔嗚より先へ進み出した。素戔嗚は私に牙を噛んで、一尺でも彼に遅れまいとした。しかし相手は大きな波が、二三度泡を撒き散らす間に、苦もなく素戔嗚を抜いてしまつた。さうして重なる波の向うに、何時の間にか姿を隠してしまつた。

「今度こそあの男を海に沈めて、邪魔を拂はうと思つたのだが、――」

さう思ふと素戔嗚は、愈彼を殺さない内は、腹が癒えないやうな心もちになつた。

「畜生！ あんな悪賢い浮浪人は、鰐にでも食はれてしまふが好い。」

しかし程なく葦原醜男は、彼自身がまるで鰐のやうに、樂樂とこちらへ返つて來た。

「もつと御泳ぎになりますか？」

彼は波に揺られながら、日頃に變らない微笑を浮べて、遙に素戔嗚へ聲をかけた。素戔嗚は如何に剛情を張つても、この上泳がうと云ふ氣にはなれなかつた。……

その日の午後素戔嗚は、更に葦原醜男をつれて、島の西に開いた荒野へ、狐や兎を狩りに行つた。

二人は荒野のはづれにある、小高い大岩の上へ登つた。荒野は目の及ぶ限り、二人の後から吹下す風に、枯草の波を靡かせてゐた。素戔嗚は少時默然と、さう云ふ景色を見守つた後、弓に矢を番へながら、葦原醜男を振り返つた。

「風があつては都合が悪いが、兎に角どちらの矢が遠く行くか、お前と弓勢を比べて見よう。」

「ええ、比べて見ませう。」

葦原醜男は弓矢を執つても、自信のあるらしい容子であつた。

「好いか？ 同時に射るのだぞ。」

二人は肩を並べながら、力一ばい弓を引き絞つて、さうして同時に切つて離した。矢は波立つた荒野の上へ、一文字に遠く飛んで行つた。が、どちらが先へ行つたともなく、唯一度日の光にきらりと矢羽根が光つた儘、忽ち風下の空に紛れて、二本とも一しよに消えてしまつた。

「勝負があつたかい？」

「いえ。——もう一度やつて見ませうか？」

素戔嗚は眉をひそめながら、苛立たしさに頭を振つた。

「何度やつても同じ事だ、それより面倒でも一走り、おれの矢を探しに行つてくれい。あれは高天原の國から来た、おれの大事な丹塗の矢だ。」

葦原醜男は云ひつかつた通り、風に鳴る荒野へ飛びこんで行つた。すると素戔嗚はその後姿が、高い枯草に隠れるや否や、腰に下げた袋の中から、手早く火打鎌と石を出して、岩の下の枯茨へ火を放つた。

八

色のない焰は瞬く内に、濛濛と黒煙を擧げ始めた。と同時にその煙の下から、茨や小篠の焼ける音が、けたたましく耳を弾き出した。

「今度こそあの男を片づけたぞ。」

素戔嗚は高い岩の上に、おつと弓杖をつきながら、兇猛な微笑を浮べてゐた。

火は益燃え擴がつた。鳥は苦しさに鳴きながら、何羽も赤黒い空へ舞ひ上つた。が、すぐに又煙に巻かれて、紛紛と火の中へ落ちて行つた。それがまるで遠くからは、嵐に振はれた無数の木の實が、しつきりなくこぼれ飛ぶやうに見えた。

「今度こそあの男を片づけたぞ。」

素戔嗚はかう心の中に、もう一度満足の吐息を洩らすと、何故か云ひやうのない寂しさがかすかに湧いて来るやうな心もちがした。……

その日の薄暮、勝ち誇つた彼は腕を組んで、宮の門に佇みながら、まだ煙の迷つてゐる荒野の空を眺めてゐた。すると其處へ須世理姫が、夕餉の仕度の出来たことを氣がなささうに報じに來た。彼女は近親の喪を弔ふやうに何時の間にかまつ白な裳を夕明りの中に引きずつてゐた。

素戔嗚はその姿を見ると、急に彼女の悲しさを踏みにじりたいやうな氣がし出した。
「あの空を見ろ。葦原醜男は今時分——」

「存じて居ります。」

須世理姫は眼を伏せてゐたが、思ひの外はつきりと、父親の言葉を遮つた。

「さうか？ ではさぞかし悲しからうな？」

「悲しうございます。よしんば御父様が御致くなりなすつても、これ程悲しくございますまい。」

素戔嗚は色を變へて、須世理姫の顔を睨みつけた。が、それ以上彼女を懲らす事は、どう云ふものか出来なかつた。

「悲しければ、勝手に泣くが好い。」

彼は須世理姫に背を向けて、荒荒しく門の内へはひつて行つた。さうして宮の階段を上りながら、忌忌し

さうに舌を打つた。

「何時もおれなら口も利かずに、打ちのめしてやる所なのだが……」

須世理姫は彼の去つた後も、暫くは、暗く火照つた空へ、涙ぐんだ眼を擧げてゐたが、やがて頭を垂れながら、悄然と宮へ歸つて行つた。

その夜素戔嗚は何時まで、眠に就く事が出来なかつた。それは葦原醜男を殺した事が何となく彼の心の底へ毒をさしたやうな氣がするからであつた。

「おれは今までもあの男を何度殺さうと思つたかわからない。しかし、まだ今夜のやうに妙な氣のした事

はないのだが……」

彼はこんな事を考へながら、青い匂のする菅壘の上に、幾度となく寢返りを打つた。眠はそれでも彼の上へ、容易に下らうとはしなかつた。

その間に寂しい曉は早くも暗い海の向うに、うすら寒い色を擴げ出した。

九

翌朝もう朝日の光が、海一ぱいに當つてゐる頃であつた。まだ寢の足りない素戔嗚は眩しさうに眉をひそめながら、そのそ宮の戸口へ出かけて來た。すると其處の階段の上には、驚くまい事か、葦原醜男が、須世理姫と一しよに腰をかけて、何事が嬉しさうに話し合つてゐた。

二人も素戔嗚の姿を見ると、吃驚したらしい容子であつた。が、すぐに葦原醜男は不相變快活に身を起して、一筋の丹塗矢をさし出しながら、

「幸ひ矢も見つかりました。」と、云つた。

素戔嗚はまだ驚きが止まなかつた。しかしその中には何となく、無事な若者の顔を見るのが、悦ばしいやうな心もちもした。

「よく怪我をしなかつたな？」

「ええ、全く偶然助かりました。あの火事が燃えて来たのは、丁度私がこの丹塗矢を拾ひ上げた時だったのです。私は煙の中をくぐりながら、兎も角火のつかない方へ、一生懸命に逃げて行きましたが、いくらあせつて見た所が、到底西風に煽られる火よりも早くは走れません。……」

葦原醜男はちよいと言葉を切つて、彼の話に聞き入つてゐる親子の顔へ微笑を送つた。

「そこでもう今度は焼け死ぬに違ひないと、覺悟をきめた時でした。走つてゐる内にどうしたはずみか、急に足もとの土が崩れると、大きな穴へ落ちこんだのです。穴の中は最初まつ暗でしたが、縁の枯草が燃えるやうになると、忽ち、底まで明るくなりました。見ると私のまはりには、何百匹とも知れない野鼠が、土の色も見えない程ひしめき合つてゐるのです……」

「まあ、野鼠でよろしうございました。それが腹でもございましたら……」

須世理姫の眼の中には、涙と笑とが刹那の間、同時に動いたやうであつた。

「いや、野鼠でも莫迦にはなりません。この丹塗矢に羽根のないのは、その時みんな食はれたのです。が、仕合せと火事は何事もなく、穴の外を焼き通つてしまひました。」

素戔嗚はこの話を聞いてゐる内に、だんだん又この幸運な若者を憎む心が動いて来た。のみならず、一度殺さうと思つた以上、どうしてもその目的を遂げない中は、昔から挫折した覺えのない意力の誇りが満足しなかつた。

「さうか。それは運が好かつたな。が、運と云ふものは、何時風向きが變るかわからないものだ。……が、そんな事はどうでも好い。兎に角命が助つたのなら、おれと一しよにこちらへ来て、頭の虱をとつてくれい。」
葦原醜男と須世理姫とは、仕方なく彼の後について、朝日の光のさしこんでゐる、大廣間の白い帷をくぐつた。

素戔嗚は廣間のまん中に、不機嫌らしい大あくらを組むと、みづらに結んだ髪を解いて、無造作に床の上へ垂らした。素枯れた蘆の色をした髪は、殆ど、川のやうに長かつた。

「おれの虱はちと手強いぞ。」

かう云ふ彼の言葉を聞き流しながら、葦原醜男はその白髪を分けて、見つけ次第虱を捻らうとした。が、髪に蠢いてゐるのは、小さな虱と思ひの外、毒毒しい、銅色の、大きな百足ばかりであつた。

十

葦原醜男はためらつた。すると側にゐた須世理姫が、何時の間に忍ばせて持つて来たか、一握りの棕の實と赤土とをそつと彼の手へ渡した。彼はそこで齒を鳴らして、その棕の實を噛みつぶしながら、赤土も一しよに口へ含んで、さも百足をとつてゐるらしく、床の上へ吐き出し始めた。

その内に素戔嗚は、昨夕寝なかつた疲れが出て、我知らずにととうと眠にはひつた。

……高天原の國を逐はれた素戔嗚は、爪を剝がれた足に岩を踏んで、峻しい山路を登つてゐた。岩むらの羊齒、鴉の聲、それから冷たい鋼色の空、——彼の眼に入る限りの風物は、悉く荒涼それ自身であつた。「おれに何の罪があるか？ それは彼等よりも強かつた。が、強かつた事は罪ではない。罪は寧ろ彼等にある。嫉妬の深い、陰險な。男らしくもない彼等にある。」

彼はかう憤りながら、暫く苦しい歩みを續けて行つた。と、路を遮つた、龜の背のやうな大岩の上に、六つの鈴のついてゐる、白銅鏡が一面のせてあつた。彼はその岩の前に足をとめると、何気なく鏡へ眼を落した。鏡は牙え渡つた面のうへに、ありありと年若な顔を映した。が、それは彼の顔ではなく、彼が何度も殺さうとした、葦原醜男の顔であつた。……さう思ふと、急に夢がさめた。

彼は大きな眼を開いて、廣間の中を見廻した。廣間には唯朝日の光が、うららかにさしてゐるばかりで、葦原醜男も須世理姫も、どうしたか姿が見えなかつた。のみならずふと氣がついて見ると、彼の長い髪は三つに分けて、天井の桷に括りつけてあつた。

「欺しをつたな！」
咄嗟に一切を悟つた彼は、稜威の雄たけびを發しながら、力一ぱい頭を振つた。すると忽ち、宮の屋根には、雷よりも凄まじい響が起つた。それは髪を括りつけた、三本の桷が三本とも一時にひしげ飛んだ響であつた。しかし素戔嗚は耳にもかけず、まづ右手をさし伸べて太い天の鹿兒弓を取つた。それから左手をさし

伸べて、天の羽羽矢の靱を取つた。最後に兩足へ力を入れて、うんと一息に立ち上ると、三本の桷を引きずりながら、雲の峰の崩れるやうに、傲然と宮の外へ揺るぎ出した。

宮のまはりの椋の林は、彼の足音に鳴りどよんだ。それは梢に巢食つた栗鼠も、ばらばらと大地へ落ちる程であつた。彼はその椋の木の間を、嵐のやうに通り返した。

林の外は切り岸の上、切り岸の下は海であつた。彼は其處に立ちほだかると、眉の上に手をやりながら、廣い海を眺め渡した。海は高い浪の向うに、日輪さへかすかに蒼ませてゐた。その又浪の重なつた中には、見覚えのある獨木舟が一艘、沖へ沖へと出る所だつた。

素戔嗚は弓杖をついたなり、ちつとこの舟へ眼を注いだ。舟は彼を嘲るやうに、小さい庭帆を光らせながら、輕輕と浪を乗り越えて行つた。のみならず舳には葦原醜男、艫には須世理姫の乗つてゐる容子も、手にとるやうに見える事が出来た。

素戔嗚は天の鹿兒弓に、しづしづと天の羽羽矢を番へた。弓は見る見る引き絞られ、鏃は目の下の獨木舟に向つた。が、矢は一文字に保たれた儘、容易に弦を離れなかつた。その内に何時か彼の眼には、微笑に似たものが浮び出した。微笑に似た、——しかし其處には同時に又涙に似たものもないではなかつた。彼は肩を聳やかせた後、無造作に弓矢を抛り出した。それから、——さも堪へ兼ねたやうに、瀑よりも大きな笑ひ聲を放つた。

「おれはお前たちを祝くぞ！」

素戔嗚は高い切り岸の上から、遙かに二人をさし招いだ。

「おれよりもつと手力を養へ。おれよりもつと智慧を磨け。おれよりもつと、……」

素戔嗚はちよいとためらつた後、底力のある聲に祝き續けた。

「おれよりもつと仕合せになれ！」

彼の言葉は風と共に、海原の上へ響き渡つた。この時わが素戔嗚は、大日靈貴と争つた時より、高天原の國を逐はれた時より、高志の大蛇を斬つた時より、ずつと天上の神に近い、悠悠たる威嚴に充ち満ちてゐた。

魔 術

或時雨の降る晩のことです。私を乗せた人力車は、何度も大森界隈の険しい坂を上つたり下りたりして、やつと竹藪に圍まれた、小さな西洋館の前に梶棒を下しました、もう鼠色のペンキの剝げかかつた、狭苦しい玄關には、車夫の出した提灯の明りで見ると、印度人マテイラム・ミスラと日本字で書いた、これだけは新しい、瀬戸物の標札がかかつてゐます、

マテイラム・ミスラ君と云へば、もう皆さんの中にも、御存じの方が少くないかも知れません。ミスラ君は永年印度の獨立を計つてゐるカルカッタ生れの愛國者で、同時に又ハッサン・カンといふ名高い婆羅門の秘法を學んだ、年の若い魔術の大家なのです。私は丁度一月ばかり以前から、或友人の紹介でミスラ君と交際してゐましたが、政治經濟の問題などはいろいろ議論したことがあつても、肝心の魔術を使ふ時には、まだ一度も居合せたことがありません。そこで今夜は前以て、魔術を使つて見せてくれるやうに、手紙で頼んで置いてから、當時ミスラ君の住んでゐた、寂しい大森の町はづれまで、人力車を急がせて來たのです。私は雨に濡れながら、覺束ない車夫の提灯の明りを便りにその標札の下にある呼鈴の鈴を押しました。す

と間もなく戸が開いて、玄關へ顔を出したのは、ミスラ君の世話をしている、背の低い日本人の御婆さんです。

「ミスラ君は御出ですか。」

「いらつしやいます、先程からあなた様を御待ち兼ねてございました。」

御婆さんは愛想よくかう言ひながら、すぐその玄關のつきあたりにある、ミスラ君の部屋へ私を案内しました。

「今晚は、雨が降るのによく御出ででした。」

色のまつ黒な、眼の大きい、柔な口髭のあるミスラ君は、テーブルの上にある石油ランプの心を燃りながら、元氣よく私に挨拶しました。

「いや、あなたの魔術さへ拜見出来れば、兩位は何ともありません。」

私は椅子に腰をかけてから、うす暗い石油ランプの光に照された、陰氣な部屋の中を見廻しました。

ミスラ君の部屋は質素な西洋間で、まん中にテーブルが一つ、壁側に手ごろな書棚が一つ、それから窓の前に机が一つ——外には唯我の腰をかける、椅子が並んであるだけです。しかもその椅子や机が、みんな古ぼけた物ばかりで、緑へ赤く花模様を織り出した、派手なテーブル掛でさへ、今にもずたずたに裂けるかと思ふほど、絲目が露になつてゐました。

私たちは挨拶をすませてから、暫くは外の竹藪に降る雨の音を聞くともなく聞いてゐましたが、やがて又あの召使ひの御婆さんが、紅茶の道具を持つてはひつて来ると、ミスラ君は葉巻の箱の蓋を開けて、

「どうです。一本」と勧めてくれました。

「難有う。」

私は遠慮なく葉巻を一本取つて、燐寸の火をうつしながら、

「確あなたの御使ひになる精霊は、ドンとかいふ名前でしたね、するとこれから私が拜見する魔術と言ふのもそのドンの力を借りてなさるのですか。」

ミスラ君は自分も葉巻へ火をつけると、にやにや笑ひながら、匂ひの好い煙を吐いて、

「ドンなどといふ精霊があると思つたのは、もう何百年も昔のことです。アラビヤ夜話の時代のことでも言ひませうか。私がハツサン・カンから學んだ魔術は、あなたでも使はうと思へば使へますよ。高が進歩した催眠術に過ぎないのですから。——御覽なさい、この手を唯かうしさえすれば好いのです。」

ミスラ君は手を舉げて、二三度私の眼の前へ三角形のやうなものを描きましたが、やがてその手をテーブルの上へやると、緑へ赤く織り出した模様の花をつまみ上げました。私はびつくりして、思はず椅子をずりよせながら、よくよくその花を眺めました。確にそれは今の今まで、テーブル掛の中にあつた花模様の一つに違ひありません。が、ミスラ君がその花を私の鼻の先へ持つて来ると、丁度麝香か何かのやうに重苦し

い匂さへするのです。私はあまりの不思議さに、何度も感嘆の聲を洩しますと、ミスラ君はやはり微笑した儘、又無造作にその花をテーブル掛の上へ落しました。勿論落すともとの通り花は織り出した模様になつて、つまみ上げること所か、花びら一つ自由には動かさなくなつてしまふのです。

「どうです。譯はないでせう。今度は、このランプを御覽なさい。」

ミスラ君はかう言ひながら、ちよいとテーブルの上のランプを置き直しましたが、その拍子にどういふ譯かランプはまるで獨樂のやうに、ぐるぐる廻り始めました。それもちやんと一所に止つた儘、ホヤを心棒のやうにして、勢よく廻り始めたのです。初めの内は私も膽をつぶして、萬一火事にでもなつては大變だと、何度もひやひやしました。ミスラ君は靜かに紅茶を飲みながら、一向騒ぐ容子もありません。そこで私もしまひには、すつかり度胸が据つてしまつて、だんだん早くなるランプの運動を、眼も離さず眺めてゐました。又實際ランプの蓋が風を起して廻る中に、黄いろい焰がたつた一つ、瞬きもせずにともつてゐるのは、何とも言へず美しい、不思議な見物だつたのです。が、その内にランプの廻るのが愈々速になつて行つて、とうとう廻つてゐるとは見えない程、澄み渡つたと思ひますと、何時の間にか、前のやうにホヤ一つ歪んだ氣色もなく、テーブルの上に据つてゐました。

「驚きましたか。こんなことはほんの子供臍しですよ。それともあなたが御望みなら、もう一つ何か御覽に入れませう。」

ミスラ君は後を振り返つて、壁側の書棚を眺めました。が、やがその方へ手をさし伸ばして、招くやうに指を動かすと、今度は書棚に竝んでゐた書物が一冊づつ動き出して、自然にテーブルの上まで飛んで來ました。その又飛び方が兩方へ表紙を開いて、夏の夕方に飛び交ふ蝙蝠のやうに、ひらひらと宙へ舞上るのです。私は葉巻を口へ脚へた儘、呆氣にとられて見てゐましたが、書物はうす暗いランプの光の中に何冊も自由に飛び廻つて、一一行儀よくテーブルの上へピラミッド形に積み上りました。しかも残らずこちらへ移つてしまつたと思ふと、すぐに最初來たのから動き出して、もとの書棚へ順順に飛び還つて行くぢやありませんか。が、中でも一番面白かつたのは、うすい假綴の書物が一冊、やはり翼のやうに表紙を開いて、ふはりと空へ上りましたが、暫くテーブルの上で輪を描いてから、急に頁をざわつかせると、逆落しに私の膝へさつと下りて來たことです。どうしたのかと思つて手にとつて見ると、これは私が一週間ばかり前にミスラ君へ貸した覺えがある、佛蘭西の新しい小説でした。

「永永御本を難有う。」

ミスラ君はまだ微笑を含んだ聲で、かう私に禮を言ひました。勿論その時はもう多くの書物が、みんなテーブルの上から書棚の中へ舞ひ戻つてしまつてゐたのです。私は夢からさめたやうな心もちで、暫時は挨拶さへ出來ませんでした。が、その内にさつきミスラ君の言つた、「私の魔術などといふものは、あなたでも使はうと思へば使へるのです」といふ言葉を思ひ出しましたから、

「いや、兼ね兼ね評判はうかがつてゐましたが、あなたの御使ひなさる魔術が、これ程不思議なものだらうとは、實際思ひもありませんでした。ところで私のやうな人間にも、使つて使へないことのないと言ふのは、御冗談ではないのですか。」

「使へますとも。誰にでも造作なく使へます。唯——」と言ひかけてミスラ君はちつと私の顔を眺めながら眞面目な口調になつて、

「唯、慾のある人間には使へません。ハツサン・カンの魔術を習はうと思つたら、まづ慾を捨てることです。あなたにはそれが出来ますか。」

「出来るつもりです。」

私はかう答へましたが、何となく不安な氣もしたので、すぐに又後から言葉を添へました。

「魔術さへ教へて頂ければ。」

それでもミスラ君は疑はしさうな眼つきを見せましたが、さすがにこの上念を押すのは無駄だとも思つたのでせう。やがて大様に領きながら、

「では教へて上げませう。が、いくら造作なく使へると言つても、習ふのには暇もかかりますから、今夜は私の所へ御泊りなさい。」

「どうもいろいろ恐れ入ります。」

私は魔術を教へて貰ふ嬉しさに、何度もミスラ君へ御禮を言ひました。が、ミスラ君はそんなことに頓着する氣色もなく、靜かに椅子から立ち上ると、

「御婆サン。御婆サン。今夜ハ御客様ガ御泊リニナルカラ、寢床ノ支度ヲシテ置イテオクレ。」

私は胸を躍らしながら、葉巻の灰をはたくのも忘れて、まともに石油ランプの光を浴びた、深切さうなミスラ君の顔を思はずちつと見上げました。

X X X X X

私がミスラ君に魔術を教はつてから、一月ばかりたつた後のことです。これもやはりさあさあ雨の降る晩でしたが、私は銀座の或倶楽部の一室で、五六人の友人と暖爐の前へ陣取りながら、氣輕な雑談に耽つてゐました。

何しろここは東京の中心ですから、窓の外に降る雨脚も、しつきりなく往來する自動車や馬車の屋根を濡らすせるか、あの、大森の竹藪にしぶくやうな、ものさびしい音は聞えませんが、

勿論窓の内の陽氣なことも、明い電燈の光と言ひ、大きなモロッコ皮の椅子と言ひ、或は又滑かに光つてゐる寄木細工の床と言ひ、見るから精靈でも出て來さうな、ミスラ君の部屋などとはまるで比べものにはならないのです

私たちは葉巻の煙の中に、暫くは獵の話だの競馬の話だのをしていましたが、その内の一人の友人が、吸ひさしの葉巻を暖爐の中に抛りこんで、私の方へ振り向きながら、

「君は近頃魔術を使ふといふ評判だが、どうだい。今夜は一つ僕たちの前で、使つて見せてくれないか。」

「好いとも。」

私は椅子の背に頭を寄せた儘、さも魔術の名人らしく、横柄にかう答へました。

「ぢや、何でも君に一任するから、世間の手品師などには出来さうもない不思議な術を使つて見せてくれ給へ。」

友人たちは皆賛成だと見えて、てんでに椅子をすり寄せながら、促すやうに私の方を眺めました。そこで私は徐に立上つて、

「よく見てゐてくれ給へよ。僕の使ふ魔術には、種も仕掛もないのだから。」
私はかう言いながら、両手のカフスをまくり上げて、暖爐の中に燃え盛つてゐる石炭を、無造作に掌の上へすくひ上げました。私を圍んでゐた友人たちは、これだけでも、もう荒膽を挫がれたのでせう。皆顔を見合せながら、うつかり側へ寄つて火傷でもしては大變だと、氣味悪るさうにしりごみさへし始めるのです。そこで私の方は、愈落着き拂つて、その掌の上の石炭の火を暫く一同の眼の前へつきつけてから、今度はそれを勢よく案木細工の床へ撒き散らしました。その途端です、窓の外に降る雨の音を壓して、もう一

つ變つた雨の音が俄に床の上から起つたのは、と言ふのはまつ赤な石炭の火が、私の掌を離れると同時に、無数の美しい金貨になつて、雨のやうに床の上へこぼれ飛んだからなのです。

友人たちは皆夢でも見てゐるやうに、惘然と喝采するのさへも忘れてゐました。

「まづちよいとこんなものさ。」
私は得意の微笑を浮かべながら、靜かに又元の椅子に腰を下しました。

「こりや皆ほんたうの金貨かい。」
呆氣にとられてゐた友人の一人が、漸くかう私に尋ねたのは、それから五分ばかりたつた後のことです。

「ほんたうの金貨さ、嘘だと思つたら、手にとつて見給へ。」
「まさか火傷をするやうなことはないまいね。」

友人の一人は恐る恐る、床の上の金貨を手にとつて見ましたが、
「成程こりやほんたうの金貨だ、おい、給仕、箒と塵取りとを持って来て、これを皆掃き集めてくれ。」
給仕はすぐに言ひつけられた通り、床の上の金貨を掃き集めて、堆く側のテーブルへ盛り上げました。

友人たちは皆そのテーブルのまはりを圍みながら、
「ざつと二十萬圓位はありさうだね。」
「いや、もつとありさうだ、華奢なテーブルだつた日には、つぶれてしまふ位あるぢやないか。」

「何しろ大した魔術を習つたものだ。石炭の火がすぐに金貨になるのだから。」

「これぢや一週間とたたない内に、岩崎や三井にも負けないうな金満家になつてしまふだらう。」などと、口口に私の魔術を褒めそやしました。が、私はやはり椅子によりかかつた儘悠然と葉巻の煙を吐いて、

「いや、僕の魔術といふやつは、一旦慾心を起したら、二度と使ふことが出来ないのだ。だからこの金貨にしても、君たちが見てしまつた上は、すぐに又元の暖爐の中へ抛りこんでしまはうと思つてゐる。」

友人たちは私の言葉を聞くと、言ひ合せたやうに、反對し始めました。これだけの大金を元の石炭にしてしまふのは、もつたない話だと言ふのです。が、私はミストラ君に約束した手前もありますから、どうしても暖爐に抛りこむと、強情に友人たちと争ひました。するとその友人たちの中でも、一番狡猾だといふ評判のあるのが、鼻の先で、せせら笑ひながら、

「君はこの金貨を元の石炭にしようと言ふ。僕たちは又したくないと言ふ。それぢやいつまでたつた所で、議論が干ないのは當り前だらう。そこで僕が思ふには、この金貨を元手にして、君が僕たちと骨牌をするのだ。さうしてもし君が勝つたなら、石炭にするのも何にするのも、自由に君が始末するが好い。もし僕たちが勝つたなら、金貨の儘僕たちへ渡し給へ。さうすれば御互の申し分も立つて、至極満足だらうぢやないか。」

それでも私はまだ首を振つて、容易にその申し出しに賛成しようとはしませんでした。所がその友人は、

「君が僕たちと骨牌をしないのは、つまりその金貨を僕たちに取られたくないと思ふからだらう。それなら魔術を使ふために、慾心を捨てたとか何とかいふ、折角の君の決心も怪しくなつて来る譯ぢやないか。」

「いや、何も僕は、この金貨が惜しいから石炭にするのぢやない。」

「それなら骨牌をやり給へな。」

何度もかういふ押問答を繰返した後で、とうとう私はその友人の言葉通り、テーブルの上の金貨を元手に、どうしても骨牌を闘はせなければならぬ羽目に立ち至りました。勿論友人たちは皆大喜びで、すぐにトラップを一組取り寄せると、部屋の片隅にある骨牌机を圍みながら、まだためらひ勝ちな私を早く早くと急ぎ立てるのです。

ですから私も仕方がなく、暫くの間は友人たちを相手に、嫌嫌骨牌をしてゐました。が、どういふものか、その夜に限つて、ふだんは格別骨牌上手でもない私が、謎のやうにどんどん勝つのです。すると又妙なもので、始は氣のりもしなかつたのが、だんだん面白くなり始めて、ものの十分とたたない内に、いつか私は一切を忘れて、熱心に骨牌を引き始めました。

友人たちは、元より私から、あの金貨を残らず捲き上げるつもりで、わざわざ骨牌を始めたのですから、かうなると皆あせりにあせつて、殆血相さへ變るかと思ふほど、夢中になつて勝負を争ひ出しました。が、

いくら友人たちが躍起となつても、私は一度も負けないばかりか、とうとうしまひには、あの金貨と略同じほどの金高だけ、私の方が勝つてしまつたぢやありませんか。するとさつきの人悪い友人が、まるで、氣違ひのやうな勢で、私の前に、札をつきつけながら、

「さあ、引き給へ、僕は僕の財産をすつかり賭ける。地面も、家作も、馬も、自動車も、一つ残らず賭けてしまふ。その代り君はあの金貨の外に、今まで君が勝つた金を悉く賭けるのだ。さあ、引き給へ。」

私はこの刹那に慾が爆发了。テーブルの上に積んである、山のやうな金貨ばかりか、折角私が勝つた金さへ、今度運悪く負けたが最後、皆相手の友人に取られてしまはなければなりません。のみならずこの勝負に勝ちさへすれば、私は向うの全財産を一度に手へ入れることが出来るのです。こんな時に使はなければどこに魔術などを教はつた、苦心の甲斐があるのでせう。さう思ふと私は矢も楯もたまらなくなつて、そつと魔術を使ひながら、決闘でもするやうな勢で、

「よろしい。まづ君から引き給へ。」

「九。」

「王様。」

私は勝ち誇つた聲を挙げながら、まづ着になつた相手の眼の前へ、引き當てた札を出して見せました。すると不思議にもその骨牌の王様が、まるで魂がはひつたやうに、冠をかぶつた頭を擡げて、ひよいと札

の外へ體を出すと、行儀よく劔を持つた儘、にやりと氣味の悪い微笑を浮べて、

「御婆サン。御婆サン。御客様ハ御歸リニナルサウダカラ、寢床ノ支度ハシナクテモ好イヨ。」

と、聞き覚えのある聲で言ふのです。と思ふと、どういふ譯か、窓の外は降る雨脚までが、急に又あの大森の竹藪にしぶくやうな、寂しいざんざん降りの音を立て始めました。

ふと氣がついてあたりを見廻ると、私はまだうす暗い石油ランプの光を浴びながら、まるであの骨牌の王様のやうな微笑を浮べてゐるミスラ君と、向ひ合つて坐つてゐたのです。

私が指の間に挟んだ葉巻の灰さへ、やはり落ちずにたまつてゐる所を見ても、私が一月ばかりたつたと思つたのは、ほんの二三分の間に見た、夢だつたのに違ひありません。けれどもその二三分の短い間に、私がハッサン・カンの魔術の秘法を習ふ資格のない人間だといふことは、私自身にもミスラ君にも、明かになつてしまつたのです。私は恥しさに頭を下げた儘、暫くは口もきけませんでした。

「私の魔術を使はうと思つたら、まづ慾を捨てなければなりません。あなたはそれだけの修行が出来てゐないのです。」

ミスラ君は氣の毒さうな眼つきをしながら、縁へ赤く花模様を織り出したテーブル掛の上に肘をついて、靜かにかう私をたしなめました。

三つの寶

一

森の中。三人の盗人が寶を争つてゐる。寶とは一飛びに千里飛ぶ長靴、着れば姿の隠れるマントル、鐵でもまつ二つに切れる劔——但しいづれも見つた處は、古道具らしい物ばかりである。

第一の盗人 そのマントルをこつちへよこせ。

第二の盗人 餘計な事を云ふな、その劔こそこつちへよこせ。——おや、おれの長靴を盗んだな。

第三の盗人 この長靴はおれの物ぢやないか？ 貴様こそおれの物を盗んだのだ。

第一の盗人 よしよし、ではこのマントルはおれが貰つて置かう。

第二の盗人 こん畜生！ 貴様なぞに渡してたまるものか！

第一の盗人 よくもおれを撲つたな。——おや、又おれの劔も盗んだな？

第三の盗人 何だ、このマントル泥坊め！

三人の者が大喧嘩になる。其處へ馬に跨つた王子が一人、森の中の路を通りかかる。

王子 おいおい、お前たちは何をしてゐるのだ？（馬から下りる）

第一の盗人 何、こいつが悪いのです。わたしの劔を盗んだ上、マントルさへよこせと云ふものですから、

—

第三の盗人 いえ、そいつが悪いのです。マントルはわたしのを盗んだのです。

第二の盗人 いえ、こいつ等二人とも大泥坊です。これは皆わたしのものなのですから、——

第一の盗人 嘘をつけ！

第二の盗人 この大法螺吹きめ！

三人又喧嘩をしようとする。

王子 待て待て、たかが古いマントルや穴のあいた長靴位、誰がとつても好いぢやないか？

第二の盗人 いえ、さうは行きません。このマントルは着たと思ふと、姿の隠れるマントルなのです。

第一の盗人 どんな又鐵の兜でも、この劔で切れば切れるのです。

第三の盗人 この長靴もはきさへすれば、一飛びに千里飛べるのです。

王子 成程、さう云ふ寶なら、喧嘩をするのも尤もな話だ。が、それならば慾張らずに、一つづつ分ければ

好いぢやないか？

第二の盗人 そんな事をしてごらん下さい。わたしの首はいつ何時、あの劔に切られるかわかりません。

第一の盗人 いえ、それよりも困るのは、あのマントルを着られれば、何を盗まれるか知れずまい。

第二の盗人 いえ、何を盗んだ所が、あの長靴をはかなければ、思ふやうには逃げられない訣です。

王子 それも成程一理窟だな。では物は相談だが、わたしにみんな賣つてくれないか？ さうすれば心配も入らない筈だから、

第一の盗人 どうだい、この殿様に賣つてしまふのは？

第三の盗人 成程、それも好いかも知れない。

第二の盗人 唯値段次第だな、

王子 値段は——さうだ、そのマントルの代りには、この赤いマントルをやらう、これには刺繍の縁もついてゐる。それからその長靴の代りには、この寶石のはひつた靴をやらう。この黄金細工の劔をやれば、その劔をくれても損はあるまい。どうだ、この値段では？

第二の盗人 わたしはこのマントルの代りに、そのマントルを頂きませう。

第一の盗人と第三の盗人 わたしたちも申し分はありません。

王子 さうか、では取り換へて貰はう。

王子はマントル、劔、長靴等を取り換へた後、又馬の上に跨りながら、森の中の路を行きかける。

王子 この先に宿屋はないか？

第一の盗人 森の外へ出さへすれば、「黄金の角笛」といふ宿屋があります。では御大事にいらつしやい。

王子 さうか。ではさやうなら。(去る)

第三の盗人 うまい商賣をしたな、おれはあの長靴が、こんな靴にならうとは思はなかつた。見ろ、止め金には金剛石がついてゐる。

第二の盗人 おれのマントルも立派な物ぢやないか？ これをかう着た所は、殿様のやうに見えるだらう。

第一の盗人 この劔も大した物だぜ。何しろ柄も鞘も黄金だからな。——しかしああ安ん欺されるとは、あの王子も大莫迦ぢやないか。

第二の盗人 しつ 壁に耳あり徳利にも口だ。まあ、何處かへ行つて一杯やらう。

三人の盗人は嘲笑ひながら、王子とは反對の路へ行つてしまふ。

二

「黄金の角笛」と云ふ宿屋の酒場。酒場の隅には王子がパンを啣つてゐる。王子の外にも客が七八人、

——これは皆村の農夫らしい。

宿屋の主人 愈 王女の御婚禮があるさうだね。

第一の農夫 さう云ふ話だ。なんでも御増になる人は、黒ん坊の王様だと云ふぢやないか？

第二の農夫　しかし王女はあの王様が大好きだと云ふ噂だぜ。

第一の農夫　嫌ひならばお止しなされば好いのに。

主人　所がその黒ん坊の王様は、三つの寶ものを持つてゐる。第一が千里飛べる長靴、第二が鐵さへ切れる劍、第三が姿の隠れるマントル——それを皆献上すると云ふものだから、慾の深いこの國の王様は、王女をやると仰有つたさうだ。

第二の農夫　御可哀さうなのは王女御一人だな。

第一の農夫　誰か王女をお助け申すものはないだらうか？

主人　いや、いろいろ國の王子の中には、さう云ふ人もあるさうだが、何分あの黒ん坊の王様にはかなはな
いから、みんな指を啣へてゐるのだとさ。

第二の農夫　おまけに慾の深い王様は、王女を人に盗まれないやうに、龍の番人を置いてあるさうだ。

主人　何、龍ぢやない、兵隊ださうだ。

第一の農夫　わたしが魔法でも知つてゐれば、まつ先に御助け申すのだが、——

主人　當り前さ。わたしも魔法を知つてゐれば、お前さんなどに任せて置きはしない。(一同笑ひ出す)

王子　(突然一同の中へ飛び出したながら) よし心配するな！ きつとわたしが助けて見せる。

一同　(驚いたやうに) あなたが？

王子　さうだ、黒ん坊の王などは何人でも来い。(腕組をした儘、一同を見まはす) わたしは片つ端から退治して見せる。

主人　ですがあの王様には、三つの寶があるさうです。第一には千里飛ぶ長靴、第二には、——

王子　鐵でも切れる劍か？ そんな物はわたしも持つてゐる、この長靴を見る。この劍を見る。この古いマントルを見る、黒ん坊の王が持つてゐるのと、寸分も違はない寶ばかりだ。

一同　(再び、驚いたやうに) その靴が？ その劍が？ そのマントルが？

主人　(疑はしさうに) しかしその長靴には、穴があいてゐるぢやありませんか？

王子　それは穴があいてゐる、が、穴はあいてゐても、一飛びに千里飛ばれるのだ。

主人　ほんたうですか？

王子　(憐むやうに) お前には嘘だと思はれるかも知れない。よし、それなら飛んで見せる。入口の戸をあけて置いてくれ。好いか。飛び上つたと思ふと見えなくなるぞ。

主人　その前に御勘定を頂きませうか？

王子　何、すぐに歸つて来る。土産には何を持つて来てやらう、イタリアの石榴か、イスパニアの眞桑瓜か、

それともずつと遠いアラビアの無花果か？

主人　御土産ならば何でも結構です。まあ飛んで見せて下さい。

王子 では飛ぶぞ。一、二、三！

王子は勢よく飛び上る。が、戸口へも届かない内に、どたりと尻餅をついてしまふ。一同どつと笑ひ立てる。

主人 こんな事だらうと思つたよ。

第一の農夫 千里所か、二三間も飛べなかつた。

第二の農夫 何、千里飛んだのさ。一度千里飛んで置いて、又千里飛び返つたから、もとの所へ来てしまつたのだらう。

第一の農夫 冗談ぢやない。そんな莫迦な事があるものか。

一同大笑ひになる。王子はすこすこ起き上りながら、酒場の外へ行かうとする。

主人 もしもし、御勘定を置いて行つて下さい。

王子 無言の儘、金を投げる。

第二の農夫 お土産は？

王子 (劍の柄へ手をかける) 何だと？

第二の農夫 (尻ごみしながら) いえ、何とも云ひはしません。(獨り語のやうに) 劍だけは首位斬れるかも知れない。

主人 (なだめるやうに) まあ、あなたなどは御年若なのですから、一先御父様の御國へお歸りなさい。いくらあなたが騒いで見た所が、とても黒ん坊の王様にはかなひはしません。兎角人間と云ふ者は、何でも身の程を忘れないやうに慎み深くするのが上分別です。

一同 さうなさい。さうなさい。悪い事は云ひません。

王子 わたしは何でも、——何でも出来ると思つたのに、(突然涙を落す) お前たちにも恥づかしい。(顔を隠しながら) ああ、この儘消えてしまひたいやうだ。

第一の農夫 そのマントルを着て御覽なさい。さうすれば消えるかも知れません。

王子 畜生！ (ちだんだを踏む) よし、いくらでも莫迦にしろ。わたしはきつと黒ん坊の王から可哀さうな

王女を助けて見せる。長靴は千里飛ばれなかつたが、まだ劍もある。マントルも、——(一生懸命に) いや

空手でも助けて見せる。その時に後悔しないやうにしろ。(氣違ひのやうに酒場を飛び出してしまふ。)

主人 困つたものだ。黒ん坊の王様に殺されなければ好いが、——

三

王城の庭。薔薇の花の中に噴水が上つてゐる。始は誰もゐない。少時の後、マントルを着た王子が出て来る。

王子 やはりこのマントルは着たと思ふと、忽ち姿が隠れると見える。わたしは城の門をはひつてから、兵卒にも遇へば腰元にも遇つた。が、誰も咎めたものはない。マントルさへ着てゐれば、あの薔薇を吹いてゐる風のやうに、王女の部屋へもはひれるだらう。——おや、あそこへ歩いて来たのは、噂に聞いた王女ぢやないか？ 何處かへ一時身を隠してから、——何、そんな必要はない。わたしは此處に立つてゐても、王女の眼には見えない筈だ。

王女は噴水の縁へ來ると、悲しさにため息をする。

王女 わたしは何と云ふ不仕合せなのだらう。もう一週間もたたない内に、あの憎らしい黒ん坊の王は、わたしをアフリカへつれて行つてしまふ。獅子や鰐のゐるアフリカへ、——(其處の芝の上に坐りながら)わたしは何時までもこの城にゐたい。この薔薇の花の中に、噴水の音を聞いてゐたい。……

王子 何と云ふ美しい王女だらう。わたしはたとひ命を捨てても、この王女を助けて見せる。

王女 (驚いたやうに)王子を見ながら)誰です、あなたは？

王子 (獨り語のやうに)しまつた！ 聲を出したのは悪かつたのだ！

王女 聲を出したのが悪い？ 氣違ひかしら？ あんな可愛い顔をしてゐるけれども、——

王子 顔？ あなたにはわたしの顔が見えるのですか？

王女 見えますわ。まあ、何を不思議さうに考へていらつしやるの？

王子 このマントルも見えますか？

王女 ええ、ずるぶん古いマントルぢやありませんか？

王子 (落膽したやうに)わたしの姿は見えない筈なのですがね。

王女 (驚いたやうに)どうして？

王子 これは一度着さへすれば、姿が隠れるマントルなのです。

王女 それはあの黒ん坊の王のマントルでせう。

王子 いえ、これもさうなのです。

王女 だつて姿が隠れないぢやありませんか？

王子 兵卒や腰元に遇つた時は、確かに姿が隠れたのですがね。その證據には誰に遇つても、咎められた事がないのですから。

王女 (笑ひ出す)それはその筈ですわ。そんな古いマントルを着ていらつしやれば、下男か何かと思はれますもの。

王子 下男！ (落膽したやうに坐つてしまふ)やはりこの長靴と同じ事だ。

王女 その長靴もどうかしましたの？

王子 これも千里飛ぶ長靴なのです？

王女 黒ん坊の王の長靴のやうに？

王子 ええ。――所がこの間飛んで見たら、たつた二三間も飛べないのです。御覽なさい。まだ劔もありま

す。これは鐵でも切れる筈なのですが、――

王女 何か切つて御覽になつて？

王子 いえ、黒ん坊の王の首を斬るまでは、何も斬らないつもりなのです。

王女 あら、あなたは黒ん坊の王と、腕競べをなさりにいらしたの？

王子 いえ、腕競べなどに來たのぢやありません。あなたを助けに來たのです。

王女 ほんたうに？

王子 ほんたうにです。

王女 まあ、嬉しい。

突然黒ん坊の王が現れる。王子と王女とはびつくりする。

黒ん坊の王 今日は、わたしは今アフリカから一飛びに飛んで來たのです。どうです、わたしの長靴の力は？

王女 (冷淡に)ではもう一度アフリカへ行つていらつしやい。

王子 いや、今日はあなたと一しよに、ゆつくり御話がしたいのです。(王子を見る)誰ですか、その下男は？

王子 下男？ (腹立たしさうに立ち上る)わたしは王子です。王女を助けに來た王子です。わたしが此處に

ある限りは、指一本も王女にはさせません。

王 (わざと丁寧)わたしは三つの寶を持つてゐます。あなたはそれを知つてゐますか？

王子 劔と長靴とマントルですか？ 成程わたしの長靴は一町も飛ぶ事は出来ません。しかし王女と一しよ

ならばこの長靴をはいてゐても、千里や二千里は驚きません。又このマントルを御覽なさい、わたしが下

男と思はれた爲、王女の前にも來られたのは、やはりマントルのおかげです。これでも王子の姿だけは、

隠す事が出来たぢやありませんか？

王 (嘲笑ふ)生意氣な！ わたしのマントルの力を見るが好い。(マントルを着る。同時に消え失せる)

王女 (手を打ちながら)ああ、もう消えてしまいました。わたしはあの人が消えてしまふと、ほんたうに嬉

しくつてたまりませんわ。

王子 ああ云ふマントルも便利ですね。丁度わたしたちの爲に出來てゐるやうです。

王 (突然又現はれる。忌まはしきさうに)さうです。あなたの方の爲に出來てゐるやうなものです。わたしには役に

も何にもたたない。(マントルを投げ捨てる)しかしわたしは劔を持つてゐる。(急に王子を睨みながら)あ

なたはわたしの幸福を奪ふものだ。さあ尋常に勝負をしよう。わたしの劔は鐵でも切れる。あなたの首位

は何でもない。(劔を抜く)

王女 (立ち上るが早いか、王子をかばふ)鐵でも切れる劔ならば、わたしの胸も突けるでせう。さあ、一突

きに突いて御覽なさい。

王 (尻ごみをしながら) いや、あなたは斬れません。

王女 (嘲るやうに) まあ、この胸も突けないのですか? 鐵でも斬れるとおつしやつた癖に?

王子 お待ちなさい。(王女を押し止めながら) 王の云ふ事は尤もです。王の敵はわたしですから、尋常に勝負をしなければなりません。(王に) さあ、すぐに勝負をしよう。(劍を抜く)

王 年の若いのに感心な男だ。好いか? わたしの劍にさはれば命はないぞ。

王と王子と劍を打ち合せる。すると忽ち王の劍は、杖か何か切るやうに、王子の劍を切つてしまふ。

王 どうだ。

王子 劍は切られたのに違ひない。が、わたしはこの通り、あなたの前でも笑つてゐる。

王 ではまだ勝負を續ける氣か?

王子 あたり前だ。さあ、來い。

王 もう勝負などはしないでも好い。(急に劍を投げ捨てる) 勝つたのはあなただ。わたしの劍などは何にもならない。

王子 (不思議さうに王を見る) なぜ?

王 なぜ! わたしはあなたを殺した所が、王女には愈憎まれるだけだ。あなたにはそれが分らないのか?

王子 いや、わたしにはわかつてゐる。唯、あなたにはそんな事も、わかつてゐなさうな氣がしたから。

王 (考へに沈みながら) わたしには三つの寶があれば、王女も貰へると思つてゐた。が、それは間違ひだつたらしい。

王子 (王の肩に手をかけながら) わたしも三つの寶があれば、王女を助けられると思つてゐた。が、それも間違ひだつたらしい。

王 さうだ。我我は二人とも間違つてゐたのだ。(王子の手を取る) さあ、綺麗に仲直りをしませう。わたしの失禮は赦して下さい。

王子 わたしの失禮も赦して下さい。今になつて見ればわたしが勝つたか、あなたか勝つたかわからないやうです。

王 いや、あなたはわたしに勝つた。わたしはわたし自身に勝つたのです。(王女に) わたしはアフリカへ歸ります。どうか御安心なすつて下さい。王子の劍は鐵を切る代りに、鐵よりもつと堅い、わたしの心を刺したのです。わたしはあなた方の御婚禮の爲に、この劍と長靴と、それからあのマントルと、三つの寶をさし上げませう。もうこの三つの寶があればあなた方二人を苦しめる敵は、世界にないと思ひますが、もし又何か悪いやつがあつたら、わたしの國へ知らせして下さい。わたしはいつでもアフリカから、百萬の黒ん坊の騎兵と一しよに、あなた方の敵を征伐に行きます。(悲しさうに) わたしはあなたを迎へる爲に、

アフリカの都のまん中に、大理石の御殿を建てて置きました。その御殿のまはりには、一面に蓮の花が咲いてゐるのです。(王子に)どうかあなたはこの長靴をはいたら、時時遊びに来て下さい。

王子 きつと御馳走になりに行きます。

王女 (黒ん坊の王の胸に、薔薇の花をさしてやりながら)わたしはあなたにすまない事をしました。あなたがこんな優しい方だとは、夢にも知らずにゐたのです、どうかかんにんして下さい。ほんたうにわたしはすまない事をしました。(王の胸にすがりながら、子供のやうに泣き始める)

王 (王女の髪を撫でながら)有難う。よくさう云つてくれました。わたしも悪魔ではありません。悪魔も同様な黒ん坊の王は御伽噺にあるだけです。(王子に)さうぢやありませんか？

王子 さうです。(見物に向ひながら)皆さん！ 我我三人は目がさめました。悪魔のやうな黒ん坊の王や、三つの寶を持つてゐる王子は、御伽噺にあるだけなのです。我我はもう目がさめた以上、御伽噺の中の國には、住んでゐる訣には行きません。我我の前には霧の奥から、もつと廣い世界が浮んで來ます。我我はこの薔薇と噴水との世界から、一しよにその世界へ出て行きませう。もつと廣い世界！ もつと醜い、もつと美しい、——もつと大きい御伽噺の世界！ その世界に我我を待つてゐるものは、苦しみか又は楽しみか、我我は何も知りません。唯我我はその世界へ、勇ましい一隊の兵卒のやうに、進んで行く事を知つてゐるだけです。

庭

上

それはこの宿の本陣に當る、中村と云ふ舊家の庭だつた。

庭は御維新後十年ばかりの間は、どうか舊態を保つてゐた。瓢箪なりの池も澄んでゐれば、築山の松の枝もしだれてゐた。栖鶴軒、洗心亭、——さう云ふ四阿も残つてゐた。池の窮まる裏山の崖には、白白と瀧も落ち續けてゐた。和の宮様御下向の時、名を賜はつたと云ふ石燈籠も、やはり年年に擴がり勝ちな山吹の中に立つてゐた。しかしその何處かにある荒廢の感じは隠せなかつた。殊に春さき、——庭の内外の木木の梢に、一度に若芽の萌え立つ頃には、この明媚な人工の景色の背後に、何か人間を不安にする、野蠻な力の迫つて來た事が、一層露骨に感ぜられるのだつた。

中村家の隠居、——傳法肌の老人は、その庭に面した母屋の炬燵に、頭瘡を病んだ老妻と、碁を打つたり花合せをしたり、屈托のない目を暮してゐた。それでも時時は立て續けに、五六番老妻に勝ち越されると、むきになつて怒り出す事もあつた。家督を繼いだ長男は、從兄弟同志の新妻と、廊下續きになつてゐる、手

狭い離れに住んでゐた。長男は表徳を文室と云ふ、癩癩の強い男だつた。病身な妻や弟たちは勿論、隠居さへ彼には憚かつてゐた、唯その頃の宿にゐた、乞食宗匠の井月ばかりは、度々彼の所へ遊びに來た。長男も不思議に井月にだけは、酒を飲ませたり字を書かせたり、機嫌の好い顔を見せてゐた。「山はまだ花の香もあり時鳥、井月。とどころ瀧のほのめく、文室」——そんな附合も残つてゐる。その外にまだ弟が二人、——次男は縁家の穀屋へ養子に行き、三男は五六里離れた町の、大きい造り酒屋に勤めてゐた。彼等は二人とも云ひ合せたやうに、滅多に本家には近づかなかつた。三男は居どころが遠い上に、もともと當主とは氣が合はなかつたから。次男は放蕩に身を持ち崩した結果、養家にも殆ど歸らなかつたから。

庭は二年三年と、だんだん荒廢を加へて行つた。池には南京漢が浮び始め、植込みには枯木が交るやうになつた。その内に隠居の老人は、或早りの烈しい夏、腦溢血の爲に頓死した。頓死する四五日前、彼が焼酎を飲んでゐると、池の向うにある洗心亭へ、白い装束をした公卿が一人、何度も出たりはひつたりしてゐた。少くとも彼には晝日なな、そんな幻が見えたのだつた。翌年は次男が春の末に、養家の金をさらつたり、酌婦と一しよに駈落ちをした。その又秋には長男の妻が、月足らずの男子を産み落した。

長男は父の死んだ後、母と母屋に住まつてゐた。その跡の離れを借りたのは、土地の小學校の校長だつた。校長は福澤諭吉翁の實利の説を奉じてゐたから、庭にも果樹を植ゑるやうに、何時か長男を説き伏せてゐた。爾來庭は春になると、見慣れた松や柳の間に、桃だの杏だの李だの、雑色の花を盛るやうになつた。校長は

時時長男と、新しい果樹園を歩きながら、「この通り立派に花見も出来る。一擧兩得ですね」と批評したりした。しかし築山や池や四阿は、それだけに又以前よりは、一層影が薄れ出した。云はば自然の荒廢の外に、人工の荒廢も加はつたのだつた。

その秋は又裏の山に、近年にない山火事があつた。それ以來池に落ちてゐた瀧は、ぼつたり水が絶えてしまつた。と思ふと雪の降る頃から、今度は當主が煩ひ出した。醫者の見立てでは昔の癆症、今の肺病とか云ふ事だつた。彼は寝たり起きたりしながら、だんだん癩ばかり昂らせて行つた。現に翌年の正月には、年始に來た三男と激論の末、手炙りを投げつけた事さへあつた。三男はその時歸つたぎり、兄の死に目にも會はずにしまつた。當主はそれから一年餘り後、夜伽の妻に守られながら、蚊帳の中に息をひきとつた。「蛙が啼いてゐるな、井月はどうしつら？」——これが最期の言葉だつた。が、もう井月はとうの昔、この邊の風景にも飽きたのか、さつぱり乞食にも來なくなつてゐた。

三男は當主の一周忌をすまずと、主人の末娘と結婚した。さうして離れを借りてゐた小學校長の轉任を幸ひ、新妻と其處へ移つて來た。離れには黒塗の箆筒が來たり、紅白の綿が飾られたりした。しかし母家ではその間に、當主の妻が煩ひ出した。病名は夫と同じだつた。父に別れた一粒種の子供、——廉一も母が血を吐いてからは、毎晩祖母と寝かせられた。祖母は床へはひる前に、必頭で手拭をかぶつた。それでも頭瘡の臭氣をたよりに、夜更には鼠が近寄つて來た。勿論手拭を忘れでもすれば、鼠に頭を噛まれる事もあつた。

同じ年の暮に當主の妻は油火の消えるやうに死んで行つた。その又野邊送りの翌日には、築山の陰の栖鶴軒が、大雪の爲につぶされてしまつた。

もう一度春がめぐつて來た時、庭は唯濁つた池のほとりに、洗心亭の茅屋根を残した。雑木原の木の芽に變つたのである。

中

或雪曇りの日の暮方、駈落ちをしてから十年目に、次男は父の家へ歸つて來た。父の家——と云つてもそれは事實上、三男の家と同様だつた。三男は格別嫌な顔もせず、しかし又格別喜びもせず、云はば何事もなかつたやうに、道樂者の兄を迎へ入れた。

爾來次男は母家の佛間に、悪疾のある體を横たへたなり、ちつと炬燵を守つてゐた。佛間には大きい佛壇に、父や兄の位牌が竝んでゐた。彼はその位牌の見えないやうに、佛壇の障子をしめ切つて置いた。まして母や弟夫婦とは、三度の食事を共にする外は、殆ど顔も合せなかつた。唯みなし兒の廉一だけは、時時彼の居間へ遊びに行つた。彼は廉一の紙石板へ、山や船を描いてやつた。「向島花ざかり、お茶屋の姐さんちよ」とお出で。——どうかするとそんな昔の唄が、覺束ない筆蹟を見せる事もあつた。

その内に又春になつた。庭には生ひ伸びた草木の中に、乏しい桃や杏が花咲き、どんより水光りをさせた

池にも、洗心亭の影が映り出した。しかし次男は不相變、たつた一人佛間に閉ぢこもつたが、晝でも大抵はうとうとしてゐた。すると或日彼の耳には、かすかな三味線の音が傳はつて來た。と同時に唄の聲も、とぎれとぎれに聞え始めた。「この度諏訪の戦ひに、松本身内の吉江様、大砲固めにおはします。……」次男は横になつた儘、心もち首を擡げて見た。と、唄も三味線も、茶の間にある母に違ひなかつた。「その日の出で立ち花やかに、勇み進みし働きは天つ晴勇士と見えにける。……」母は孫にでも聞かせてゐるのか、大津繪の替へ唄を唄ひ續けた。しかしそれは傳法肌の隠居が、何處かの花魁に習つたと云ふ、二三十年以前の流行唄だつた。「敵の大玉身に受けて、是非もなや、惜しき命を豊橋に、草葉の露と消えぬとも、末世末代名は残る……」次男は無精鬚の伸びた顔に、何時か妙な妙な眼を輝かせてゐた。

それから二三日たつた後、三男は藪の多い築山の陰に、土を掘つてゐる兄を發見した。次男は息を切らせながら、不自由さうに鍬を揮つてゐた。その姿は何處か滑稽な中に、眞剣な意氣組みもあるものだつた。「あなたに様、何をしてゐるのだ？」——三男は巻煙草を啣へたなり、後から兄へ聲をかけた。「おれか？」——次男は眩しさうに弟を見上げた。「こけへ今せんげ（小流れ）を造らうと思ふ。」「せんげを造つて何するのだ？」——庭を

もとのやうにしつと思ふだ。」「三男はにやにや笑つたが、何ともその先は尋ねなかつた。次男は毎日鍬を持つては、熱心にせんげを造り續けた。が、病に弱つた彼には、それだけでも容易な仕事ではなかつた。彼は第一に疲れ易かつた。その上慣れない仕事だけに、豆を拵へたり、生爪を剥いだり、何

かと不自由も起り勝ちだつた。彼は時時鉄を捨てると、死んだやうに其處へ横になつた。彼のまはりには何時になつても庭をこめた陽炎の中に、花や若葉が煙つてゐた。しかし静かな何分かの後、彼は又踰と立ち上ると、執拗に鉄を使ひ出すのだつた。

しかし庭は幾日たつても、拂拭しい變化を示さなかつた。池には不相草が茂り、植込みにも雑木が枝を張つてゐた。殊に果樹の花の散つた後は、前よりも荒れたかと思ふ位だつた。のみならず一家の老若も、次男の仕事には同情がなかつた。山氣に富んだ三男は、米相場や蠶に没頭してゐた。三男の妻は次男の病に女らしい嫌悪を感じてゐた。母も、――母は彼の體の爲に、土いぢりの過ぎるのを懼れてゐた。次男はそれでも剛情に、人間と自然とへ背を向けながら、少しづつ庭を造り變へて行つた。

その内に或雨上りの朝、彼は庭へ出かけて見ると、露の垂れかかつたせんげの縁に、石を並べてゐる廉一を見つけた。「叔父さん。」――廉一は嬉しうに彼を見上げた「おれにも今日から手傳はせておくりや。」「うん、手傳つてくりや。」次男もこの時は久しぶりに、晴れ晴れした微笑を浮べてゐた。それ以來廉一は、外へも出ずにせつせと叔父の手傳ひをし出した。――次男は又甥を慰める爲に、木かげに息を入れる時には、海とか東京とか鐵道とか、廉一の知らない話をして聞かせた。廉一は青梅を嚼じりながら、まるで催眠術にでもかかつたやうに、どつとその話に聞き入つてゐた。

その年の梅雨は空梅雨だつた。彼等、――年とつた癡人と童子とは、烈しい日光や草いきれにもめげず、池を掘つたり木を伐つたり、だんだん仕事を擡げて行つた。が、外界の障害にはどうにかかうにか打ち克つても、内面の障害だけは仕方がなかつた。次男は殆ど幻のやうに昔の庭を見る事が出来た。しかし庭木の配りとか、或は徑のつけ方とか、細かい部分の記憶になると、はつきりした事はわからなかつた。彼は時時仕事の最中、突然鉄を杖にした儘ぼんやりあたりを見廻す事があつた。「何しただい？」――廉一は必ず叔父の顔へ、不安らしい目付きを擧げるのだつた。「此處はもとどうなつてゐつらなあ？」――汗になつた叔父はうろろしながら、何時も亦獨り語しか云はなかつた。「この楓は此處になかつらと思ふがなあ。」廉一は唯泥まみれの手に、蟻でも殺すより外はなかつた。

内面の障害はそればかりではなかつた。次第に夏も深まつて來ると次男は絶え間ない過勞の爲か頭も何時か混亂して來た。一度掘つた池を埋めたり、松を抜いた跡へ松を植ゑたり、――さう云ふ事も度度あつた。殊に廉一を怒らせたのは、池の杭を造る爲めに、水際の柳を伐つた事だつた。「この柳はこの間植ゑたばかりだに。」――廉一は叔父を睨みつけた。「さうだつたかなあ。おれには何だかわからなくなつてしまつた。」――叔父は憂鬱な眼をしながら、日盛りの池を見つめてゐた。

それでも秋が來た時には、草や木の簇が中から、腫げに庭も浮き上つて來た。勿論昔に比べれば、栖鶴軒も見えなかつたし、瀧の水も落ちてはゐなかつた。いや、名高い庭師の造つた、優美な昔の趣は、殆ど何處にも見えなかつた。しかし「庭」は其處にあつた。池はもう一度澄んだ水に、圓い築山を映してゐた。

松ももう一度洗心亭の前に、悠悠と枝をさしのべてゐた。が、庭が出来ると同時に、次男は床につき切りになつた。熱も毎日下らなければ、體の節節も痛むのだつた。「あんまり無理はつかりしるせぬぢや。」——枕もとに坐つた母は、何度も同じ愚痴を繰り返した。しかし次男は幸福だつた。庭には勿論何箇所でも、直したい所が残つてゐた。が、それは仕方がなかつた。兎に角骨を折つた甲斐だけはあつた。——其處に彼は満足してゐた。十年の苦勞は詮めを教へ、詮めは彼を救つたのだつた。

その秋の末、次男は誰も氣づかない内に何時か息を引きとつてゐた。それを見つけたのは廉一だつた。彼は大聲を擧げながら、縁續きの離れへ走つて行つた。一家は直に死人のまはりへ、驚いた顔を集めてゐた。「見まじだよ。兄様は笑つてゐるやうだに。」——三男は母をふり返つた。「おや、今日は佛様の障子が明いてゐる。」——三男の妻は死人を見ずに、大きい佛壇を氣にしてゐた。

次男の野邊送りをすませた後、廉一はひとり洗心亭に、坐つてゐる事が多くなつた。何時も途方に暮れたやうに、晩秋の水や木を見ながら、……

下

それはこの宿の本陣に當る、中村と云ふ舊家の庭だつた。それが舊に復した後、まだ十年とたたない内に、今度は家ぐるみ破壊された。破壊された跡には停車場が建ち、停車場の前には小料理屋が出来た。

中村の自家はもうその頃、誰も残つてゐなかつた。母は勿論とうの昔、亡い人の數にはひつてゐた。三男も事業に失敗した揚句、大阪へ行つたとか云ふ事だつた。

汽車は毎日停車場へ来ては、又停車場を去つて行つた。停車場には若い驛長が一人、大きい机に向つてゐた。彼は閑散な事務の合ひ間に、青い山山を眺めやつたり、土地ものの驛員と話したりした。しかしその話の中にも、中村家の噂は上らなかつた。況や彼等のゐる所に、築山や四阿のあつた事は、誰一人考へもしないのだつた。

が、その間に廉一は、東京赤坂の或洋畫研究所に、油畫の畫架に向つてゐた。天窗の光、油繪の具の匂、桃割に結つたモデルの娘、——研究所の空氣は故郷の家庭と、何の連絡もないものだつた。しかしブラッシユを動かしてゐると、時時彼の心に浮ぶ、寂しい老人の顔があつた。その顔は又微笑しながら、不斷の製作に疲れた彼へ、きつとかう聲をかけるのだつた。「お前はまだ子供の時に、おれの仕事を手傳つてくれた。今度はおれに手傳はせてくれ。……」

廉一は、今でも貧しい中に、毎日油畫を描き續けてゐる。三男の噂は誰も聞かない。

トロッコ

小田原熱海間に、輕便鐵道敷設の工事が始まつたのは、良平の八つの年だつた。良平は毎日村外れへ、その工事を見物に行つた。工事を——といった所が、唯トロッコで土を運搬する——それが面白さに見に行つたのである。

トロッコの上には土工が二人、土を積んで後に佇んでゐる。トロッコは山を下りるのだから、人手を借りずに走つて来る。煽るやうに車臺が動いたり、土工の袷の裾がひらついたり、細い線路がしなつたり——良平はそんなけしきを眺めながら、土工になりたいと思ふ事がある。せめては一度でも土工と一しよに、トロッコへ乗りたいと思ふ事もある。トロッコは村外れの平地へ來ると、自然と其處に止まつてしまふ。と同時に土工たちは、身輕にトロッコを飛び降りるが早い、その線路の終點へ車の土をぶちまける。それから今度はトロッコを押し押し、もと來た山の方へ登り始める。良平はその時乗れないまでも、押す事さへ出來たらと思ふのである。

或夕方、——それは二月の初旬だつた。良平は二つ下の弟や、弟と同じ年の隣の子供と、トロッコの

置いてある村外れへ行つた。トロッコは泥だらけになつた儘、薄明るの中に竝んでゐる。が、その外は何處を見ても、土工たちの姿は見えなかつた。三人の子供は恐る恐る、一番端にあるトロッコを押しした。トロッコは三人の力が揃ふと、突然ごろりと車輪をまはした。良平はこの音にひやりとした。しかし二度目の車輪の音は、もう彼を驚かさなかつた。ごろり、ごろり——トロッコはさう云ふ音と共に、三人の手に押されながら、そろそろ線路を登つて行つた。

その内に彼は十間程來ると、線路の勾配が急になり出した。トロッコも三人の力では、いくら押しても動かなくなつた。どうかすれば車と一しよに、押し戻されさうにもなる事がある。良平はもう好いと思つたら、年下の二人に合圖をした。

「さあ、乗らう？」

彼等は一度に手をはなすと、トロッコの上へ飛び乗つた。トロッコは最初徐ろに、それから見る見る勢よく、一息に線路を下り出した。その途端につき當りの風景は、忽ち兩側へ分かれるやうに、ずんずん目の前へ展開して來る。——良平は顔に吹きつける日の暮れの風を感じながら殆ど、有頂天になつた。しかしトロッコは二三分の後、もうもとの終點に止まつてゐた。

「さあ、もう一度押すぢやあ。」

良平は年下の二人と一しよに、又トロッコを押し上げにかかつた。が、まだ車輪も動かない内に、突然彼

等の後には、誰かの足音が聞え出した。のみならずそれは聞え出したと思ふと、急にかう怒鳴り聲に變つた。

「この野郎！ 誰に斷つてトロに觸つた？」

其處には古い印禪天に、季節外れの麥藁帽をかぶつた、背の高い土工が佇んでゐる。——さう云ふ姿が目にはひつた時、良平は年下の二人と一しよに、もう五六間逃げ出してゐた。——それぎり良平は使の歸りに、人氣のない工事場のトロッコを見ても、二度と乗つて見ようと思つた事はない。唯その時の土工の姿は、今でも良平の頭の何處かに、はつきりした記憶を残してゐる。薄明りの中に仄めいた。小さい黄色の麥藁帽、——しかしその記憶さへも、年毎に色彩は薄れるらしい。

その後十日餘りたつてから、良平は又たつた一人、午過ぎの工事場に佇みながら、トロッコの來るのを眺めてゐた。すると土を積んだトロッコの外に、枕木を積んだトロッコが一輛、これは本線になる筈の、太い線路を登つて來た。このトロッコを押してゐるのは、二人とも若い男だつた。良平は彼等を見た時から、何だか親しみ易いやうな氣がした。「この人たちならば叱られない。」——彼はさう思ひながら、トロッコの側へ駆けて行つた。

「おぢさん。押してやらうか？」

その中の一人、——縞のシャツを着てゐる男は、俯向きにトロッコを押した儘、思つた通り快い返事を

した。

「おお、押してくよう。」

良平は二人の間にはひると、力一杯押し始めた。

「われは中申力があるな。」

他の一人、——耳に巻煙草を挟んだ男も、かう良平を褒めてくれた。

その内に線路の勾配は、だんだん樂になり始めた。「もう押さなくとも好い。」——良平は今にも云はれるかと内氣がかりでならなかつた。が、若い二人の土工は、前よりも腰を起したぎり、黙々と車を押し續けてゐた。良平はたうとうこらへ切れずに、怯つ怯つこんな事を尋ねて見た。

「何時までも押してゐて好い？」

「好いとも。」

二人は同時に返事をした。良平は「優しい人たちだ」と思つた。

五六町餘り押し續けたら、線路はもう一度急勾配になつた。其處には兩側の蜜柑畑に、黄色い實がいくつも目を受けてゐる。

「登り路の方が好い、何時までも押させてくれるから。」——良平はそんな事を考へながら、全身でトロッコを押すやうにした。

蜜柑畑の間を登りつめると、急に線路は下りになった。縞のシャツを着てゐる男は、良平に「やい、乗れ」と云つた。良平は直に飛び乗つた。トロツコは三人が乗り移ると同時に、蜜柑畑の匂を煽りながら、ひたひたに線路を走り出した。「押すよりも乗る方がずつと好い。」——良平は羽織に風を孕ませながら當り前の事を考へた。「行きに押す所が多ければ、歸りに又乗る所が多い。」——さうも亦考へたりした。

竹藪のある所へ来ると、トロツコは靜かに走るのを止めた。三人は又前のやうに、重いトロツコを押し始めた。竹藪は何時か雑木林になつた。爪先上りの所所には、赤錆の線路も見えない程、落葉のたまつてゐる場所もあつた。その路をやつと登り切つたら、今度は高い崖の向うに、廣々と薄ら寒い海が開けた。と同時に良平の頭には、餘り遠く來過ぎた事が、急にはつきりと感じられた。

三人は又トロツコへ乗つた。車は海を右にしながら、雑木の枝の下を走つて行つた。しかし良平はさつきやうに、面白い氣もちにはなれなかつた。「もう歸つてくれれば好い。」——彼はさうも念じて見た。が、行く所まで行きつかなければ、トロツコも彼等も歸れない事は、勿論彼にもわかり切つてゐた。

その次に車の止まつたのは、切崩した山を背負つてゐる、葦屋根の茶店の前だつた、二人の土工はその店へはひると、乳呑兒をおぶつた上さんを相手に、悠悠と茶などを飲み始めた。良平は獨りいらしながら、トロツコのまはりをまはつて見た。トロツコには頑丈な車臺の板に、跳ねかへつた泥が乾いてゐた。少時の後茶店を出て來しなに、巻煙草を耳に挟んだ男は、(その時はもう挟んでゐなかつたが)トロツコの

側にある良平に新聞紙に包んだ駄菓子をくれた。良平は冷淡に「難有う」と云つた。が、直に冷淡にしては、相手にすまないと思ひ直した。彼はその冷淡さを取り繕ふやうに、包み菓子の一つを口へ入れた、菓子には新聞紙にあつたらしい、石油の匂がしみついてゐた。

三人はトロツコを押しながら緩い傾斜を登つて行つた。良平は車に手をかけてゐても、心は外の事を考へてゐた。

その坂を向うへ下り切ると、又同じやうな茶店があつた。土工たちがその中へはひつた後、良平はトロツコに腰をかけながら、歸る事ばかり氣にしてゐた。茶店の前には花のさいた梅に、西日の光が消えかかつてゐる。「もう日が暮れる。」——彼はさう考へると、ぼんやり腰かけてもゐられなかつた。トロツコの車輪を蹴つて見たり、一人では動かないのを承知しながらうんうんそれを押し見たり、——そんな事に氣もちを紛らせてゐた。

所が土工たちは出て來ると、車の上の枕木に手をかけながら、無造作に彼にかう云つた。「われはもう歸んな。おれたちは今日は向う泊りだから。」

「あんまり歸りが遅くなるとわれの家でも心配するぞら。」
良平は一瞬間呆氣にとられた。もう彼は暗くなる事、去年の暮母と岩村まで來たが、今日の途はその三四倍ある事、それを今からたつた一人、歩いて歸らなければならぬ事、——さう云ふ事が一時にわかつたの

である。良平は殆ど、泣きさうになつた。が、泣いても仕方がないと思つた。泣いてゐる場合ではないとも思つた。彼は若い二人の土工に、取つて附けたやうな御辭儀をすると、どンドン線路傳ひに走り出した。良平は少時無我夢中に線路の側を走り續けた。その内に懐の菓子包みが、邪魔になる事に気がついたから、それを路側へ抛り出す次に、板草履も其處へ脱ぎ捨ててしまつた。すると薄い足袋の裏へじかに小石が食ひこんだが、足だけは遙かに軽くなつた。彼は左に海を感じながら、急に坂路を駆け登つた。時時涙がこみ上げて來ると、自然に顔が歪んで來る。——それは無理に我慢しても、鼻だけは絶えずくうくう鳴つた。

竹藪の側を駆け抜けると、夕焼けのした日金山の空も、もう火照りが消えかかつてゐた。良平は愈々、気が氣でなかつた。往きと返りと變るせるか、景色の違ふのも不安だつた。すると今度は着物までも、汗の濡れ通つたのが氣になつたから、やはり必死に駆け續けたなり、羽織を路側へ脱いで捨てた。

蜜柑畑へ來る頃には、あたりは暗くなる一方だつた。「命さへ助かれば——良平はさう思ひながら、這つてもつまづいても走つて行つた。

やつと遠い夕闇の中に、村外れの工事が見えた時、良平は一思ひに泣きたくなつた。しかしその時もべそはかいたが、とうとう泣かずに駆け續けた。

彼の村へはひつて見ると、もう兩側の家家には、電燈の光がさし合つてゐた。良平はその電燈の光りに頭

から汗の湯氣の立つのが、彼自身にもはつきりわかつた。井戸端に水を汲んでゐる女衆や、畑から歸つて來る男衆は、良平が喘ぎ喘ぎ走るのを見ては、「おいどうしたね？」などと聲をかけた。が、彼は無言の儘、雜貨屋だの床屋だの、明るい家の前を走り過ぎた。

彼の家の門口へ駆けこんだ時、良平はとうとう大聲に、わつと泣き出さずにはゐられなかつた。その泣き聲は彼の周圍へ、一時に父や母を集まらせた。殊に母は何とか云ひながら、良平の體を抱へるやうにした。

が、良平は手足をもがきながら、駈り上げ駈り上げ泣き續けた。その聲が餘り激しかったせゐか、近所の女衆も三四人、薄暗い門口へ集つて來た。父母は勿論その人たちは、口口に彼の泣く訣を尋ねた。しかし彼は何と云はれても泣き立てるより外に仕方がなかつた。あの遠い路を駆け通して來た、今までの心細さをふり返ると、いくら大聲に泣き續けても、足りない氣もちに迫られながら、……

良平は二十六の年、妻子と一しよに東京へ出て來た。今では或雜誌社の二階に、校正の朱筆を握つてゐる。が、彼はどうかすると、全然何の理由もないのに、その時の彼を思ひ出す事がある。全然何の理由もないのに？——塵勞に疲れた彼の前には今でもやはりその時のやうに、薄暗い藪や坂のある路が、細細と一寸ち斷續してゐる。……

母

部屋へやの隅すみに据すゑた姿すがた見みには、西洋風せいやうふうに壁かべを塗ぬつた。しかも日本風にっぽんふうの疊たまがある——上海特有しやんがいとゆうの旅館りやうかんの二階にかいが、一部分ぶぶんはつきり映うつつてゐる。まづつきあたりあたりに空色そらいろの壁かべ、それから眞新まことしい何疊なんたまかの疊たま、最後さいごにこちらへ後あとを見みせた、西洋髪せいやうかみの女おんなが一人ひとり、——それが皆冷みなひややかな光ひかりの中に、切きない程ほどはつきり映うつつてゐる。女おんなは其處こゝにさつきから、縫物ぬいものか何かなにかしてゐるらしい。

尤なほ後あとを向むいたと云いふ條じょう、地味ぢみな銘仙めいせんの羽織はおりの肩かたには、崩くづれかかつた前髪まがみのはづれに、蒼白あざしろい横顔よこがほが少し見みえる、勿論もちろん肉にくの薄うすい耳みみに、ほんのり光ひかりが透すいたのも見みえる、やや長ながめな揉もみ上げの毛けが、かすかに耳みみの根ねをぼかしたのも見みえる。

この姿見すがたみのある部屋へやには、隣室りんしつの赤兒あかごの啼なき聲こゑの外ほかに、何なに一つ沈黙ちんもくを破やぶるものはない。未いまだに降ふり止やまない雨あめの音ねさへ、此處こゝでは一層いちじやうその沈黙ちんもくに、單調たんてうな氣きもちを添そへるだけである。
「あなた。」

さう云いふ何分なんぶんかが過すぎ去さつた後のち、女おんなは仕事しごとを續つづけながら、突然とつぜん、しかし覺東おぼつかなささうに、かう誰たれかへ聲こゑをかけた。

誰たれか、——部屋へやの中には女おんなの外ほかにも、丹前たんぜんを羽織はおりつた男おとこが一人ひとり、ずつと離はなれた疊たまの上に、英字新聞えいじしんぶんをひろげた儘まま、長長ながながと腹這はらぢひになつてゐる。が、その聲こゑが聞きえないのか、男おとこは手近てぢかの灰皿はいざらへ、巻煙草まきたばこの灰ほこを落おしたきり、新聞しんぶんから眼めさへ擧あげようとししない。

「あなた。」
女おんなはもう一度いちど聲こゑをかけた。その癖女おんな自身の眼めもぢつと針はりの上に止とまつてゐる。
「何なんだい。」

男おとこは幾分いくぶんうるささうに、丸丸まるまると肥こつた、口髭くちひげの短たんい、活動家かつどうからしい頭あたまを擡あげた。
「この部屋へやね、——この部屋へやは變かへちやいけなくつて？」
「部屋へやを變かへる？ だつて此處こゝへはやつと昨夜おととい、引ひつ越こして來きたばかりぢやないか？」
男おとこの顔かほはげんさうだつた。

「引ひつ越こして來きたばかりでも、——前まへの部屋へやならば明あいてゐるでせう？」
男おとこは彼是かれこれ二週にふしう間かんばかり、彼等かれらが窮屈きゆうくつな思おもひをして來きた、日當りひあたりの悪わるい三階さんかいの部屋へやが一瞬ひとしづ間かん眼めの前まへに見みえるやうな氣きがした。——塗ぬりの剝はげた窓側まどがはの壁かべには、色いろの變かつた疊たまの上に更紗さらの窓掛まどかけが垂たれ下さつてゐる。そ

の窓には何時水をやつたのか、花の乏しい天竺葵が、薄い埃をかぶつてゐる。おまけに窓の外を見ると、始終ごみごみした横町に、麥藁帽をかぶつた支那の車夫が、所在なさうにうろついてゐる。……

「だがお前はあの部屋にゐるのは、嫌だ嫌だと云つてゐたぢやないか？」

「ええ、それでも此處へ来て見たら、急に又この部屋が嫌になつたんですもの。」

女は針の手をやめると、もの憂さうに顔を擧げて見せた。眉の迫つた、眼の切れの長い、感じの鋭さうな顔だちである。が、眼のまはりの暈を見ても、何か苦勞を堪へてゐる事は多少想像が出来ないでもない。さう云へば病的な氣がする位、米噛みにも静脈が浮き出してゐる。

「ね、好いでせう。……いけなくて？」

「しかし前の部屋よりは、廣くもあるし居地もいいし、不足を云ふ理由はないんだから、——それとも何か嫌な事があるのかい？」

「何つて事はないんですけれど。……」

女はちよいとためらつたものの、それ以上立ち入つては答へなかつた。が、もう一度念を押すやうに、同じ言葉を繰り返した。

「いけなくて、どうしても？」

今度は男が新聞の上へ煙草の煙を吹きかけたぎり、好いとも悪いとも答へなかつた。

部屋の中は又ひつそりになつた。唯外では不相變、休みのない雨の音がしてゐる。

「春雨やか、——」

男は少時たつた後、ごろりと仰向きに寝轉ぶと、獨り言のやうにかう云つた。

「蕪湖住みをするやうになつたら、發句でも一つ始めるかな。」

女は何とも返事をせずに、縫物の手を動かしてゐる。

「蕪湖もそんなに悪い所ぢやないぜ。第一社宅は大きいし、庭も相當に廣いしするから、草花など作るには持つて來いだ。何でも元は雍家花園とか云つてね、——」

男は突然口を噤んだ。何時か森とした部屋の中には、かすかに人の泣くけはひがしてゐる。

「おい。」

泣き聲は急に聞えなくなつた。と思ふとすぐに又、途切れ途切れに續き出した。

「おい。敏子。」

半ば體を起した男は、疊に片肘寄せた儘、當惑らしい眼つきを見せた。

「お前は己と約束したぢやないか？ もう愚痴はこぼすまい。もう涙は見せない事にしよう。もう、——」

男はちよいと臉を擧げた。

「それとも何かあの事以外に、悲しい事でもあるのかい？ たとへば日本へ歸りたいとか、支那でも田舎へ

は行きたくないとか、——」

「いいえ。——いいえ。そんな事ぢやなくつてよ。」

敏子は涙を落し落し、意外な程烈しい打消し方をした。

「私はあなたのいらつしやる所なら、何處へでも行く氣でゐるんです。ですけれども、——」

敏子は伏目になつたなり、溢れて来る涙を抑へようとするのか、ぢつと薄い下唇を噛んだ。見れば蒼白

い頬の底にも、眼に見えない炎のやうな、切迫した何物かが燃え立つてゐる。震へる肩、濡れた睫毛、——

男はそれらを見守りながら、現在の氣もちとは没交渉に、一瞬間妻の美しさを感じた。

「ですけれども、——この部屋は嫌なんですよ。」

「だからさ、だからさつきもさう云つたぢやないか？ 何故この部屋がそんなに嫌だか、それさへはつきり

云つてくれれば、——」

男は此處まで云ひかけると、敏子の眼がちつと彼の顔へ、注がれてゐるのに氣がついた。その眼には涙の

漂つた底に、殆ど、敵意にも紛ひ兼ねない、悲しさうな光が閃いてゐる。何故この部屋が嫌になつたか？

——それは獨り男自身の疑問だつたばかりではない。同時に又敏子が無言の内に、男へ突きつけた反問であ

る。男は敏子と眼を合はせながら、二の句を次ぐのに躊躇した。

しかし言葉が途切れたのは、ほんの數秒の間である。男の顔には見る見る内に、了解の色が漲つて來た。

「あれか？」

男は感動を蔽ふやうに、妙に素つ氣のない聲を出した。

「あれは己も氣になつてゐたんだ。」

敏子は男に云はれると、ぼろぼろ膝の上へ涙を落した。

窓の外には何時の間にか、日の暮が雨を煙らせてゐる。その雨の音を撥ねのけるやうに、空色の壁の向う

では、今も亦赤兒が泣き續けてゐる。

二

二階の出窓には鮮かに朝日の光が當つてゐる。その向うには三階建の、赤煉瓦にかすかな苔の生えた、逆

光線の家が聳えてゐる。薄暗いこちらの廊下にあると、出窓はこの家を背景にした、大きい一枚の畫のやう

に見える。巖乗な柵の窓枠が、丁度額縁を嵌めたやうに見える。その畫のまん中には一人の女が、こちらへ

横顔を向けながら、小さな靴足袋を編んでゐる。

女は敏子よりも若いらしい。雨に洗はれた朝日の光は、その肉附きの豊かな肩へ、——派手な大島の羽織

の肩へ、はつきり大幅に流れてゐる。それがやや俯向きになつた。血色の好い頬に反射してゐる。心もち厚

い肩の上の、かすかな生ぶ毛にも反射してゐる。

午前十時と十一時との間、——旅館では今が一日中でも一番静かな時刻である。商賣に來たのも、見物に來たのも、泊り客は大抵外出してしまふ。下宿してゐる勤め人たちも勿論午後までは歸つて來ない。その跡には唯長い廊下に、時上草履を響かせる、女中の足音だけが残つてゐる。

この時もそれが遠くから、だんだんこちらへ近づいて來ると、出窓に面した廊下には、四十格好の女中が一人、紅茶の道具を運びながら、影畫のやうに通りかかった。女中は何とも云はれなかつたら、女のゐる事も氣がつかずに、その儘通りすぎてしまつたかも知れない。が、女は女中の姿を見ると、心安さうに隣をかけた。

「お清さん。」

女中はちよいと會釋してから、出窓の方へ歩み寄つた。

「まあ、御精が出ますこと。——坊ちゃんはどうなさいました？」

「うちの若様？ 若様は今お休み中。」

女は編針を休めた儘、子供のやうに微笑した。

「時にね、お清さん。」

「何でございます？ 眞面目さうに。」

女中も出窓の日の光に、前掛だけくつきり照らさせながら、淺黒い眼もとに微笑を見せた。

「御隣の野村さん、——野村さんでせう、あの奥さんは？」

「ええ、野村敏子さん。」

「敏子さん？ ぢや私と同じ名だわね、あの方はもう御立ちになつたの？」

「いいえ、まだ五六日は御滞在でございます。それから何でも蕪湖とかへ、——」

「だつてさつき前を通つたら、御隣にはどなたもいらつしやらなかつたわよ。」

「ええ、昨晩急に又、三階へ御部屋が變りましたから、——」

「さう。」

女は何か考へるやうに、丸丸した顔を傾けて見せた。

「あの方でせう？ 此處へ御出でになると、その日に御子さんをなくなしたのは？」

「ええ、御氣の毒でございますわね。すぐに病院へも御入れになつたんですけれど。」

「ぢや病院で御なくなりなすつたの？ 道理で何にも知らなかつた。」

女は前髪を割つた額に、かすかな憂鬱な色を浮べた。が、すぐに又元の通り、快活な微笑を取り戻すと悪戯さうな眼つきになつた。

「もうそれで御用済み、どうかあちらへいらしつて下さい。」

「まあ、随分でございますね。」

女中は思はず笑ひ出した。

「そんな邪慳な事を仰有ると、葛の家から電話がかかつて来て、内證で旦那様へ取次ぎますよ。」

「好いわよ。早くいらつしやいつてば、紅茶がさめてしまふぢやないの？」

女中が出窓にゐなくなると、女は又編物を取り上げながら、小聲に歌をうたひ出した。

午前十時と十一時との間、——旅館では今が一日中でも、一番静かな時刻である。部屋毎に花瓶に素枯れた花は、この間に女中が取り捨ててしまふ。二階三階の眞鍮の手すりも、この間に下男が磨くらしい。さう云ふ沈黙が擴がつた中に、唯往來のざわめきだけが、硝子戸を開け放した諸方の窓から、日の光と一しよにはひつて来る。

その内にふと女の膝から、毛糸の球が轉げ落ちた。球はとんと弾むが早い、一筋の赤を引きずりながら、ころころ廊下へ出ようとする、——と思ふと誰か一人、丁度其處へ來かかつたのが、靜かにそれを拾ひ上げた。

「どうも難有うございました。」

女は藤椅子を離れながら、恥しさうに會釋をした。見れば球を拾つたのは、今し方女中と噂をした、瘦せぎすな隣室の夫人である。

「いいえ。」

毛糸の球は細い指から、脂よりも白い指へ移つた。

「此處は暖かでございますね。」

敏子は出窓へ歩み出ると、眩しさうにやや眼を細めた。

「ええ、かうやつて居りましても、居睡りが出る位でございますわ。」

二人の母は佇んだ儘、幸福さうに微笑し合つた。

「まあ、御可愛いたあですこと。」

敏子の聲はさりげなかつた。が、女はその言葉に、思はずそつと目を外らせた。

「二年ぶりに編針を持つて見ましたの。——あんまり暇なもんですから。」

「私などはいくら暇でも、怠けてばかり居りますわ。」

女は藤椅子へ編物を捨てると、仕方がなささうに微笑した。敏子の言葉は無心の内に、もう一度女を打つたのである。

「お宅の坊ちゃん、——坊ちゃんでございますましたわね？ 何時御生れになりましたの？」

敏子は髪へ手をやりながら、ちらりと女の顔を眺めた。昨日は泣き聲を聞いてゐるのも堪へられない氣がした隣室の赤兒、——それが今では何物よりも、敏子の興味を動かすのである。しかもその興味を満足させれば、反つて苦しみを新たにするのも、はつきりわかつてゐるのである。これは小さな動物が、コブラの前

では動けないやうに、敏子の心も何時の間にか、苦しみそのものの催眠作用に捉はれてしまつた結果であらうか？ それとも又手傷を負つた兵士が、わざわざ傷口を開いてまでも、一時の快を貪るやうに、いやが上にも苦しまねばならない、病的な心理の一例であらうか？

「この御正月でございました。」

女はかう答へてから、ちよいとためらふ氣色を見せた。しかしすぐ眼を擧げると、氣の毒さうにつけ加へた。

「御宅ではとんだ事でございましたつてねえ。」

敏子は沾んだ眼の中に、無理な微笑を漂はせた。

「ええ、肺炎になりましたものですから、——ほんたうに夢のやうでございました。」

「それも御出て匆匆にねえ。何と申し上げて好いかわかりませんわ。」

女の眼には何時の間にか、かすかに涙が光つてゐる。

「私などはそんな目にあつたら、まあ、どうするでございませう？」

「一時は随分悲しうございましたけれども、——もうあきらめてしまひましたわ。」

二人の母は佇んだ儘、寂しさうに朝日の光を眺めた。

「こちらは悪い風が流行りますの。」

女は考へ深さうに、途切れてゐた話を續け出した。

「内地はよろしうございますわね。氣候もこちら程不順ではなし、——」

「参りたてでよくわかりませんが、大へん雨の多い所でございますね。」

「今年は餘計——あら、泣いて居りますわ。」

女は耳を傾けた儘、別人のやうな微笑を浮べた。

「ちよいと御免下さいまし。」

しかしその言葉が終らない内に、もう其處へはさつきの女中が、ばたばたと上草履を鳴らせながら、泣き立てる赤兒を抱きそやして來た。赤兒を、——美しいメリンスの着物の中に、しかめた顔ばかり出した赤兒を、

敏子が内心見まいとしてゐた、丈夫さうに頤の括れた赤兒を！

「私が窓を拭きに参りますとね、すぐにもう眼を御覺ましたすつて。」

「どうも憚り様。」

女はまだ慣れなさうに、そつと赤兒を胸に取つた。

「まあ、御可愛い。」

敏子は顔を寄せながら、鋭い乳の臭ひを感じた。

「おお、おお、よく肥つていらつしやる。」

やや上氣した女の顔には、絶え間ない微笑が満ち渡つた。女は敏子の心もちに、同情が出来ない訣ではない。しかし、——しかしその乳房の下から、——張り切つた母の乳房の下から、汪然と湧いて来る得意の情は、どうする事も出来なかつた。

三

雍家花園の槐や柳は、午過ぎの微風に戦ぎながら、庭の草や土の上へ、日の光と影とをふり撒いてゐる。いや、草や土ばかりではない。その槐の張り渡した、この庭には似合はない、水色のハムモックにもふり撒いてゐる。ハムモックの中に仰向けになつた、夏のズボンに胴衣しかつけない、小肥りの男にもふり撒いてゐる。

男は葉巻に火をつけた儘、槐の枝に吊り下げた、支那風の鳥籠を眺めてゐる。鳥は文鳥か何からしい。これも明暗の斑點の中に、止り木をあちこち傳はつては、時々さ不思議さうに籠の下を男を眺めてゐる。男はその度にはほほ笑みながら、葉巻を口へ運ぶ事もある。或は又人と話すやうに、「こら」とか「どうした？」とか云ふ事もある。

あたりは庭木の戦ぎの中に、かすかな草の香を蒸らせてゐる。一度ずつと遠い空に汽船の笛の響いたぎり、今はもう人音もしない、あの汽船もとうに去つたであらう。赤濁りに濁つた長江の水に、眩い水脈を引いた見ると、西か東かへ去つたであらう。その水の見える波止場には、裸も同様な乞食が一人、西瓜の皮を嚙つてゐる。其處には又仔豚の群も、長長と横たはつた親豚の腹に、乳房を争つてゐるかも知れない、——小鳥を見るのにも飽きた男は、そんな空想に浸つたなり、何時かうとうと眠りさうになつた。

「あなた。」

男は大きな眼を明いた。ハムモックの側に立つてゐるのは、上海の旅館にゐた時より、やや血色の好い敏子である。髪にも、夏帯にも、中形の湯帷子にも、やはり明暗の斑點を浴びた、白粉をつけない敏子である。男は妻の顔を見た儘、無遠慮に大きい欠伸をした。それからさも大儀さうに、ハムモックの上へ體を起した。

「郵便よ、あなた。」

敏子は眼だけ笑ひながら、何本か手紙を男へ渡した。と、同時に湯帷子の胸から、桃色の封筒にはひつてゐる、小さな手紙を抜いて見せた。

「今日は私にも來てゐるのよ。」

男はハムモックに腰かけたなり、もう短い葉巻を噛み噛み、無造作に手紙を読み始めた。敏子も其處へ佇んだ儘、封筒と同じ桃色の紙へ、ぢつと眼を落してゐる。

雍家花園の槐や柳は、午過ぎの微風に戦ぎながら、この平和な二人の上へ、日の光と影とをふり撒いてゐる。

る。文鳥は殆ど嘔らない。何か唸る蟲が一匹、男の肩へ舞ひ下りたが、直にそれも飛び去つてしまつた。……かう云ふ少時の沈黙の後、敏子は伏せた眼も擧げずに、突然かすかな叫び聲を出した。

「あら、お隣の赤さんも死んだんですつて。」

「お隣？」

男はちよいと聞き耳を立てた。

「お隣とは何處だい？」

「お隣よ。ほら、あの上海の××館の、——」

「ああ、あの子供か？ そりや氣の毒だな。」

「あんなに丈夫さうな赤さんがねえ。……」

「何だい、病氣は？」

「やつぱり風邪ですつて、始は寢冷え位の事と思ひ居り候ところ、——ですつて。」

敏子はやや興奮したやうに、口早に手紙を読み續けた。

「病院へ入れ候時には、もはや手遅れと相成り、——ね、よく似てゐるでせう？ 注射を致すやら、酸素

吸入を致すやら、いろいろ手を盡し候へども、——それから何と讀むのかしら？ 泣き聲だわ。泣き聲も次第に細るばかり、その夜の十一時五分程前には、遂に息を引き取り候。その時の私の悲しき、重重御察し

下され度、……」

「氣の毒だな。」

男はもう一度ハムモックに、ゆらりと仰向けになりながら、同じ言葉繰返した。男の頭の何處かには、未だ瀕死の赤兒が一人、小さい喘ぎを續けてゐる。と思ふとその喘ぎは、何時か又泣き聲に變つてしまふ。雨の音の間を縫つた、健康な赤兒の泣き聲に。——男はさう云ふ幻の中にも、妻の讀む手紙に聴き入つてゐた。

「重重御察し下され度、それにつけても何時ぞや御許様に御眼にかかりし事など思ひ出され、あの頃はさぞかし御許様にも、——ああ、いや、いや、ほんたうに世の中はいやになつてしまふ。」

敏子は憂鬱な眼を擧げると、神経的に濃い眉をひそめた。が、一瞬の無言の後、鳥籠の文鳥を見るが早いか、嬉しさうに華奢な兩手を拍つた。

「ああ、好い事を思ひついた！ あの文鳥を放してやれば好いわ。」

「放してやる？ あのお前の大事な鳥をか？」

「ええ、ええ、大事の鳥でもかまはなくてよ。お隣の赤さんのお追善ですもの。ほら、放鳥つて云ふでせう。あの放鳥をして上げるんだわ。文鳥だつてきつと喜んでよ。——私には手がとどかないかしら？ とどかなかつたら、あなた取つて頂戴。」

槐の根もとに走り寄つた敏子は、空氣草履を爪立てながら、出来るだけ腕を伸ばして見た。しかし籠を吊した枝には、容易に指さへとどかうとしない。文鳥は氣でも違つたやうに、小さい翼をばたばたやる。その拍子に又餌壺の黍も、鳥籠の外に散亂する。が、男は面白さうに、唯敏子を眺めてゐた。反らせた喉、瞭らんだ胸、爪先に重みを支へた足、——さう云ふ妻の姿を眺めてゐた。

「取れないかしら？——取れないわ。」

敏子は足を爪立てた儘、くるりと夫の方へ向いた。

「取つて頂戴よ。よう。」

「取れるものか？ 踏み臺でもすれば格別だが、——何も又放すにしても、今直には限らないぢやないか？」

「だつて今直に放したいんですもの、よう。取つて頂戴よう。取つて下さらなければいぢめるわよ。よくつて？ ハムモックを解いてしまふわよ。——」

敏子は男を睨むやうにした。が、眼にも肩にも、漲つてゐるものは微笑である。しかも殆ど平靜を失した、烈しい幸福の微笑である。男はこの時妻の微笑に、何か酷薄なものさへ感じた。日の光に煙つた草木の奥に、何時も人間を見守つてゐる、氣味の悪い力に似たものさへ。

「莫迦な事をするなよ。——」

男は葉巻を投げ捨てながら、冗談のやうに妻を叱つた。

「第一あの何とか云つた、隣の奥さんにもすまないぢやないか？ あつちぢや子供が死んだと云ふのに、こつちぢや笑つたり騒いだり、……」

すると敏子はどうしたのか、突然蒼白い顔になつた。その上拗ねた子供のやうに、睫毛の長い眼を伏せる。と、別に何と云ふ事もなしに、桃色の手紙を破り出した。男はちよいと苦い顔をした。が、氣まづさを押しける爲か、急に又快活に話し續けた。

「だがまあ、かうしてゐられるのは、兎に角仕合せには違ひないね。上海にゐた時には弱つたからな。病院にゐれば氣ばかりあせるし、ゐなければ又心配するし、——」

男はふと口を噤んだ。敏子は足もとに眼をやつたなり、影になつた頬の上に、何時か涙を光らせてゐる。しかし男は當惑さうに、短い口髭を引張つたきり、何ともその事は云はなかつた。

「あなた。」

息苦しい沈黙の續いた後、かう云ふ聲が聞えた時も、敏子はまだ夫の前に、色の悪い顔を背けてゐた。

「何だい？」

「私は、——私は悪いんでせうか？ あの赤さんのなくなつたのが、——」

敏子は急に夫の顔へ、妙に熱のある眼を注いだ。

「なくなつたのが嬉しいんです。御氣の毒だとは思ふんですけれども、——それでも私は嬉しんです。嬉し

くつては悪いんでせうか？ 悪いんでせうか？ あなた。」
 敏子の聲には今までにない、荒荒しい力がこもつてゐる。男はワイシャツの肩や胸衣に今は一ぱいにさし始めた、眩い日の光を鍍金しながら、何ともその間に答へなかつた。何か人力に及ばないものが、嚴然と前へでも塞がつたやうに。

將軍

一白禪隊

明治三十七年十一月二十六日の未明だつた。第×師團第×聯隊の白禪隊は、松樹山の補備砲臺を奪取する爲に、九十三高地の北麓を出發した。

路は山陰に沿うてゐたから、隊形も今日は特別に、四列側面の行進だつた。その草もない薄闇の路に、銃身を並べた一隊の兵が、白禪ばかり灰かせながら、靜かに靴を鳴らして行くのは、悲壯な光景に違ひなかつた。現に指揮官のM大尉などは、この隊の先頭に立つた時から、別人のやうに口數の少ない、沈んだ顔色をしてゐるのだつた。が、兵は皆思ひの外、平生の元氣を失はなかつた。それは一つに日本魂の力、二つには酒の力だつた。

少時行進を續けた後、隊は石の多い山陰から、風當りの強い河原へ出た。

「おい、後を見ろ。」
 紙屋だつたと云ふ田口一等卒は、同じ中隊から選拔された、これは大工だつたと云ふ、堀尾一等卒に話し

かけた。

「みんなこつちへ敬禮してゐるぜ。」

堀尾一等卒は振り返つた。成程さう云はれて見ると、黒黒と盛り上つた高地の上には、聯隊長始め何人かの將校たちが、やや赤らんだ空を後に、この死地に向ふ一隊の士卒へ、最後の敬禮を送つてゐた。

「どうだい？ 大したものぢやないか？ 白襪隊になるのも名譽だな。」

「何が名譽だ？」

堀尾一等卒は苦苦しさうに、肩の上の銃を揺り上げた。

「こちとらはみんな死に行くのだけ。して見ればあれは××××××××××××××××××さうつて云ふのだ。こんな安上りな事はなからうぢやねえか？」

「それはいけない。そんな事を云つては××××××すまない。」

「べらぼうめ！ すむすまねえもあるものか！ 酒保の酒を一合買ふのでも、敬禮だけでは賣りはしめえ。」

田口一等卒は口を噤んだ。それは酒氣さへ帯びてゐれば、皮肉な事ばかり並べたがる、相手の癖に慣れてゐるからだつた。しかし堀尾一等卒は、執拗にまだ話し續けた。

「それは敬禮で買ふとは云はねえ。やれ××××××とか、やれ××××××だとか、いろんな勿體をつけやが

るだらう。だがそんな事は諛つ八だ。なあ、兄弟。さうぢやねえか？」

堀尾一等卒にかう云はれたのは、これも同じ中隊にゐた、小學校の教師だつたと云ふ、おとなしい江木上等兵だつた。が、そのおとなしい上等兵が、この時だけはどう云ふ訣か、急に噛みつきさうな權幕を見せた。さうして酒臭い相手の顔へ、悪辣な返答を抛りつけた。

「莫迦野郎！ おれたちは死ぬのが役目ぢやないか？」

その時もう白襪隊は、河原の向うへ上つてゐた。其處には泥を塗り固めた、支那人の民家が七八軒、ひっそりと曉を迎へてゐる、——その家家の屋根の上には、石油色に髪をなぞつた、寒い茶褐色の松樹山が、目の前に迫つて見えるのだつた。

隊はこの村を離れると、四列側面の隊形を解いた。のみならずいづれも武装した儘、幾條かの交通路に腹這ひながら、じりじり敵前へ向ふ事になつた。

勿論江木上等兵も、その中に四つ這ひを續けて行つた。「酒保の酒を一合買ふのでも、敬禮だけでは賣りはしめえ。」——さう云ふ堀尾一等卒の言葉は、同時に又彼の腹の底だつた。しかし口數の少ない彼は、ぢつとその考へを持ちこたへてゐた。それだけに、一層戦友の言葉は、丁度傷痕にでも觸れられたやうな、腹立たしい悲しみを與へたのだつた。彼は凍えついた交通路を、獸のやうに這ひ續けながら、戦争と云ふ事を考へたり、死と云ふ事を考へたりした。が、さう云ふ考へからは、寸毫の光明も得られなかつた。死は××××

田口一等卒は將軍の眼が、彼の顔へちつと注がれるのを感じた。その眼は殆ど、處女のやうに、彼をはにかませるのに足るものだった。

「はい、歩兵第×聯隊であります。」

「さうか、大元氣にやつてくれ。」

將軍は彼の手を握つた。それから堀尾一等卒へ、じろりとその眼を轉ずると、やはり右手をさし伸べながら、もう一度同じ事を繰返した。

「お前も大元氣にやつてくれ。」

かう云はれた堀尾一等卒は、全身の筋肉が硬化したやうに、直立不動の姿勢になつた。幅の廣い肩、大きな手、頬骨の高い赭ら顔。――さう云ふ彼の特色は、少くともこの老將軍には、帝國軍人の模範らしい、好印象を與へた容子だった。將軍は其處に立ち止まつた儘、熱心になほ話し續けた。

「今打つてゐる砲臺があるな。今夜お前たちはあの砲臺を、こつちの物にしてしまふのぢや。さうすると豫備隊は、お前たちの行つた跡から、あの界隈の砲臺をみんな手に入れてしまふのぢや。何でも一遍にあの砲臺へ、飛びつく心にならなければいかん。――」

さう云ふ内に將軍の聲には、何時か多少戲曲的な、感激の調子かはひつて來た。

「好いか？ 決して途中に立ち止まつて、射撃などをするぢやないぞ。五尺の體を砲弾だと思つて、いきな

りあれへ飛びこむのぢや、頼んだぞ。どうか、しつかりやつてくれ。」

將軍は「しつかり」の意味を傳へるやうに、堀尾一等卒の手を握つた。さうして其處を通り過ぎた。

「嬉しくもねえな。――」

堀尾一等卒は狡猾さうに、將軍の跡を見送りながら、田口一等卒へ目交せをした。

「え、おい。あんな爺さんに手を握られたのぢや。」

田口一等卒は苦笑した。それを見るときどう云ふ譯か、堀尾一等卒の心の中には、何かに濟まない氣が起つた。と同時に相手の苦笑が、面憎いやうな心もちにもなつた。其處へ江木上等兵が、突然横合ひから聲をかけた。

「どうだい、握手で××××のは？」

「いけねえ。いけねえ。人眞似をしちや。」

今度は堀尾一等卒が、苦笑せずにはゐられなかつた。

「××れると思ふから腹が立つのだ。おれは捨ててやると思つてゐる。」

江木上等兵がかう云ふと、田口一等卒も口を出した。

「さうだ。みんな御國の爲に捨てる命だ。」

「おれは何の爲だか知らないが、唯捨ててやるつもりなのだ。××××××××でも向けられて見ろ。何でも

旅團參謀は鼻聲に、この支那人を捉へて来た、戸口にゐる歩哨を喚びかけた、歩兵、——それは白襪隊に加はつてゐた、田口一等卒に外ならなかつた。

——彼は戸の卍字格子を後に、藝者の寫眞へ目をやつてゐたが、參謀の聲に驚かされると、思ひ切り大きい答をした

「はい。」

「お前だな、こいつらを掴まへたのは？ 掴まへた時はどんだつたか？」
人の好い田口一等卒は、朗讀的にしゃべり出した。

「私が歩哨に立つてゐたのは、この村の土塀の北端、奉天に通ずる街道であります。その支那人は二人とも、奉天の方向から歩いて来ました。すると木の上の中隊長が、——」

「何、木の上の中隊長？」

參謀はちよいと目蓋を擧げた。

「はい。中隊長は展望の爲、木の上に登つてゐられたのであります。——その中隊長が木の上から、掴まへると私に命令されました。」

「所が私が捉へようとする、そちらの男が、——はい。その髯のない男であります。その男が急に逃げようとなりました。……」

「それだけか？」

「はい。それだけです。」

「よし。」

旅團參謀は血肥りの顔に、多少の失望を浮べた儘、通譯に質問の意を傳へた。通譯は退屈を露はさない爲、わざと聲に力を入れた。

「間諜でなければ何故逃げたか？」

「それは逃げるのが當然です。何しろいきなり日本兵が、躍りかかつてきたのですから。」
もう一人の支那人、——鴉片の中毒に罹つてゐるらしい、鉛色の皮膚をした男は、少しも怯まずに返答した。

「しかしお前たちが通つて来たのは、今にも戰場になる街道ぢやないか？ 良民ならば用もないのに、——」
支那語の出来る副官は、血色の悪い支那人の顔へ、ちらりと意地の悪い眼を送つた。

「いや、用はあるのです。今も申し上げた通り、私たちは新民屯へ、紙幣を取り換へに出かけて来たのです。御覽下さい。此處に紙幣もあります。」

髯のある男は平然と、將校たちの顔を眺め廻した。參謀はちよいと鼻を鳴らした。彼は副官のたじろいたのが、内心好い氣味に思はれたのだ。……

「紙幣を取り換へる？ 命がけでか？」

副官は負惜みの冷笑を洩らした。

「兎に角裸に見よう。」

参謀の言葉が通譯されると、彼等はやはり悪びれずに、早速赤裸になつて見せた。

「まだ腹巻をしてゐるぢやないか？ それをこつちへとつて見せろ。」

通譯が腹巻を受けとる時、その白木綿の體温のあるのが、何だか不潔に感じられた。腹巻の中には三寸ばかりの、太い針がはひつてゐた。旅團参謀は窓明りに、何度もその針を調べて見た。が、それも平たい頭に

梅花の模様がついてゐる外、何も變つた所はなかつた。

「何か、これは？」

「私は鍼醫です。」

髻のある男はためらはずに、悠然と参謀の間に答へた。

「次手に靴も脱いで見ろ。」

彼等は殆ど無表情に、隠すべき所も隠さうとせず、検査の結果を眺めてゐた。が、ズボンや上着は勿論、靴や靴下を調べて見ても、證據になる品は見當らなかつた。この上は靴を壊して見るより外はない。——さう思つた副官は、参謀にその旨を話さうとした。

その時突然次の部屋から、軍司令官を先頭に、軍司令部の幕僚や、旅團長などがはひつて來た。將軍は副官や軍参謀と、丁度何かの打ち合せの爲、旅團長を尋ねて來てゐたのだつた。

「露探か。」

將軍はかう尋ねた儘、支那人の前に足を止めた。さうして彼等の裸姿へ、ちつと鋭い眼を注いだ。後に或

アメリカ人が、この有名な將軍の眼には、Monomania じみた所があると、無遠慮な批評を下した事がある。

——そのモノメニアツクな眼の色が、殊にかう云ふ場合には、氣味の悪い輝きを加へるのだつた。

旅團参謀は將軍に、ざつと事件の顛末を話した。が、將軍は思ひ出したやうに、時時頷いて見せるばかり

だつた。

「この上はもうぶん擲つてでも、白状させる外はないのですが、——」

参謀がかう云ひかけた時、將軍は地圖を持つた手に、床の上にある支那靴を指した。

「あの靴を壊して見給へ。」

靴は見る見る底をまくられた。すると其處に縫ひこまれた、四五枚の地圖と祕密書類が、忽ちばらばらと

床の上に落ちた。二人の支那人はそれを見ると、さすがに顔の色を失つてしまつた。が、やはり押し黙つた

儘、強情に敷衍を見つめてゐた。

「そんな事だらうと思つてゐた。」

將軍は旅團長を顧みながら、得意さうに微笑を洩した。
「しかし靴とは又考へたものですね。——おい、もうその連中には着物を着せてやれ。——こんな間諜は始
めてです。」

「軍司令官閣下の炯眼には驚きました。」

旅團副官は旅團長へ、間諜の證據品を渡しながら、愛嬌の好い笑顔を見せた。——恰も靴に目をつけたの
は、將軍よりも彼自身が、先だつた事も忘れたやうに。

「だが裸にしてもないとすれば、靴より外に隠せないぢやないか？」
將軍はまだ上機嫌だつた。

「わしはすぐに靴と睨んだ。」

「どうもこの邊の住民はいけません。我々が此處へ来た時も、日の丸の旗を出したですが、その癖家の中を
檢べて見れば、大抵露西亞の旗を持つてゐるのです。」

旅團長も何か浮き浮きしてゐた。

「つまり、奸佞邪智なのぢやね。」

「さうです。煮ても焼いても食へないのです。」

こんな會話が續いてゐる内、旅團參謀はまだ通譯と、二人の支那人を檢べてゐた。それが急に田口一等卒

へ機嫌の悪い顔を向けると、吐き出すやうにかう命じた。

「おい歩兵！ この間諜はお前が掴まへて来たのだから、次手にお前が殺して來い。」

二十分の後、村の南端の路ばたには、この二人の支那人が、互に辮髪を結ばれた儘、枯柳の根がたに坐つ
てゐた。

田口一等卒は銃劍をつけると、まづ辮髪を解き放した。それから銃を構へた儘、年下の男の後に立つた。

が、彼等を突殺す前に、殺すと云ふ事だけは告げたいと思つた。

「儂、——」

彼はさう云つて見たが、「殺す」と云ふ支那語を知らなかつた。

「儂、殺すぞ！」

二人の支那人は云ひ合せたやうに、じろりと彼を振り返つた。しかし驚いただけはひも見せず、それぎり別
別の方角へ、何度も叩頭を續けた。「故郷へ別れを告げてゐるのだ。——田口一等卒は身構へながら、その
叩頭を解釋した。

叩頭が一通り済んでしまふと、彼等は覺悟をきめたやうに、冷然と首をさし伸した。田口一等卒は銃をか
ざした。が、神妙な彼等を見ると、どうしても銃劍が突き刺せなかつた。

「儂、殺すぞ！」

彼はやむを得ず繰り返した。するとそこへ村の方から、馬に跨つた騎兵が一人、蹄に砂埃を巻き揚げて来た。

「歩兵！」

騎兵は——近づいたのを見れば曹長だった。それが二人の支那人を見ると、馬の歩みを緩めながら、傲然と彼に聲をかけた。

「露探か？ 露探だらう。おれにも、一人斬らせてくれ。」

田口一等卒は苦笑した。

「何、二人とも上げます。」

「さうか？ それは氣前が好いな。」

騎兵は身輕に馬を下りた。さうして支那人の後にまはると、腰の日本刀を抜き放した。その時又村の方から、勇しい馬蹄の響と共に、三人の將校が近づいて来た。騎兵はそれに頓着せず、まつ向に刀を振り上げた。が、まだその刀を下さない内に、三人の將校は悠悠と、彼等の側へ通りかかった。軍司令官！ 騎兵は田口一等卒と一しよに、馬上の將軍を見上げながら、正しい擧手の禮をした。

「露探だな。」

將軍の眼には一瞬間、モノメニアの光が輝いた。

「斬れ！ 斬れ！」

騎兵は言下に刀をかざすと、一打に若い支那人を斬つた。支那人の頭は躍るやうに、枯柳の根もとに轉げ落ちた。血は見る見る黄ばんだ土に、大きい斑點を擴げ出した。

「よし。見事だ。」

將軍は愉快さうに領きながら、それなり馬を歩ませて行つた。

騎兵は將軍を見送ると、血に染んだ刀を提げた儘、もう一人の支那人の後に立つた。その態度は將軍以上に、殺戮を喜ぶ氣色があつた。「この×××らばおれにも殺せる。」——田口一等卒はさう思ひながら、枯柳の根もとに腰を下した、騎兵は又刀を振り上げた。が、髯のある支那人は、默然と首を伸ばしたぎり、睫毛一つ動かさなかつた。……

將軍に従つた軍參謀の一人、——穂積中佐は鞍の上に、春寒の曠野を眺めて行つた。が、遠い枯木立や、路ばたに倒れた石敢當も、中佐の眼には映らなかつた。それは彼の頭には、一時愛讀したスタンダールの言葉が、絶えず漂つて来るからだつた。

「私は勳章に埋つた人間を見ると、あれだけの勳章を手に入れるには、どの位××な事ばかりしたか、それが氣になつて仕方がない。……」

——ふと氣がつけば彼の馬は、ずつと將軍に遅れてゐた。中佐は軽い身震をすると、すぐに馬を急がせ出

した。丁度當り出した薄日の光に、飾緒の金をきらめかせながら。

三 陣中の芝居

明治三十八年五月四日の午後、阿吉牛堡に駐つてゐた、第×軍司令部では、午前に招魂祭を行つた後、餘興の演藝會を催す事になつた。會場は支那の村落に多い、野天の戲臺を應用した。急拵への舞臺の前に、天幕を張り渡したに過ぎなかつた。が、その蓆敷きの會場には、もう一時の定刻前に、大勢の兵卒が集まつてゐた。

この薄汚いカアキイ服に、銃劔を下げた兵卒の群は、殆ど看客と呼ぶのさへも、皮肉な感じを起させる程、みじめな看客に違ひなかつた。が、それだけ又彼等の顔に、晴れ晴れした微笑が漂つてゐるのは、一層可憐な氣がするのだつた。

將軍を始め軍司令部や、兵站監部の將校たちは、外國の從軍武官たちと、その後の小高い土地に、ずらりと椅子を並べてゐた。此處には參謀肩章だの、副官の襷だのが見えるだけでも、一般兵卒の看客席より、遙かに空氣が花やかだつた。殊に外國の從軍武官は、愚物の名の高い一人でさへも、この花やかさを扶ける爲には、軍司令官以上の効果があつた。

將軍は今日も上機嫌だつた。何か副官の一人と話しながら、時時番付を開いて見てゐる、——その眼にも始

終日光のやうに、人懐こい微笑が浮んでゐた。

その内に定刻の一時になつた。櫻の花や日の出をとり合せた、手際の好い幕の後では、何度か鳴りの悪い拍子木が響いた。と思ふとその幕は、餘興掛の少尉の手に、するすると一方へ引かれて行つた。

舞臺は日本の室内だつた。それが米屋の店だと云ふ事は、一隅に積まれた米俵が、僅かに暗示を與へてゐた。其處へ前垂掛けの米屋の主人が、「お銅や、お銅や」と手を打ちながら、彼自身よりも背の高い、銀杏返しの下女を呼び出して來た。それから、——筋は話すにも足りない、一場の俄が始まつた。

舞臺の悪ふざけが加はる度に、蓆敷の上の看客からは、何度も笑聲が立ち昇つた。いや、その後の將校たちも大部分は笑を浮べてゐた。が、俄はその笑と競ふやうに、益滑稽を重ねて行つた。さうしてとうとうしまひには、越中禪一つの主人が、赤い湯もじ一つの下女と相撲をとり始める所になつた。

笑聲は更に高まつた。兵站監部の或大尉などは、この滑稽を迎へる爲、殆ど拍手さへしようとした。丁度その途端だつた。突然烈しい叱咤の聲は、湧き返つてゐる笑の上へ、鞭を加へるやうに響き渡つた。

「何だ、その醜態は？ 幕を引け！ 幕を！」
聲の主は將軍だつた。將軍は太い軍刀の欄に、手袋の兩手を重ねた儘、儼然と舞臺を睨んで居た。幕引きの少尉は命令通り、呆氣にとられた役者たちの前へ、倉皇とさつきの幕を引いた。同時に蓆敷の看客もかすかなどよめきの聲の外は、ひつそりと静まり返つてしまつた。

外國の従軍武官たちと、一つ席にゐた穂積中佐は、この沈黙を氣の毒に思つた。俄は勿論彼の顔には、微笑さへも浮ばせなかつた。しかし彼は看客の興味に、同情を持つだけの餘裕はあつた。では外國武官たちに、裸の相撲を見せても好いか？——さう云ふ體面を重ずるには、何年か歐洲に留學した彼は、餘りに外國人を知り過ぎてゐた。

「どうしたのですか？」

佛蘭西の將校は驚いたやうに、穂積中佐をふりかへつた。

「將軍が中止を命じたのです。」

「なぜ？」

「下品ですから、——將軍は下品な事は嫌ひなのです。」

さう云ふ内にもう一度、舞臺の拍子木が鳴り始めた。靜まり返つてゐた兵卒たちは、この音に元氣を取り直したのか、其處此處から拍手を送り出した。穂積中佐もほつとしながら、彼の周圍を眺め廻した。周圍に並んだ將校たちは、いづれも幾分か氣兼ねさうに、舞臺を見たり見なかつたりしてゐる、——その中にたつた一人、やはり軍刀へ手をのせた儘、丁度幕の開き出した舞臺へ、ちつと眼を注いでゐた。

次の幕は前と反對に、人情がかつた舊劇だつた。舞臺には唯屏風の外に、火のともつた行燈が置いてあつた。其處に頬骨の高い年増が一人、猪首の町人と酒を飲んでゐた。年増は時々金切聲に「若旦那」と相手の

町人を呼んだ、さうして、——穂積中佐は舞臺を見ずに、彼自身の記憶に浸り出した。柳盛座の二階の手すりには、十二三の少年が倚りかかつてゐる。舞臺には櫻の釣り枝がある。火影の多い町の書割がある。その中に二錢の團洲と呼ばれた、和光の不破伴左衛門が、編笠を片手に見得をしてゐる。少年は舞臺に見入つた儘、殆ど息さへもつかうとしない。彼にもそんな時代があつた。……

「餘興やめ！ 幕を引かんか？ 幕！ 幕！」

將軍の聲は爆彈のやうに、中佐の追憶を打ち碎いた。中佐は舞臺へ眼を返した。舞臺には既に狼狽した少尉が幕と共に走つてゐた。その間にちらりと屏風の上へ、男女の帯の懸かつてゐるのが見えた。

中佐は思はず苦笑した。「餘興掛も氣が利かなすぎる。男女の相撲さへ禁じてゐる將軍が、濡れ場を黙つて見てゐる筈がない。——そんな事を考へながら、叱聲の起つた席を見ると、將軍はまだ不機嫌さうに、餘興掛の一等主計と、何か問答を重ねてゐた。

その時ふと中佐の耳は、口の悪い亞米利加の武官が、隣に坐つた佛蘭西の武官へ、かう話しかける聲を捉へた。

「將軍Nも樂ぢやない。軍司令官兼檢閲官だから、——」

やつと三幕目が始まつたのは、それから十分の後だつた。今度は木がはひつても、兵卒たちは拍手を送らなかつた。

「可哀さうに。監視されながら、芝居を見てゐるやうだ。」——穂積中佐は憐むやうに、殆ど大きな話聲も立てない、カアキイ服の群を見渡した。

三幕目の舞臺は黒幕の前に、柳の木が二三本立ててあつた。それは何處から伐つて来たか、生々しい實際の葉柳だつた。其處に警部らしい髯だらけの男が、年の若い巡查をいぢめてゐた、穂積中佐は番附の上へ、不審さうに眼を落した。すると番附には「ピストル強盗清水定吉、大川端捕物の場」と書いてあつた。

年の若い巡查は警部が去ると、大仰に天を仰ぎながら、長長と浩歎の獨白を述べた。何でもその意味は長い間、ピストル強盗をつけ廻してゐるが、逮捕出来ないとか云ふのだつた。それから人影でも認められたのか、彼は相手に見つからない爲、一まづ大川の水の中へ姿を隠さうと決心した。さうして後の黒幕の外へ、頭からさきに這ひこんでしまつた。その恰好は眞眞眼に見ても、大川の水へ没するよりは、蚊帳へはひるのに適當してゐた。

空虚の舞臺には少時の間、波の音を思はせるらしい。大太鼓の音がするだけだつた。と、忽ち一方から、盲人が一人歩いて来た。盲人は杖をつき立てながら、その儘向うへはひらうとする、——その途端に黒幕の外から、さつきの巡查が飛び出して来た。「ピストル強盗、清水定吉、御用だ！」——彼はさう叫ぶが早いはいきなり盲人へ躍りかかつた。盲人は咄咄に身構へをした。と思ふと眼がぱつちりあいた。「懺むらくは眼が小さ過ぎる。」——中佐は微笑を浮べながら、内心大人氣なる批評を下した。

舞臺では立ち廻りが始まつてゐた。ピストル強盗は誦名通り、ちやんとピストルを用意してゐた。二發、三發、——ピストルは續けさまに火を吐いた。しかし巡查は勇敢に、とうとう偽目くらに繩をかけた。兵卒たちはさすがにどよめいた。が、彼等の間からは、やはり聲一つかからなかつた。

中佐は將軍へ眼をやつた。將軍は今度も熱心に、ぢつと舞臺を眺めてゐた。しかしその顔は以前よりも、遙かに柔しみを湛へてゐた。

其處へ舞臺には一方から、署長とその部下とが駆けつけて来た。が、偽目くらと格闘中、ピストルの彈丸に中つた巡查は、もう昏昏と倒れてゐた。署長はすぐに活を入れた。その間に部下はいち早く、ピストル強盗の繩尻を捉へた。その後は署長と巡查との、舊劇めいた愁歎場になつた。署長は昔の名奉行のやうに、何か云ひ遣す事はないかと云ふ。巡查は故郷に母がある。と云ふ。署長は又母の事は心配するな、何かその外にも末期の際に、心遣りはないかと云ふ。巡查は何も云ふ事はない、ピストル強盗を捉へたのは、この上もない満足だと云ふ。

——その時ひつそりした場内に、三度將軍の聲が響いた。が、今度は叱聲の代りに、深い感激の嘆聲だつた。

「偉い奴ぢや。それでこそ日本男兒ぢや。」

穂積中佐はもう一度、そつと將軍へ眼を注いだ。すると日に焼けた將軍の頬には、涙の痕が光つてゐた。

「將軍は善人だ。」——中佐は軽い侮蔑の中に、明るい好意をも感じ出した。その時幕は悠悠と、盛んな喝采を浴びながら、舞臺の前に引かれて行つた。穂積中佐はその機会に、ひとり椅子から立ち上ると、會場の外へ歩み去つた。

三十分の後、中佐は紙巻を脚へながら、やはり同參謀の中村少佐と、村はづれの空地を歩いてゐた。

「第×師團の餘興は大成功だね。閣下は非常に喜んでゐられた。」

中村少佐はかう云ふ間も、カイゼル鬘の端をひねつてゐた。

「第×師團の餘興？ ああ、あのピストル強盗か？」

「ピストル強盗ばかりぢやない。閣下はあれから餘興掛を呼んで、もう一幕臨時にやれと云はれた。今度は

赤垣源藏だつたがね。何と云ふのかな、あれは？ 徳利の別れか？」

穂積中佐は微笑した眼に、廣い野原を眺めまはした。もう高梁の青んだ土には、かすかに陽炎が動いてゐた。

「それも亦大成功さ。——」

中村少佐は話し續けた。

「閣下は今夜も七時から、第×師團の餘興掛に、寄席的な事をやらせるさうだぜ。」

「寄席的？ 落語でもやらせるのかね？」

「何、講談ださうだ。水戸黄門諸國めぐり——」

穂積中佐は苦笑した。が、相手は無頓着に、元氣のよい口調を續けて行つた。

「閣下は水戸黄門が好きなのさうだ。わしは人臣としては、水戸黄門と加藤清正とに、最も敬意を拂つてゐる。——そんな事を云つてゐられた。」

穂積中佐は返事をせずに、頭の上の空を見上げた。空には柳の枝の間に、細い雲母雲が吹かれてゐた。中

佐はほつと息を吐いた。

「春だね、いくら満洲でも。」

「内地はもう裕を着てゐるだらう。」

中村少佐は東京を思つた。料理の上手な細君を思つた。小學校へ行つてゐる子供を思つた。さうして——かすかに憂鬱になつた。

「向うに杏が咲いてゐる。」

穂積中佐は嬉しさに、遠い土堀に簇つた、赤い花の塊りを指した。Ecoule-noir, Madeline…… ————中佐の心には何時の間にか、ユウゴオの歌が浮んでゐた。

四 父と子と

大正七年十月の或夜、中村少將、——當時の軍參謀中村少佐は、西洋風の應接室に、火のついたハヴァナ

を脚へながら、ぼんやり安樂椅子によりかかつてゐた。

二十年餘りの閑日月は、少將を愛すべき老人にしてゐた。殊に今夜は和服のせみか、禿げ上つた額のあたりや、肉のたるんだ口のまはりには、一層好人物じみた氣色があつた。少將は椅子の背に靠れた儘、ゆつくり周囲を眺め廻した。それから、——急にため息を洩らした。

室の壁には何處を見ても、西洋の畫の複製らしい、寫眞版の額が懸けてあつた。その或物は窓に倚つた、寂しい少女の肖像だつた。又或物は糸杉の間に、太陽の見える風景だつた。それらは皆電燈の光に、この古めかしい應接室へ、何か妙に薄ら寒い、嚴肅な空氣を與へてゐた。が、その空氣はどう云ふ譯か、少將には愉快でないらしかつた。

無言の何分かが過ぎ去つた後、突然少將は室外に、かすかなノックの音を聞いた。

「おはひり。」

その聲と同時に室の中へは、大學の制服を着た青年が一人、背の高い姿を現した。青年は少將の前に立つと、其處にあつた椅子に手をやりながら、ぶつきらぼうにかう云つた。

「何か御用ですか？ お父さん。」

「うん。まあ、其處におかけ。」

青年は素直に腰を下した。

「何です。」

少將は返事をする爲に、青年の胸の金釦へ、不審らしい眼をやつた。

「今日は？」

「今日は河合の——お父さんは御存知ないでせう。僕と同じ文科の學生です。河合の追悼會があつたものですから、今歸つたばかりなのです。」

少將はちよいと頷いた後、濃いハヴァナの煙を吐いた。それからやつと大儀さうに、肝腎の用向きを話し始めた。

「この壁にある畫だね、これはお前が懸け換へたのかい？」

「ええ、まだ申し上げませんでした。今朝僕が懸け換へたのです。いけませんか？」

「いけなくはない。いけなくはないがね、N閣下の額だけは懸けて置きたい、と思ふ。」

「この中へですか？」

青年は思はず微笑した。

「この中へ懸けてはいけなにかね？」

「いけないと云ふ事ありませんが、——しかしそれは可笑しいでせう。」

「肖像畫はあすこにもあるやうぢやないか？」

少將は爐の上の壁を指した。その壁には額縁の中に、五十何歳かのレムブランドが、悠悠と少將を見下してゐた。

「あれは別です。N將軍と一しよにはなりません。」

「さうか？ ぢや仕方がない。」

少將は容易に斷念した。が、又葉巻の煙を吐きながら、靜かにかう話を續けた。

「お前は、——と云ふよりもお前の年輩のものは、閣下をどう思つてゐるね？」

「別にどうも思つてはるません。まあ、偉い軍人でせう。」

青年は老いた父の眼に、晩酌の酔を感じてゐた。

「それは偉い軍人だがね、閣下は又實に長者らしい、人懐こい性格も持つてゐられた。……」

少將は殆ど、感傷的に、將軍の逸話を話し出した。それは日露戦役後、少將が那須野の別荘に、將軍を訪れた時の事だつた。其の日別荘へ行つて見ると、將軍夫妻は今し方、裏山へ散歩にお出かけになつた、——さう云ふ別荘番の話だつた。少將は案内を知つてゐたから、早速裏山へ出かける事にした。すると二三町行つた所に、綿服を纏つた將軍が、夫人と一しよに佇んでゐた。少將はこの老夫妻と、少時の間立ち話をした。が、將軍は何時まで立つても、其處を立ち去らうとしなかつた。「何か此處に用でもおありですか？」とかう少將が尋ねると、將軍は急に笑ひ出した。「實はね、今妻が憚りへ行きたいと云ふものだから、わし達について來た學

生達か、場所を探しに行つてくれた所ぢや。丁度今頃、——もう路側に稔栗などが、轉がつてゐる時分だつた。

少將は眼を細くした儘、嬉しさに獨り微笑した。——其處へ色づいた林の中から、勢の好い中學生が、四五人同時に飛び出して來た。彼等は少將に頓着せず、將軍夫妻をとり圍むと、口口に彼等が夫人の爲に、見つけて來た場所を報告した。その上それぞれ自分の場所へ、夫人に來て貰ふやうに、無邪氣な競争さへ始めるのだつた。「ぢやあなた方に籤を引いて貰はう。——將軍はかう云つてから、もう一度少將に笑顔を見せた。……」

「それは罪のない話ですね。だが西洋人には聞かされないな。」
青年も笑はずにはゐられなかつた。
「まあそんな調子でね、十二三の中學生でも、N閣下と云ひさへすれば、叔父さんのやうに懐いてゐたものだ。閣下はお前がたの思ふやうに、決して一介の武弁ぢやない。」
少將は樂しさに話し終ると、又爐の上のレムブランドを眺めた。
「あれもやはり人格者かい？」
「ええ、偉い畫描きです。」

「N閣下などとはどうだらう？」
青年の顔には當惑の色が浮んだ。
「どうと云つても困りますが、——まあN將軍などよりも、僕等に近い氣もちのある人です。」

將 軍

「閣下のお前がたに遠いと云ふのは？」

「何と云へば好いのですか？——まあ、こんな點ですね、たとへば今日追悼會のあつた、河合と云ふ男などは、やはり自殺してゐるのです。が、自殺する前に——」

青年は眞面目に父の顔を見た。

「寫眞をとる餘裕はなかつたやうです。」

今度は機嫌の好い少將の眼に、ちらりと當惑の色が浮んだ。

「寫眞をとつても好いぢやないか？ 最後の記念と云ふ意味もあるし、——」

「誰の爲にですか？」

「誰と云ふ事もないが、——我を始め閣下の最後の顔は見たいぢやないか？」

「それは少くともN將軍は、考ふべき事ではないと思ふのです。僕は將軍の自殺した氣もちは、幾分かわかるやうな氣がします。しかし寫眞をとつたのはわかりません。まさか、死後その寫眞が、何處の店頭にも飾られる事を、——」

少將は殆ど、憤然と、青年の言葉を遮つた。

「それは酷だ。閣下はそんな俗人ぢやない。徹頭徹尾至誠の人だ。」

しかし青年は不相變、顔色も聲も落着いてゐた。

「無論俗人ぢやなかつたでせう。至誠の人だつた事も想像出來ます。唯その至誠が僕等には、どうもはつきりのみこめないのです。僕等より後の人間には、猶更通じるとは思はれません。……」

父と子とは少時の間、氣まつい沈黙を續けてゐた。

「時代の違ひだね。」

少將はやつとつけ加へた。

「ええ、まあ、——」

青年はかう云ひかけたなり、ちよいと窓の外のはひに、耳を傾けるやうな眼つきになつた。

「雨ですね。お父さん。」

「雨？」

少將は足を伸ばした儘、嬉しさうに話頭を轉換した。

「又榎椀が落ちなければ好いが、……」

葱

おれは締切日を明日に控へた今夜、一氣呵成にこの小説を書かうと思ふ。いや、書かうと思ふのではない。書かなければならなくなつてしまつたのである。では何を書くかと云ふと、——それは次の本文を讀んで頂くより外に仕方はない。

神田神保町邊の或カツフエに、お君さんと云ふ女給仕がある。年は十五とか十六とか云ふが、見た所はもつと大人らしい。何しろ色が白くつて、眼が涼しいから、鼻の先が少し上を向いてゐても、兎に角一通りの美人である。それが髪をまん中から割つて、忘れな草の簪をさして、白いエプロンをかけて、自動ピアノの前に立つてゐる所は、とんと竹久夢二君の畫中の人物が抜け出したやうだ。——とか何とか云ふ理由から、このカツフエの定連の間には、夙に通俗小説と云ふ譯名が出来てゐるらしい。尤も譯名にはまだまだいろいろある。簪の花が花だからわすれな草。活動寫眞に出る亞米利加の女優に似てゐるから、ミス・メリイ・ピ

ツクフオオド。このカツフエに缺くべからものだから、角砂糖。ETC. ETC.

この店にはお君さんの外にも、もう一人年上の女給仕がある。これはお松さんと云つて、器量は到底お君さんの敵ではない。まづ白麵麩と黒麵麩程の相違がある。だから一つカツフエに勤めてゐても、お君さんとお松さんとは、祝儀の収入が非常に違ふ。お松さんは勿論、この収入の差に平かなるを得ない。その不平が高じた所から、邪推もこの頃廻すやうになつてゐる。

或夏の午後、お松さんの持ち場の卓子にゐた外國語學校の生徒らしいのが、巻煙草を一本啣へながら、燐寸の火をその先へ移さうとした。處が生憎その隣の卓子では、扇風機が勢よく廻つてゐるものだから、燐寸の火は其處まで届かない内に、何時も風に消されてしまふ。そこでその卓子の傍を通りかかつたお君さんは、暫くの間風をふせく爲に、客と扇風機との間へ足を止めた。その暇に巻煙草へ火を移した學生が、日に焼けた頬へ微笑を浮かべながら「難有う」と云つた所を見ると、お君さんのこの深切が先方にも通じたのは勿論である。すると帳場の前へ立つてゐたお松さんが、丁度其處へ持つて行く筈のアイスクリームの皿を取り上げると、お君さんの顔をじろりと見て「あなた持つていらつしやいよ」と、嬌嗔を發したらしい聲を出した。——こんな葛藤が一週間に何度もある。従つてお君さんは、滅多にお松さんには口をきかない。何時も自動ピアノの前に立つては、場所がらだけに多い學生の客に、無言の愛敬を賣つてゐる。或は業腹らしいお松さんに無言ののろけを買はせてゐる。

が、お君さんとお松さんとの仲が悪いのは、何もお松さんが嫉妬するせりばかりではない。お君さんも内心、お松さんの趣味の低いのを軽蔑してゐる。あれは全く尋常小學を出てから、浪花節を聴いたり、蜜豆を食べたり、男を追つかけたりばかりしてゐた、そのせりに違ひない。かうお君さんは確信してゐる。ではそのお君さんの趣味と云ふのが、どんな種類のものかと思つたら、暫くこの賑やかなカツフェを去つて、近所の路地の奥にある、或女髪結の二階を覗いて見るが好い、何故かと云へばお君さんは、その髪結の二階に間借をして、カツフェへ勤めてゐる間の外は、始終其處に起臥してゐるからである。

二階は天井の低い六疊で、西日のさす窓から外を見ても、瓦屋根の外は何も見えない。その窓際の壁へよせて、更紗の布をかけた机がある。尤もこれは便宜上、假に机と呼んで置くが、實は古色を帯びた茶ふ臺に過ぎない。その茶ふ——机の上には、これも餘り新しくない西洋綴の書物が並んでゐる。「不如歸」「藤村詩集」「松井須磨子の一生」「新朝顔日記」「カルメン」「高い山から谷底見れば」——あとは婦人雜誌が七八冊あるばかりで、残念ながらおれの小説集などは、唯一冊も見當らない。それからその机の側にある、とうにニスの剥げた茶籠の上には、頸の細い硝子の花立てがあつて、花びらの一つとれた造花の百合が、手際よくその中にさしてある。察する所この百合は、花びらさへまだ無事であらう、今でもあのカツフェの卓子に飾られてゐたのに相違あるまい。最後にその茶籠の上の壁には、いづれも雑誌の口繪らしいのが、ピンで三四枚とめてある。一番まん中なのは、鍋木清方君の元祿女で、その下に小さくなつてゐるのは、ラファ

エルのマドンナか何からしい。と思ふとその元祿女の壁には、北村四海君の彫刻の女が御隣に控へたベエトオフエンへ滴る如き秋波を送つてゐる。但しこのベエトオフエンは、唯お君さんがベエトオフエンだと思つてゐるだけで、實は亞米利加の大統領ウッドロウ・ウィルソンなのだから、北村四海君に對しても、何とも御氣の毒の至に堪へない。

かう云へばお君さんの趣味生活が、如何に藝術的色彩に富んでゐるか、問はずして既に明かであらうと思ふ。又實際お君さんは、毎晩遅くカツフェから歸つて來ると、必このベエトオフエン alias ウィルソンの肖像の下に、「不如歸」を讀んだり、造花の百合を眺めたりしながら、新派悲劇の活動寫眞の月夜の場面よりもサンテイマンタルな、藝術的感激に耽るのである。

櫻頃の或夜、お君さんはひとり机に向つて、殆一番鶏が啼く頃まで、桃色をしたレター・ペエパにせつせとペンを走らせ續けた。が、その書き上げた手紙の一枚が、机の下に落ちてゐた事は、朝になつてカツフェへ出て行つた後も、遂にお君さんには氣がつかかなかつたらしい。すると窓から流れこんだ春風が、その一枚のレター・ペエパを翻して、鬱金木綿の蔽ひをかけた鏡が二つ並んでゐる梯子段の下まで吹き落してしまつた。下にゐる女髪結は、頻頻としてお君さんの手に落ちる艶書のある事を心得てゐる。だからこの桃色をした紙も、恐らくはその一枚だらうと思つて、好奇心からわざわざ眼を通して見た。すると意外にもこれはお君さんの手蹟らしい。ではお君さんが誰かの艶書に返事を認めたのかと思ふと、「武男さんに御別れなす

つた時の事を考へると、私は涙で胸が張り裂けるやうでござります」と書いてある。果然、お君さんは殆ど徹夜をして、浪子夫人に與ふべき慰問の手紙を作つたのであつた。――

おれはこの挿話を書きながら、お君さんのサンテイマンリズムに微笑を禁じ得ないのは事實である。が、おれの微笑の中には、寸毫も悪意は含まれてゐない。お君さんのゐる二階には、造花の百合や、「藤村詩集」や、ラファエルのマドンナの寫眞の外には、自炊生活に必要な、臺所道具が竝んでゐる。その臺所道具の象徴する、世智辛い東京の實生活は、何度今日までにお君さんへ迫害を加へたか知れなかつた。が、落莫たる人生も、涙の霰を透して見る時は、美しい世界を展開する。お君さんはその實生活の迫害を逃れる爲に、この藝術的感激の涙の中へ身を隠した。其處には一月六圓の間代もなければ、一升七十錢の米代もない。カルメンは電燈代の心配もなく、氣樂にカスターネットを鳴らしてゐる。浪子夫人も苦勞はするが、藥代の工面が出来ない次第ではない。一言にして云へばこの涙は、人間苦の黄昏のおぼろめく中に、人間愛の燈火をつつましやかにともしてくれる。ああ、東京の町の音も全く何處かへ消えてしまふ眞夜中、涙に濡れた眼を擧げながら、うす暗い十燭の電燈の下に、たつた一人返子の海風とコルドヴァの杏竹桃とを夢みてゐた、お君さんの姿を想像――畜生、悪意がない所か、うっかりしてゐるとおれまでも、サンテイマンタルになり兼ねないぞ。元來世間の批評家には情味がないと云はれてゐる。頗る理智的なおれなのだが。そのお君さんが或冬の夜、遅くなつてカツフェから歸つて來ると、始は例の如く机に向つて、「松井須磨

子の一生」か何か讀んでゐたが、まだ一頁と行かない内に、どう云ふ訣かその書物に忽ち愛想をつかした如く、邪慳に疊の上へ抛り出してしまつた。と思ふと今度は横坐りに坐つた儘、机の上に頬杖をついて、壁の上のウィール――ベトオフエンの肖像を冷淡にぼんやり眺め出した。これは勿論唯事ではない。お君さんはあのカツフェを解備される事になつたのであらうか、さもなければお松さんのいぢめ方が一層惡辣になつたのであらうか。或は又さもなければ齶齒でも痛み出して來たのであらうか。いや、お君さんの心を支配してゐるのは、さう云ふ俗臭を帯びた事件ではない。お君さんは浪子夫人の如く、或は又松井須磨子の如く、戀愛に苦しんでゐるのである。ではお君さんは誰に心を寄せてゐるかと云ふと――幸お君さんは壁の上のベトオフエンを眺めた儘、暫くは身動きもしさうはないから、その間おれは大急ぎで、ちよいとこの光榮ある戀愛の相手を紹介しよう。

お君さんの相手は田中君と云つて。無名の――藝術家である。何故かと云ふと田中君は、詩も作る、ヴァイオリンも弾く、油繪の具も使ふ、役者も勤める、歌骨牌も巧い、薩摩琵琶も出來ると云ふ才人だから、どれが本職でどれが道樂だか、鑑定の出來るものは一人もゐない。従つて又人物も、顔は役者の如くのつべりしてゐて、髪は油繪の具の如くてらてらしてゐて、聲はヴァイオリンの如く優しくつて、言葉は詩の如く氣が利いてゐて、女を口説く事は歌骨牌をとる如く敏捷で、金を借り倒す事は薩摩琵琶をうたふ如く勇壯活潑を極めてゐる。それが黒い鍔廣の帽子をかぶつて、安物らしい獵服を着用して、葡萄酒のボヘミアン・ネクタ

イを結んで——と云へば大抵わかりさうなものだ。思ふにこの田中君の如きは既に一種のタイプなのだから神田本郷邊のバアやカツフェ、青年會館や音楽學校の音楽會（但し一番安い切符の席に限るが）兜屋や三會堂の展覽會などへ行くと、必二三人はこの連中が、傲然と俗衆を睥睨してゐる。だからこの上明瞭な田中君の肖像が欲しければ、さう云ふ場所へ行つて見るが好い。おれが書くのはもう眞平御免だ、第一おれが田中君の紹介の勞を執つてゐる間に、お君さんは何時か立上つて、障子を開けた窓の外の寒い月夜を眺めてゐるのだから。

互屋根の上の月の光は、頸の細い硝子の花立てにさした造花の百合を照らしてゐる。壁に貼つたラファエルの小さなマドンナを照らしてゐる。さうして又お君さんの上を向いた鼻を照らしてゐる。が、お君さんの涼しい眼には、月の光も映つてゐない。霜の下りたらしい互屋根も、存在しないのと同じ事である。田中君は今夜カツフェから、お君さんを此處まで送つて来た。さうして明日の晩は二人で、楽しく暮さうと云ふ約束までした。明日は丁度一月に一度あるお君さんの休日だから、午後六時に小川町の電車停留場で落合つて、それから芝浦にかかつてゐる伊太利人のサアカスを見に行かうと云ふのである。お君さんは今日までに、未曾男と二人で遊びに出かけた覚えなどはない。だから明日の晩田中君と、世間の戀人同士のやうに、つれ立つて夜の曲馬を見に行く事を考へると、今更のやうに心臓の鼓動が高くなつて来る。お君さんにとつて田中君は、寶窟の扉を開くべき祕密の呪文を心得てゐるアリ・ババと更に違ひはない。その呪文が唱へられた時、

如何なる未知の歡樂境がお君さんの前に出現するか。——さつきから月を眺めて月を眺めないお君さんが、風に煽られた海の如く、或は又將に走らんとする乗合自動車のモオタアの如く、轟く胸の中に描いてゐるのは、實にこの来るべき不可思議の世界の幻であつた。其處には薔薇の花の咲き亂れた路に、養殖眞珠の指環だの翡翠まがひの帯止めだのが、數限りもなく散亂してゐる。夜鶯の優しい聲も、既に三越の旗の上から、蜜を滴すやうに聞え始めた。橄欖の花の匂ひの中に大理石を疊んだ宮殿では、今やミスタア・ダグラスフェアバンク스와森律子嬢との舞踏が、愈佳境に入らうとしてゐるらしい。……

が、おれはお君さんの名譽の爲につけ加へる。その時お君さんの描いた幻の中には、時々暗い雲の影が、一切の幸福を脅すやうに、底氣味悪く去來してゐた。成程お君さんは田中君を戀してゐるのに違ひない。しかしその田中君は、實はお君さんの藝術的感激が圓光を頂かせた田中君である。詩も作る、ヴァイオリンも弾く、油繪の具も使ふ、役者も勤める、歌骨牌も巧い、薩摩琵琶も出来るサア・ランスロットである。だからお君さんの中にある處女の新鮮な直観性は、どうかするとこのランスロットの頗怪しげな正體を感じる事が出来ないでもない。暗い不安の雲の影は、かう云ふ時にお君さんの幻の中を通りすぎる。が、遺憾ながらその雲の影は、現れるが早いか消えてしまふ。お君さんはいくら大人じみてゐても、十六とか十七とか云ふ少女である。しかも藝術的感激に充ち満ちてゐる少女である。着物を雨で濡らす心配があるか、ライン河の入日の繪端書に感歎の聲を洩らす時の外は、滅多に雲の影などへ心を止めないのも不思議ではない。況

や今は薔薇の咲き亂れてゐる路に、養殖眞珠の指環だの翡翠まがひの帶止めだのが——以下は前に書いた通りだから、其處を讀み返して頂きたい。

お君さんは長い間、シヤヴァンヌ聖・ジュヌヴィヴの如く、月の光に照らされた瓦屋根を眺めて立つてゐたが、やがて噎を一つすると、窓の障子をばたりとしまして、又元の机の際へ横坐りに坐つてしまつた。それから翌日の午後六時までお君さんが何をしてゐたか、その間の詳しい消息は、残念ながらおれも知つてゐない。何故作者たるおれが知つてゐないかと云ふと——正直に云つてしまへ。おれは今夜中にこの小説を書き上げなければならぬからである。

翌日の午後六時、お君さんは怪しげな紫紺の御召のコートの上にクリイム色の肩掛をして、何時もよりはそはそはと、もう夕暗に包まれた小川町の電車停留場へ行つた。行くとき既に田中君は、例の如く鰐廣の黒い帽子を目深くかぶつて、洋銀の握りのついた細い杖をかいこみながら、綿の荒い半オオヴァの襟を立てて、赤い電燈のともつた下に、ちやんと佇んで待つてゐる。色の白い顔が何時もより一層又磨きがかかつて、かすかなに香水の匂までさせてゐる容子で、今夜は格別身じまひに注意を拂つてゐるらしい。

「御待たせして？」

お君さんは田中君の顔を見上げると、息のはずんでゐるやうな聲を出した。

「なあに。」

田中君は大様な返事をしたが、何とも判然しない微笑を含んだ眼で、ちつとお君さんの顔を眺めた。それから急に身ぶるひを一つして、

「歩かう、少し。」

とつけ加へた。いや、つけ加へたばかりではない。田中君はもうその時には、アアク燈に照られた人通りの多い往來を、須田町の方へ向つて歩き出した。サアカスがあるのは芝浦である。歩くにしても此處からは、神田橋の方へ向つて行かなければならない。お君さんはまだ立止つた儘、埃風に蹴るクリイム色の肩掛へ手をやつて、

「そつち？」

と不思議さうに聲をかけた。が、田中君は肩越しに、

「ああ。」

と軽く答へたが、依然として須田町の方へ歩いて行く。そこでお君さんも外に仕方がないから、すぐに田中君へ追ひつくと、葉を振つた柳の並樹の下を一しよにいそと歩き出した。すると又田中君は、あの何とも判然しない微笑を眼の中に漂はせて、お君の横顔を窺ひながら、

「お君さんには御氣の毒だけでもね、芝浦のサアカスは、もう昨夜で済まひなんださうだ。だから今夜は僕の知つてゐる家へ行つて、一しよに御飯でも食べようぢやないか。」

「さう、私どつちでも好いわ。」

お君さんは田中君の手が、そつと自分の手を捕へたのを感じながら、希望と恐怖とにふるへてゐる、かすかな聲でかう云つた。と同時に又お君さんの眼にはまるで「不如歸」を讀んだ時のやうな、感動の涙が浮んで来た。この感動の涙を透して見た、小川町、淡路町、須田町の往來が、如何に美しかつたかは問ふを待たない。歳暮大賣出しの樂隊の音、目まぐるしい仁丹の廣告電燈、クリスマスを祝ふ杉の葉の飾、蜘蛛手に張つた萬國國旗、飾窓の中のサンタ・クロス、露店に竝んだ繪端書や日曆——すべてのものがお君さんの眼には、壯大な戀愛の歡喜をうたひながら、世界のはてまでも燦びやかに續いてゐるかと思はれる。今夜に限つて天上の星の光も冷たくない。時時吹きつける埃風も、コオトの裾を巻くかと思ふと、忽ち春が歸つたやうな、暖い空氣に變つてしまふ。幸福、幸福、幸福……

その内にふとお君さんが氣がつくと、二人は何時か横町を曲つたと見えて、路幅の狭い町を歩いてゐる。さうしてその町の右側に、一軒の小さな八百屋があつて、明く瓦斯の燃えた下に、大根、人参、漬け菜、葱、小蕪、慈姑、牛蒡、八つ頭、小松菜、獨活、蓮根、里芋、林檎、蜜柑の類が堆く店に積み上げてある。その八百屋の前を通つた時、お君さんの視線は何かの拍子に、葱の山の中に立つてゐる、竹に燭奴を挟んだ札の上へ落ちた。札には墨黒黒と下手な字で「一束四錢」と書いてある。あらゆる物價が暴騰した今日、一束四錢と云ふ葱は減多にない。この至廉な札を眺めると共に、今まで戀愛と藝術とに酔つてゐた、お君さんの幸福

な心の中には、其處に潜んでゐた實生活が、突如としてその惰眠から覺めた。間髪を入れずとは正にこの謂である。薔薇と指環と夜鷺と三越の旗とは、刹那に眼底を拂つて消えてしまつた。その代り間代、米代、電燈代、炭代、肴代、醬油代、新聞代、化粧代、電車賃——その外ありとあらゆる生活費が、過去の苦しい經驗と一しよに、恰も火取蟲の火に集る如く、お君さんの小さな胸の中に、四方八方から群がつて来る。お君さんは思はずその八百屋の前へ足を止めた。それから呆氣にとられてゐる田中君を一人後に残して、鮮な瓦斯の光を浴びた青物の中へ足を入れた。しかも遂にはその華奢な指を伸して、一束四錢の札が立つてゐる葱の山を指さすと、「さすらひ」の歌でもうたふやうな聲で。

「あれを二束下さいな。」と云つた。

埃風の吹く往來には、黒い鍔廣の帽子をかぶつて、縞の荒い半オオバアの襟を立てた田中君が、洋銀の握りのある細い杖をかいこみながら、孤影悄然として立つてゐる。田中君の想像には、さつきからこの町のはづれにある、格子戸造の家が浮んでゐた。軒に松の家と云ふ電燈の出た、沓脱ぎの石が濡れてゐる。安普請らしい二階家である。が、かうして往來に立つてゐると、その小ぢんまりした二階家の影が、妙にだんだん薄くなつてしまふ。さうしてその後には徐に一束四錢の札を打つた葱の山が浮んで来る。と思ふと忽ち想像が破れて、一陣の埃風が過ぎると共に、實生活の如く辛辣な、眼に滲む如き葱の匂が實際田中君の鼻を打

つた。

「御待ち遠さま。」

隣むべき田中君は、世にも情無い眼つきをして、まるで別人でも見るやうに、じろじろとお君さんの顔を眺めた。髪を綺麗にまん中から割つて、忘れな草の簪をさした、鼻の少し上を向いてゐるお君さんは、クリム色の肩掛をちよいと願でおさへた儘、片手に二束八錢の葱を下げて立つてゐる。あの涼しい眼の中に嬉しさうな微笑を躍らせながら。

とうとうどうにか書き上げたぞ。もう夜が明けるのも間はあるまい。外では寒さうな鶏の聲がしてゐるが、折角これを書き上げて、いやに氣のふさぐのはどうしたものだ。お君さんはその晩何事もなく、又あの女髪結の二階へ歸つて来たが、カツフェの女給仕をやめない限り、その後も田中君と二人で遊びに出る事がないとは云へまい。その時の事を考へると、——いや、その時は又その時の事だ。おれが今いくら心配した所で、どうにもなる譯のものではない。まあこの儘でペンを擱かう。左様なら。お君さん。では今夜もあの晩のやうに、此處からいそいで出て行つて、勇ましく——批評家に退治されて來給へ。

MENSURA ZIOLI

僕は、船のサルーンのまん中に、テーブルをへだてて、妙な男と向ひあつてゐる。——
待つてくれ給へ。その船のサルーンと云ふのも、實はあまり確でない。部屋具合とか窓の外のか云ふもので、やつとさう云ふ推定を下しては見たものの、事によると、もつと平凡な場所かも知れないと云ふ懸念がある。いや、やつぱり船のサルーンかな。それでなくては、かう揺れる筈がない。僕は木下奎太郎君ではないから、何サンチメートル位な割合で、揺れるのかわからないが、揺れる事は、確かに揺れる。諺だと思つたら、窓の外の水平線が、上つたり下つたりするのを見るがいい。空が曇つてゐるから、海は煮切らない緑青色を、どこまでも擴げてゐるが、それと灰色の雲との一つになる所が、窓枠の圓形を、さつきから色色な弦に、切つて見せてゐる。その中に、空と同じ色をしたものが、ふはふは飛んでゐるのは、大方鷗か何かであらう。

さて、僕の向ひあつてゐる妙な男だが、こいつは、鼻の先へ度の強さうな近眼鏡をかけて、退屈らしく新聞を讀んでゐる。口髭の濃い、願の四角な、どこかで見た事のあるやうな男だが、どうしても思ひ出せない。

頭の手を、長くもじやもじや生やしてゐる所では、どうも作家とか畫家とか云ふ階級の一人ではないかと思はれる。が、それにしても着てゐる茶の肴廣が、何となく釣合はない。

僕は、暫、この男の方をぬすみ見ながら、小さい杯へついだ、甘い西洋酒を、少しづつなめてゐた。これは、こつちも退屈してゐる際だから、話しかけたいのは山山だが、相手の男の人相が、甚、無愛想に見えたので、暫、躊躇してゐたのである。

すると、角頭かくがしらの先生は、足をうんと踏みのばしながら、生あくびを噛みつぶすやうな聲で、「ああ、退屈だ」と云つた。それから、近眼鏡の下から、僕の顔をちよいと見て、又、新聞を読み出した。僕はその時、慙いさげ、こいつにはどこかで、會つた事があるのにちがひないと思つた。

サルーンには、二人の外に誰もゐない。

暫して、この妙な男は、又、「ああ、退屈だ」と云つた。さうして、今度は、新聞をテーブルの上へ抛り出して、ぼんやり僕の酒を飲むのを眺めてゐる。そこで僕は云つた。

「どうです。一杯おつきあひになりませんか。」

「いや、難有う。」彼は、飲むとも飲まないとも云はずに、ちよいと頭をさげて、「どうも、實際退屈しますな。これぢや向うへ着くまでに、退屈死に死んぢまふかも知れません。」

僕は、同意した。

「まだ、ZOILIAの土を踏むには、一週間以上かかりませう。私は、もう船が飽き飽きしました。」

「ゾイリア——ですか。」

「さやう、ゾイリア共和国です。」

「ゾイリアと云ふ國がありますか。」

「これは、驚いた。ゾイリアを御存知ないとは、意外ですな。一體どこへ御出でになる御心算か知りませんが、この船がゾイリアの港へ寄港するのは、餘程前からの慣例ですぜ。」

僕は當惑した。考へて見ると、何の爲にこの船に乗つてゐるのか、それさへもわからない。まして、ゾイリアなどと云ふ名前は、未嘗、一度も聞いた事のない名前である。

「さうですか。」

「さうですとも、ゾイリアと云へば、昔から、有名な國です。御承知でせうが、ホメロスに猛烈な悪口をあびせかけたのも、やつぱりこの國の學者です。今でも確ゾイリアの首府には、この人の立派な頌徳表が立つてゐる筈ですよ。」

僕は、角頭の見かけによらない博學に驚いた。

「すると、餘程古い國と見えますな。」

「ええ、古いです。何でも神話によると、始は蛙ばかり住んでゐた國ださうですが、パラス・アテネがそれ

を皆人間にしてやつたのださうです、だから、ゾイリア人の聲は、蛙に似てゐると云ふ人もありますが、これはあまり當になりません。記録に現れたのでは、ホメロスを退治した豪傑が、一番早いやうです。」

「では今でも相當な文明國ですか。」
「勿論です。殊に首府にあるゾイリア大學は、一國の學者の粹を抜いてゐる點で、世界のどの大學にも負けないでせう。現に、最近、教授連が考案した、價值測定器の如きは、近代の驚異だと云ふ評判です。尤も、

これは、ゾイリアで出るゾイリア日報のうけ賣りですが。」

「價值測定器と云ふのは何です。」

「文字通り、價值を測定する器械です。尤も主として、小説とか繪とかの價值を、測定するのに、使用されるやうですが。」

「どんな價值を。」

「主として、藝術的な價值をです。無論まだ其他の價值も、測定出來ますがね、ゾイリアでは、それを祖先の名譽の爲に、MENSURA ZOILLI と名をつけたさうです。」

「あなたは、そいつを御覽になつた事があるのですか。」

「いいえ、ゾイリア日報の挿繪で、見ただけです。なに見た所は、普通の計量器と、ちつとも變りはしません。あの人がある所に、本なりカンヴァスなりを、のせればよいのです。額縁や製本も、少しは測定上邪魔

になるさうですが、さう云ふ誤差は後で訂正するから、大丈夫です。」

「それは兎に角、便利なものですね。」

「非常に便利です。所謂文明の利器ですな。」角額は、ポケットから朝日を一本出して、口へくはへながら、「かう云ふものが出來ると、羊頭を掲げて狗肉を賣るやうな作家や畫家は、屏息せざるを得なくなります。何しろ、價值の大小が、明白に數字で現れるのですからな。殊にゾイリア國民が、早速これを税關に据えつけたと云ふ事は、最も賢明な處置だと思ひますよ。」

「それは、又何故でせう。」

「外國から輸入される書物や繪を、一一これにかけて見て、無價値な物は、絶対に輸入を禁止する爲です。この頃では、日本、英吉利、獨逸、奧太利、佛蘭西、露西亞、伊太利、西班牙、亞米利加、瑞典、諾威などから來る作品が、皆、一度はかけられるさうですが、どうも日本の物は、あまり成績がよくないやうです。我々のひいき眼では、日本には相當な作家や畫家がゐるさうに見えますがな。」

こんな事を話してゐる中に、サルーンの扉があいて、黒坊のポイがはひつて來た。藍色の夏服を着た、敏捷さうな奴である。ポイは、黙つて、脇にかかへてゐた新聞の一束を、テーブルの上へのせる。さうして、直又、扉の向うへ消えてしまふ。

その後で角額は、朝日の灰を落しながら、新聞の一枚をとりあげた、楔形文字のやうな、妙な字が行列し

た。所謂ゾイリア日報なるものである。僕は、この不思議な文字を読み得る點で、再この男の博學なのに驚いた。

「不相變、メンストラ・ゾイリの事ばかり出てゐますよ。」彼は、新聞を読み読み、こんな事を云つた。「ここに、先月日本で發表された小説の價値が、表になつて出てゐますぜ。測定技師の記要まで、附いて。」

「久米と云ふ男のは、あるでせうか。」

僕は、友だちの事が氣になるから、訊いて見た。

「久米ですか。「銀貨」と云ふ小説でせう。ありますよ。」

「どうです。價値は。」

「駄目ですな。何しろこの創作の動機が、人生のくだらぬ發見ださうですから。そしておまけに、早く大人がつて通がりさうなトーンが、作全體を低級な卑しいものにしてゐると書いてあります。」

僕は、不快になつた。

「お氣の毒ですな。」角願は冷笑した。「あなたの「煙管」もありますぜ。」

「何と書いてあります。」

「やつぱり似たやうなものですな。常識以外に何もないさうですよ。」

「へええ。」

「またかうも書いてあります。——この作者早くも濫作をなすか……。」

「おやおや。」

僕は、不快なのを通り越して、少し莫迦莫迦しくなつた。

「いや、あなたの方がかりでなく、どの作家や畫家でも、測定器にかかちや、往生です。とてもまやかしかりきませんから。いくら自分で、自分の作品を賞め上げたつて、現に價値が測定器に現はれるのだから、駄目です。無論、仲間同士のほめ合にしても、やつぱり評價表の事實を、變へる譯には行きません。まあ精、骨を折つて、實際價値があるやうなものを書くのですな。」

「しかし、その測定器の評價が、確だと云ふ事は、どうして、きめるのです。」

「それは、傑作をのせて見れば、わかります。モオパッサンの『女の一生』でも載せて見れば、すぐ針が最高價値を指しますから。」

「それだけです。」

「それだけです。」

僕は、黙つてしまつた。少少、角願の頭が、没論理に出來上つてゐるやうな氣がしたからである。が、又、別な疑問が起つて來た。

「ぢや、ゾイリアの藝術家の作つた物も、やはり測定器にかけられるのでせうか。」

「それは、ゾイリアの法律が禁じてゐます。」
「何故でせう。」

「何故と云つて、ゾイリア國民が承知しないのだから、仕方ありません。ゾイリアは昔から共和國ですか。Vox Populi, vox Dei を、文字通り遵奉する國ですから。」

角頭は、かう云つて、妙に微笑した。「尤も、彼等の作物を測定器へのせたら、針が最低價値を指したと云ふ風説もあります。もしさうだとすれば、彼等はデイレムマにかかつてゐる訣です。測定器の正確を否定するか、彼等の作物の價値を否定するか、どつちにしても、難有い話ぢやありません。——が、これは風説ですよ。」

かう云ふ拍子に、船が大きく揺れたので、角頭はあつと云ふ間に、椅子からころがり落ちた。するとその上へテーブルが倒れる。酒の罐と杯とがひつくりかへる。新聞が落ちる、窓の外の水平線が、どこかへ見えなくなる。皿の破れる音、椅子の倒れる音、それから、波の船腹へぶつかる音——、衝突だ。衝突だ。それとも海底噴火山の爆發かな。

氣がついて見ると、僕は、書齋のロッキング・チェアに腰をかけて St. John Ervine の The Critics と云ふ脚本を讀みながら、晝寢をしてゐたのである。船だと思つたのは、大方椅子の揺れるせりであらう。角頭は、久米のやうな氣もするし、久米でないやうな氣もする。これは、未だにわからない。

蜜 柑

或曇つた冬の日暮である。私は横須賀發上り二等客車の隅に腰を下して、ぼんやり發車の笛を待つてゐた。とうに電燈のついた客車の中には、珍らしく私の外に一人も乗客はゐなかつた。外を覗くと、うす暗いプラットフォームにも、今日は珍しく見送りの人影さへ跡を絶つて、唯、檻に入れられた小犬が一匹、時時悲しさに、吠え立ててゐた。これらはその時の私の心もちと、不思議な位似つかはしい景色だつた。私の頭の中には、云ひやうのない疲労と倦怠とが、まるで雪曇りの空のやうなどんよりした影を落してゐた。私は外套のポケットへちつと両手をつつこんだ儘、そこにはいつてゐる夕刊を出して見ようと云ふ元氣さへ起らなかつた。

が、やがて發車の笛が鳴つた。私はかすかな心の寛きを感じながら、後の窓枠へ頭をもたせて、眼の前の停車場がずるずると後ずさりを始めるのを待つともなく待ちかまへてゐた。處がそれよりも先にけたたましい日和下駄の音が、改札口の方から聞え出したと思ふと、間もなく車掌の何か云ひ罵る聲と共に、私の乗つてゐる二等客車の戸ががらりと開いて、十三四の小娘が一人、慌しく中へはいつて來た。と同時に一つ